

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第655集

はまいおいずみ

浜岩泉Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

2016

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第655集

浜岩泉Ⅲ遺跡発掘調査報告書

2016

(国土交通省東北地方整備局)三陸国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

浜岩泉Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して、平成25年度に発掘調査された田野畑村浜岩泉Ⅲ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。今回の調査によって、縄文時代中期・弥生時代後期・平安時代の遺構・遺物が多数確認され、周辺地域における過去の暮らしを知るための手がかりとなる貴重な資料を得ることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、田野畑村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成28年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 菅野洋樹

例 言

- 1 本報告書は、岩手県下閉伊郡田野畑村大芦14-1ほかに所在する浜岩泉Ⅲ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸沿岸道路建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、三陸国道事務所の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳における遺跡番号と今回の調査における遺跡略号は以下のとおりである。
遺跡番号…KG33-2047 遺跡略号…H I Ⅲ-13
- 4 発掘調査期間・面積・担当者は以下のとおりである。
調査期間：平成25年9月1日～12月20日
調査面積：2,070㎡
担当者：小林弘卓・森裕樹・立花雄太郎・星雅之・北田勲・鈴木博之
- 5 室内整理期間・担当者は以下のとおりである。
整理期間：平成25年11月1日～平成26年3月31日、平成26年6月1日～7月31日
担当者：小林弘卓・立花雄太郎
- 6 報告書の執筆は、第Ⅰ章を国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、第Ⅱ章を立花、第Ⅲ章を小林、Ⅳ・Ⅴ章を小林・星、Ⅵ章を株式会社加速器分析研究所、Ⅶ章を小林が担当・執筆した。本書の構成・編集は小林が行った。
- 7 試料の分析・鑑定は次の機関に依頼した。
石材・石質鑑定…花崗岩研究会
放射性炭素14年代測定…株式会社加速器分析研究所
- 8 基準点測量は、株式会社ダイヤに、航空写真撮影は東邦航空株式会社に委託した。
- 9 今回の発掘調査で出土した遺物と諸記録は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 10 調査成果は、既に当センターのホームページ、現地説明会資料、調査概報等に公表しているが、記載が異なる場合は本書の報告がすべてに優先する。

凡 例

- 1 遺構実測図の縮尺は以下のとおりで、一部異なるものは各図にスケールと縮尺を付した。
 - 竪穴住居跡…1/50
 - 竪穴住居跡の炉・カマド…1/25
 - 土坑…1/40
 - 土器埋設遺構…1/25
 - 焼土遺構…1/25
- 2 層位は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。
- 3 遺構図版中の土器は「RP」、石器および礫は「S」、鉄製品は「RM」と表記した。また、土層断面図内の「K」は攪乱を表す。
- 4 各遺物の縮尺は原則以下のとおりである。なお、紙幅の制約上、これに依らないものについては、個々にスケールを付した。
 - 土器・礫石器・鉄製品…1/3
 - 剥片石器・土製品…1/2
- 5 遺物観察表の法量について、残存値は()で、推定値は< >で表した。
- 6 遺構図版及び遺物図版中に網掛けをしている範囲については、個々に凡例を付している。
- 7 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づいている。
- 8 国土地理院発行の地形図を掲載したものには、図中に図幅名と縮尺を付した。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	
1 遺跡の位置と立地	1
2 周辺の地形	1
3 周辺の遺跡	3
III 調査・整理の方法	
1 野外調査	7
(1) 試掘・表土除去	7
(2) 遺構検出と精査	7
(3) 写真撮影	7
2 室内整理	7
(1) 遺構図面の整理	7
(2) 遺物の整理	7
(3) 写真撮影と整理	8
(4) 整理作業経過	8
IV 検出された遺構	
1 遺跡の概観	9
2 調査の概要	9
(1) 調査経過	9
(2) 基本層序	12
3 検出遺構	12
(1) 竪穴住居跡	12
(2) 土坑	22
(3) 土器埋設遺構	28
(4) 焼土遺構	29
V 出土遺物	
1 土器	49
2 石器・石製品	51
3 土製品	51
4 鉄製品	51
VI 自然科学分析	67
VII 総括	
1 平安時代	71
2 弥生時代	71
3 縄文時代	72
報告書抄録	115

図版目次

第1図	遺跡位置図	2	第21図	S K03~06土坑	45
第2図	地形分類図	4	第22図	S K07~12土坑	46
第3図	周辺の遺跡図	5	第23図	S K13~16・18土坑	47
第4図	調査範囲図	10	第24図	S K19~21土坑、 S F01土器埋設遺構、S N01埴土遺構	48
第5図	遺構配置図	11	第25図	S I01・02出土土器	52
第6図	S I01竪穴住居跡①	30	第26図	S I02~04出土土器	53
第7図	S I01②・02竪穴住居跡①	31	第27図	S I05・07出土土器	54
第8図	S I02竪穴住居跡②	32	第28図	S I07・08・10・11・13出土土器	55
第9図	S I02竪穴住居跡③	33	第29図	S I13・17出土土器	56
第10図	S I03・04竪穴住居跡	34	第30図	S I17・18・22、 S K11・16出土土器	57
第11図	S I05竪穴住居跡	35	第31図	遺構外出土土器①	58
第12図	S I07・08竪穴住居跡	36	第32図	遺構外出土土器②	59
第13図	S I09・10竪穴住居跡	37	第33図	S I01・02・07出土土器・石製品	60
第14図	S I11・12竪穴住居跡	38	第34図	S I08・11・13出土土器・石製品	61
第15図	S I13竪穴住居跡	39	第35図	S I17・22、 遺構外出土土器・石製品①	62
第16図	S I17竪穴住居跡①	40	第36図	遺構外出土土器・石製品②、 土製品、鉄製品	63
第17図	S I17②・18竪穴住居跡	41			
第18図	S I20・21竪穴住居跡	42			
第19図	S I22竪穴住居跡	43			
第20図	S I24・26竪穴住居跡、 S K01・02土坑	44			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	6	第4表	石器・石製品観察表	66
第2表	遺構一覧表	29	第5表	土製品・鉄製品観察表	66
第3表	土器観察表	64			

写真図版目次

写真図版 1	航空写真	77	写真図版23	S K 01～04土坑	99
写真図版 2	S I 01 竪穴住居跡①	78	写真図版24	S K 05～08土坑	100
写真図版 3	S I 01 竪穴住居跡②	79	写真図版25	S K 09～12土坑	101
写真図版 4	S I 02 竪穴住居跡①	80	写真図版26	S K 13～16土坑	102
写真図版 5	S I 02 竪穴住居跡②	81	写真図版27	S K 17～21土坑	103
写真図版 6	S I 02③・03 竪穴住居跡	82	写真図版28	S F 01 土器埋設遺構、 S N 01 焼土遺構、調査前風景	104
写真図版 7	S I 04 竪穴住居跡	83	写真図版29	調査終了後、現地説明会、 作業風景	105
写真図版 8	S I 05 竪穴住居跡	84	写真図版30	S I 01・02出土土器	106
写真図版 9	S I 07 竪穴住居跡	85	写真図版31	S I 03～05・07出土土器	107
写真図版10	S I 08 竪穴住居跡	86	写真図版32	S I 07・08・10・11・13出土土器	108
写真図版11	S I 09 竪穴住居跡	87	写真図版33	S I 13・17・18・22出土土器	109
写真図版12	S I 10 竪穴住居跡	88	写真図版34	S I 22、S K 11・13・15、 S F 01、遺構外出土土器①	110
写真図版13	S I 11 竪穴住居跡	89	写真図版35	遺構外出土土器②	111
写真図版14	S I 12 竪穴住居跡	90	写真図版36	S I 01・02・07出土石器・石製品	112
写真図版15	S I 13 竪穴住居跡①	91	写真図版37	S I 08・11・13・ 17・22出土石器・石製品	113
写真図版16	S I 13②・17 竪穴住居跡①	92	写真図版38	遺構外出土石器・石製品、 土製品、鉄製品	114
写真図版17	S I 17②・18 竪穴住居跡①	93			
写真図版18	S I 18②・20 竪穴住居跡①	94			
写真図版19	S I 20②・21・22 竪穴住居跡①	95			
写真図版20	S I 22 竪穴住居跡②	96			
写真図版21	S I 24 竪穴住居跡	97			
写真図版22	S I 26 竪穴住居跡	98			

I 調査に至る経過

浜岩泉Ⅲ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(田野畑南～尾肝要)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年12月21日付け国東整陸一調第704号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年1月30日～1月31日にわたり試掘調査を行い、平成25年5月8日付け教生第193号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

II 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

浜岩泉Ⅲ遺跡がある田野畑村は、岩手県の沿岸北部に位置し、北は普代村、西・南は岩泉町と接し、東は太平洋に面する村である。総面積は156.19㎏で、総人口は約3800人(平成22年現在)を数える。村域の現況は、山地率約84%で自然に恵まれ、酪農業と水産業を主体とした産業が発達している。

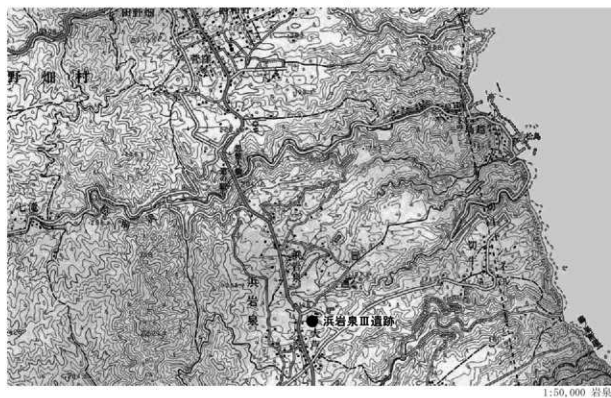
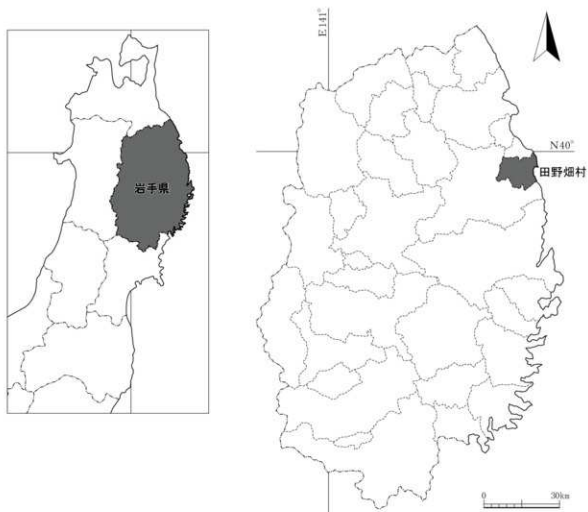
浜岩泉Ⅲ遺跡は、田野畑村役場から南南東へ約4.5km、村内の浜岩泉・島越地区の境界に所在し、東方約1.5kmの地点には縄文時代中～後期の県指定史跡である館石野Ⅰ遺跡がある。地形図上では、国土地理院発行2万5千分の1地形図「小本」(NJ-54-13-1-2)、5万分の1地形図「岩泉」(NJ-54-13-1)の図幅に含まれる。

2 周辺の地形

田野畑村は、村域の西側から南側にかけて野辺山(916m)、続石山(591m)、龜山(498m)など標高400～900mの山々が連なっており、中～小起伏の山地を形成し、東側は海岸段丘による台地・丘陵地となっている。段丘は北側ほど標高が高く、南下するにつれて低くなる傾向がある。村域の殆どが山地・丘陵地となり、大規模な平野は存在せず、村内を北東流する普代川、東流する平井賀川や松前沢、真木沢などの河川沿いに、小規模な谷底平野や氾濫平野が形成されている。海岸部に目を向けてみると、村内を東流し太平洋に注ぐ河川の河口部には村内では数少ない浜が形成されているが、海岸の多くは比高約100mの海食崖で、そこから磯を形成している。利用できる土地が少なく、現在の集落は、山間部の谷底平野や、東部の段丘、丘陵地上に集中する傾向がある。

村内の遺跡の分布を見てみると、海岸方向に広がる丘陵地や砂礫段丘上に分布する遺跡と、西部山

1 道路の位置と立地



第1図 遺跡位置図

間地の川沿いに広がる谷底平野上に分布する遺跡とに大別できる。傾向としては、等高線の間隔が広く、比較的傾斜が緩やかな地域に遺跡が集中していて、北部方面の山地に行くにつれて希薄になっていくようである。

浜岩泉Ⅲ遺跡は、本図幅東部から南部に広がる島越地区の、海岸部に向かって広がる砂礫段丘上立地しており、標高は193～198mである。

3 周辺の遺跡

田野畑村内では、平成25年3月現在で、147カ所の遺跡が確認されている。その中には、弥生時代・古代・中世の遺跡も見られるものの、そのほとんどが縄文時代の遺跡となっている。本図幅中には、51カ所の遺跡が確認されているが、こちらもそのほとんどが、縄文時代の遺跡である。本節では、村内の調査が行われた遺跡を中心に述べていくことにする。

本遺跡の周辺地区では、北東約1.5kmにある館石野Ⅰ遺跡がある。昭和62年～平成5年の早稲田大学や、平成13・14年の田野畑村教育委員会の調査によって、縄文時代中期～後期にかけての列石遺構が確認されるなど、大規模な祭祀・集落跡であることが確認され、平成9年に岩手県による史跡の指定を受けている。また、南西約700mには浜岩泉Ⅰ遺跡があり、平成8年に岩手県埋蔵文化財センターが調査を行い、縄文時代中期の大規模な集落跡であると確認されている。この2つの遺跡のほか、調査は行われていないが、ほぼ完形品の遮光器土偶を地権者が耕作中の畑の中から偶然発見している浜岩泉Ⅱ遺跡、平成12年に調査が行われ、縄文時代～弥生時代にかけての竪穴住居と50基以上の土坑群などが確認された、大芦赤空洞遺跡などがある。

本遺跡より北側の和野地区では、和野Ⅰ遺跡において成果が挙げられている。平成13年に岩手県埋蔵文化財センター、平成16・18年に田野畑村教育委員会で調査が行われている。この遺跡は、縄文時代中期の集落跡や古代と考えられる集落跡と、縄文時代前期～中期の捨て場が確認されている。このほか、平成15年に岩手県埋蔵文化財センターで調査した、和野ソマナイ遺跡と和野新聖神社遺跡がある。和野ソマナイ遺跡では、縄文時代後期の竪穴住居と土坑・陥し穴、時期不明の掘立柱建物跡が検出されており、和野新聖神社遺跡では、陥し穴遺構が検出されている。また、北東の羅賀地区に位置する野場Ⅰ遺跡は、平成25～26年度にかけて調査が行われ、縄文時代前期～晩期の集落跡が確認されている。

参考・引用文献

岩手県 1973『北上山系開発地域土地分類調査－岩泉－』

金子昭彦 1991『岩手県田野畑村出土の遮光器土偶について』岩手考古学第3号

早稲田大学文学部考古学研究室・田野畑村 1997『館石野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』

田野畑村教育委員会 2000『大芦赤空洞遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第5集

田野畑村教育委員会 2001『館石野Ⅰ遺跡第9次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第7集

田野畑村教育委員会 2002『館石野Ⅰ遺跡第10次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第9集

田野畑村教育委員会 2003『和野Ⅰ遺跡第3次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第15集

田野畑村教育委員会 2006『和野Ⅰ遺跡第4次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第16集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996『浜岩泉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』

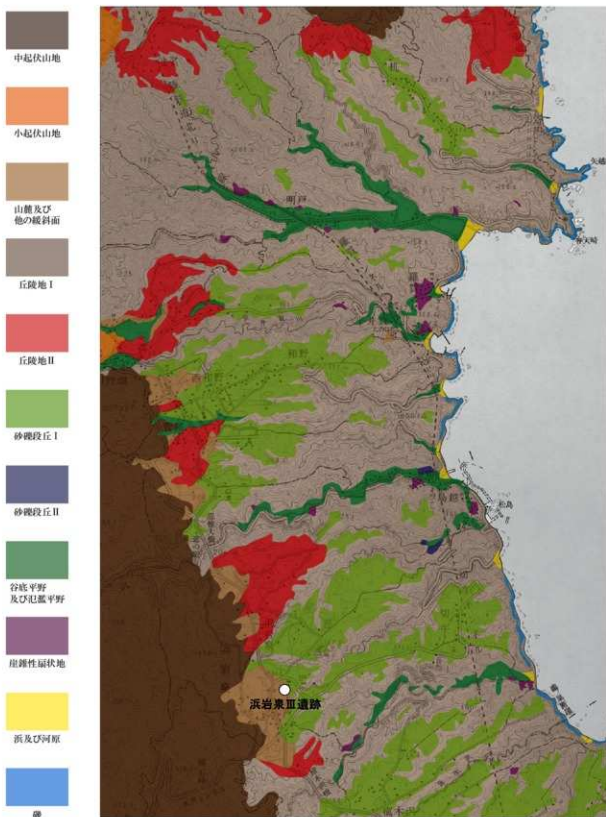
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第276集（以下岩文振〇集と略）

2 周辺の地形

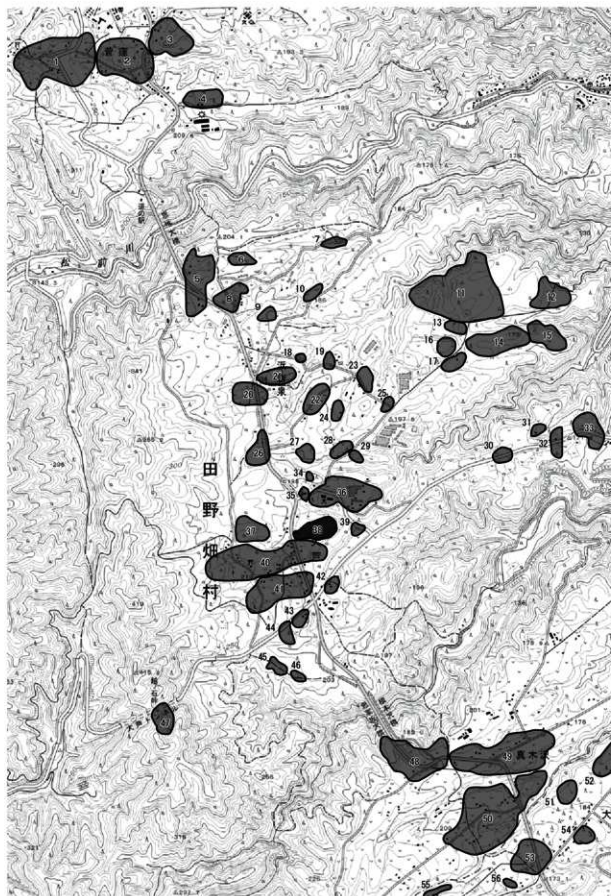
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001『和野1遺跡発掘調査報告書』岩文振第452集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003『和野新聖神社遺跡発掘調査報告書』岩文振第455集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003『和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書』岩文振第466号



第2図 地形分類図



1:25,000 田野畑・小木

第3図 周辺の遺跡図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物	備考
1	菅窪	集落跡	縄文	竪穴住居跡、土坑、縄文土器、石匙、石斧、石鏃他	平成25年岩理文調査
2	菅窪 I	集落跡	縄文	縄文土器、四頭石棒、石匙、石斧、石鏃	
3	菅窪中山	散布地	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器、土師器	
4	松前沢十文字	散布地	縄文	縄文土器	
5	浜岩泉VI	散布地	縄文	縄文土器	
6	浜岩泉VII	散布地	縄文	縄文土器	
7	島越XI	散布地	縄文	縄文土器	
8	島越XIII	散布地	縄文	縄文土器	
9	島越X	散布地	縄文	縄文土器	
10	島越XI	散布地	縄文	縄文土器	
11	船石野 I	祭祀跡 集落跡	縄文	列石遺構、竪穴住居址、土坑、ピット群、埋設土器、縄文土器、石斧、石匙、石鏃、硖石製鍔部型大珠他	県指定史跡(平成9年) 平成9年早稲田大学・田野畑村、 田野畑村第7・9・11集
12	大戸野場	散布地	縄文	縄文土器、ピエス・エスキュー・ス	
13	船石野IV	散布地	縄文	縄文土器	
14	船石野II	散布地	縄文	石器	
15	クツノ崎	散布地	縄文	縄文土器	
16	船石野V	散布地	縄文	縄文土器	
17	船石野VI	散布地	縄文	縄文土器	
18	島越VIII	散布地	縄文	縄文土器	
19	島越VII	散布地	縄文	縄文土器	
20	浜岩泉V	散布地	縄文	(縄文土器)	
21	島越IX	散布地	縄文	縄文土器	
22	島越III	集落跡	縄文	縄文土器、石器	
23	島越V	集落跡	縄文	縄文土器	
24	島越IV	散布地	縄文	縄文土器	
25	島越VI	散布地	縄文	縄文土器	
26	浜岩泉IV	散布地	縄文	縄文土器	
27	島越II	散布地	縄文	竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器	平成25年岩理文調査
28	島越I	散布地	縄文	縄文土器	
29	大戸III	集落跡	縄文	縄文土器	
30	大戸IV	散布地	縄文	縄文土器	
31	大戸V	散布地	縄文	縄文土器	
32	大戸VI	散布地	縄文	縄文土器、石斧	
33	大戸VII	散布地	縄文	縄文土器	
34	島越XIV	集落跡	縄文	竪穴住居跡、土坑、焼土遺構、縄文土器、石器	平成25年岩理文調査
35	大戸II	散布地			
36	大戸I	集落跡	縄文	縄文土器、石鏃、石槍	
37	浜岩泉ツケノ沢南	散布地	縄文	縄文土器、石器	
38	浜岩泉III	縄文・弥生・古代	縄文	竪穴住居跡、土器、石器、土製品、鉄滓他	報告遺跡
39	大戸赤空洞	集落跡	縄文	竪穴状遺構、配石土坑、縄文土器、最古他	平成12年田野畑村第5集
40	浜岩泉II	集落跡	縄文	縄文土器、遮光器土偶	
41	浜岩泉I	集落跡	縄文・近世	竪穴住居跡、住居状遺構、土坑、縄文土器、冨沢土製品、磨製石斧、琥珀、磁器類他	平成10年岩理文276集
42	真木沢III	散布地	縄文	縄文土器	
43	南大戸I	散布地	縄文	縄文土器	
44	南大戸II	散布地			
45	南大戸III	集落跡	縄文	竪穴住居跡、土坑、縄文土器	平成2年田野畑村第1集
46	南大戸IV	散布地	縄文	縄文土器	#
47	大戸館	城館跡	縄文・弥生・中世	縄文土器、弥生土器、石器	
48	真木沢V	集落跡	縄文	縄文土器	
49	真木沢IV	集落跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器、土師器、石斧	
50	真木沢VI	散布地	縄文	縄文土器、縄文土器、石鏃	
51	大牛内IV	散布地	縄文	縄文土器	岩泉町所在遺跡
52	大牛内II	集落跡	縄文	縄文土器、石器	#
53	大牛内III	散布地	縄文	縄文土器、石器	#
54	大牛内V	散布地	縄文	縄文土器	#
55	弥生沢	散布地	縄文	縄文土器	#
56	二段野沢I	散布地	縄文	縄文土器	#

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

(1) 試掘・表土除去

岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘調査の結果に基づいて、その試掘箇所をあらかじめ掘削し、遺構が検出される層位やそれまでの堆積土層を観察した。その後、重機による表土掘削が行える状態となるよう試掘トレンチを新設し、それについては遺物の出土状況も掴みながら、同様の作業を行った。

(2) 遺構検出と精査

遺構の検出は、試掘の結果をもとに、重機による表土掘削後に地山面で行った。

精査に関しては、堅穴住居跡は四分法、その他の遺構については二分法を原則としたが、重複が著しかった場合など、それに拠れない遺構もある。個々の遺構は、土層の堆積や遺物の出土状態、遺構の全景を主体に写真撮影を行い、状況を見ながら土層図は人力で、平面図は電子平板により作図した。

遺構内の出土遺物は、遺構名と出土層位や地点を記載して取りあげ、床面・底面から出土したものは、原則平面図に出土地点を入れた。遺構外からの出土分は、遺跡内の大まかな出土位置と層位を記して取りあげた。

なお、今回の報告遺跡については、調査区が狭小であることから、グリッド設定は行わないこととした。図示した平面図には、平面直角座標第X系の座標値を記した。

(3) 写真撮影

写真撮影は、6×9判モノクロームフィルムカメラ(FUJII GSW690Ⅲ)1台とデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS 5D)1台を使用した。後者のみですべてを踏った遺構もある。実際の撮影では、日付や被写体(遺構名など)を記した「撮影カード」を写し込み、室内整理時に活用した。

この他、調査終了時にはセスナ機による航空写真撮影を実施している。

2 室内整理

(1) 遺構図面の整理

野外調査時に作製した遺構図は、電子平板((株)キュービックの「遺構くん」)のデータを用いて作製した平面図と、作業員2名が作製した断面図(縮尺1/20)をデジタルデータ化して、第二原図を作成した。

(2) 遺物の整理

出土した遺物は、まず種別(土器・土製品類、石器・石製品類)に分類し、取り上げた遺物収納袋ごとに重量計測を行った。その後、遺物別に註記・接合作業を経て、本書掲載分と不掲載分を選択、掲載分は種類毎に仮番号を付して登録作業を行った。この後、それぞれの実測・拓本、点検・修正、トレースを行い、それらをスキャナーで取り込んでデジタルデータとし編集・整理した。仮番号は、

最終的に遺構内の遺物から掲載番号(算用数字の連番)に付け替えている。

本書への掲載にあたっては、遺構内出土の遺物を優先して選び、表土層や攪乱からのものは基本的に不掲載としているが、これにあたらないものもある。

(3)写真撮影と整理

野外調査時の遺構写真等は、6×9判モノクローム写真はネガとともにアルバムに貼付し、デジタルカメラで撮影したデータは、各遺跡、各遺構ごとに個別のフォルダーにまとめた。

遺物の写真は、当センター写真室において撮影技師がデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS1 Mark II)を使用し撮影した。

(4)整理作業経過

平成25年11月1日より整理員1名(12月1日より計3名)で開始したが、平成25年度の整理期間は、既刊である島越XIV遺跡を包括したものである。そのため整理作業は両遺跡を並行して行っており、実質的には本遺跡の作業は平成26年1月より着手した。

平成26年1月6日より、遺物洗浄を開始。大半は野外調査時に現場で行っていたため少量であった。

同日より、並行して土器接合を開始した。約半月ほど行ったが、並行する島越XIV遺跡を優先することから、一時中断した。

1月15日より、遺構断面図のデジタルトレースを開始。約半月にて終了した。

2月3日より、遺構写真図版作成を開始。一週間ほどで終了。

2月中旬以後、島越XIV遺跡を優先するため、本遺跡の当年度の整理の一切を一時中断し、残りは次年度に持ち越すこととした。

平成26年6月1日より、本年度の整理を開始した。整理期間2か月、整理員5人体制である。昨年度中途であった土器の接合を再開した。

6月23日、土器の接合・復元作業が終了。

6月24日より、土器の拓本・実測を開始した。

6月30日より、並行して遺物実測図のデジタル化作業を行う。

7月8日より、石器・石製品の実測を開始。

7月17・18日、遺物の写真撮影。以後、これらの写真の加工・編集といったデジタル作業を行った。

7月29日より、収納に向けた準備を開始。

7月31日に収納作業を行い、これを以って本遺跡の整理作業をすべて終了した。

IV 検出された遺構

1 遺跡の概観

浜岩泉Ⅲ遺跡は、下閉伊郡田野畑村大芦14に所在し、田野畑村役場から南へ約4km、三陸鉄道北リアス線田野畑駅から南西へ約3.5kmに位置する。北緯39度53分23秒、東経141度55分00秒付近を中心に、西側の山地から繋がる標高約210m前後の海岸段丘上に立地する。遺跡の現況は山林及び牧草地で、南向きの緩やかな斜面地となっている。

2 調査の概要

(1) 調査経過

今回の調査は、既出であるが、島越XIV遺跡と同時並行で行った。そのため、調査の進捗に合わせて両者を行き来しながらの調査となった。平成25年8月19日より「島越XIV遺跡・浜岩泉Ⅲ遺跡」として調査を開始したが、実際に本遺跡に着手したのは9月3日からである。

9月3日～5日、試掘調査を行った。この期間、近隣遺跡への応援要請もあり、作業員4名であったが、調査区全体にトレンチ2本を入れ、状況把握に努めた。その後、一時中断し島越XIV遺跡へ。

9月11日より、重機による表土除去を開始。山林ということもあり、樹木が密生するため、なかなか困難を極めた。同時に遺構検出も開始した。

9月20日、重機による表土除去終了。

9月24日、(株)ダイヤによる基準点測量。基準杭を打設。

9月26日、大方の遺構検出が終了したところで、島越XIV遺跡の調査進捗に合わせるため、本遺跡の調査を一時中断、以後1か月超を閉鎖した。

11月6日～7日、トレンチ調査時に南側の調査区境で弥生時代の遺構が確認されたことから、これらが広がる可能性を確認するため、再度重機によりトレンチを掘削した。新たに土坑1基が検出されたことにより、やや範囲を拡張することとなったが、この他は確認されなかった。

11月11日より、島越XIV遺跡の調査に目途が立ってきたことから、本遺跡の調査を再開。遺構精査に着手した。11月22日に島越XIV遺跡が終了するまで、並行して調査を行った。

11月23日、現地説明会開催。地元住民を含めた約80名が参加。

12月に入り、予想以上の遺構数のため調査員を増員し、6名体制となった。降雪等の悪条件の中で調査となったが、進捗状況は良好となった。

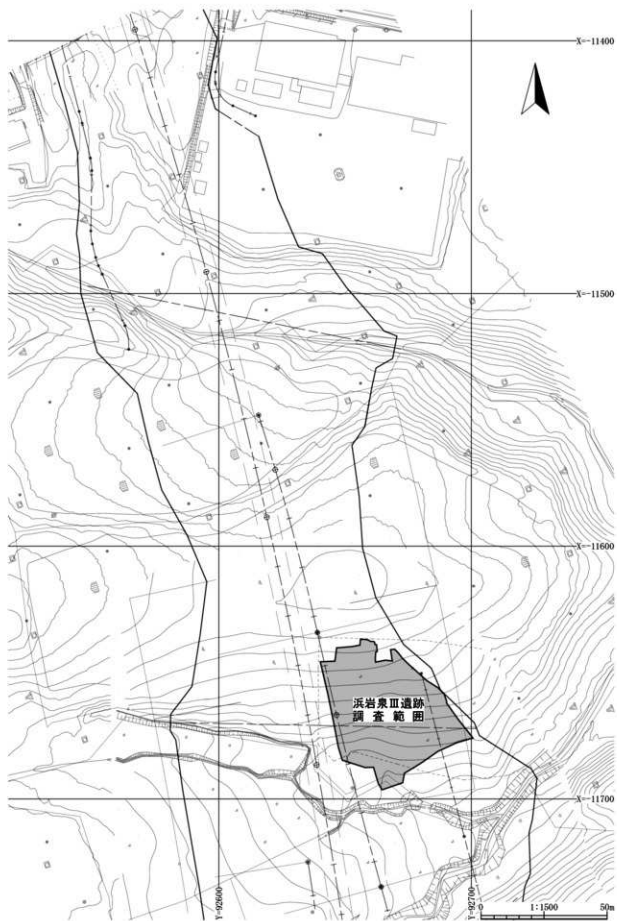
12月16日、委託者・県教委生涯学習文化課による終了確認が行われる。

12月17日、東邦航空(株)による空中写真撮影を実施。

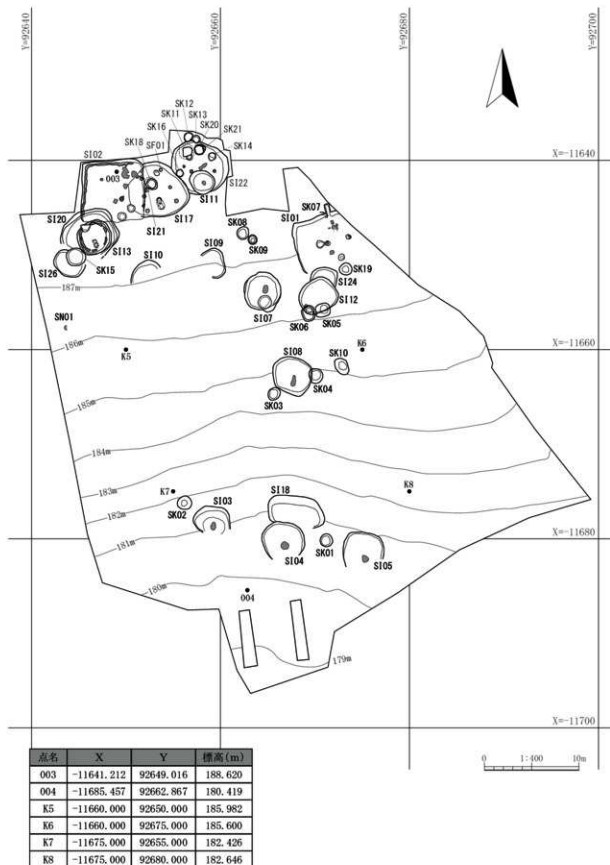
12月19日、ほぼすべての調査を終え、資材搬出。

12月20日、若干残っていた実測等を終え、撤収。この日を以って、野外調査の一切を終了した。

2 調査の概要



第4図 調査範囲図



第5図 遺構配置図

(2) 基本層序

本調査区の基本層序は以下のとおりである。

- I層：黒褐色土一表土(森林腐植土)、層厚約20～60cm。
- II層：黒色～黒褐色土一調査区南部の斜面下方側に堆積。粘板岩小片を含む。主に弥生時代の住居埋土にも認められる。層厚0～30cm。
- III層：暗褐色土一調査区北側から中央部付近に認められ、縄文時代中期の土器を含む。
- IV層：褐色土一地山土に類似する漸移層。層厚約20cm。
- V層：褐色・黄褐色土一地山、遺構検出面。調査区斜面上方の大部分では、礫の混じらない粘質土であるが、下方に向かうにしたがって砂質の度合いが強まり、最低位部分では拳大～人頭大の亜角礫を含む。おそらく両者は分層できるものだが、いずれも文化層とはなり得ないことから、地山として一括した。層厚不明。

本調査区の地形は、北から南に向かい穏やかに傾斜する丘陵地にあり、斜面途中に微地形的に斜面傾斜変化点が幾つか認められる。調査区中央部～南部は傾斜するが、斜面下方の谷間に近い部分ではやや平坦気味の地形がある。また、調査区西部の斜面中腹～下方に粘板岩など破砕礫が露出する地層が認められるが、この近辺は斜面の傾斜角度がきつく、遺構は認められない。

全体的な傾向として、II・III層は薄く、II層は南側の斜面下方に、III層は北側の斜面上方にのみ存在する。IV層は全体的に分布するものの、斜面上方・下方では薄く、中央部にやや厚く堆積する。そのため、地点によって層位状況は異なるが、概ねV層上面を遺構検出面としている。

3 検出遺構

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居跡(SI)19棟、土坑(SK)20基、土器埋設遺構(SF)1基、焼土遺構(SN)1基である。時代としては、縄文時代中期・弥生時代中期～後期・平安時代のものが確認された。調査区内における分布状況としては、平安時代の遺構は斜面上方にのみ、弥生時代のもは主に斜面下方に、縄文時代のもは斜面上方から中腹部分で確認されている。

以下、遺構種別ごとに記載・報告する。なお、遺構名は検出段階で認識した遺構種別ごとに略号と番号を組み合わせ、命名した。精査の結果、遺構ではないと判断したものについては、当初付した遺構名は欠番扱いとし、混乱が生じないようにした。今回の調査で欠番としたものは、SI06・14・15・16・19・23・25、SK17・22である。

(1) 堅穴住居跡

SI01堅穴住居跡(第6・7図、写真図版2・3/遺物:第25・33・36図、写真図版30・36・38)

<位置・検出状況>調査区の北東側に位置し、V層で検出した。北東部が調査区外にかかるものの、方形の黒褐色土のプランとして認識できた。

<重複遺構>位置的にSI24・SK19と重複するものと考えられるが、実質的な切り合いはなし。これらが縄文期の遺構であることから、本遺構の方が新しい。またSK07とは、カマド近くの北壁部分で重複するが、これも縄文期の土坑と判断できるため、本遺構が切っている。

<平面形・規模>北東部は調査区外へ、南側は傾斜地により遺存しないため詳細は不明だが、約530×700cmが確認でき、隅丸方形を呈するものと推測される。主軸方位はおよそ北-南にある。

<埋土>7層に細分した。壁際に地山起源の褐色砂質土が流入し、下位に暗褐色土、上位に黒褐色～黒色土が堆積する。自然堆積と判断される。

<壁・床面>残存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は北壁で最大約45cmを測る。床面は概ね平坦である。

<カマド>北壁に付設されている。規模的に中央よりやや東寄りの位置にあたるか。周辺には複数の自然石がまともに見つかっており、構築時の芯材として使用されたものと推察されるが、原位置を留めるものはない。燃焼部には約45×30cmの楕円状ににぎい赤褐色焼土が広がる。表面は堅く締まるが、焼成深度は6～7cmと比較的薄い。煙道は長さ約135cm×幅約50cmを測る。削り貫き式か掘り込み式かの判断はつかなかった。先端に向かってやや上り勾配で、煙出部の深さは検出面から約30cmほどである。

<床面施設>土坑状の掘り込みをもつK1～5(K4は欠番)4基と地床炉N1・2の2基が確認された。K1・3周辺には、検出時に鍛造剥片が集中的に確認できたことから、鍛錬鍛冶炉の存在が想定された。K1は約55×50cmの楕円形を呈し、床面からの深さは約10cmを測る。底面には一部が還元化した焼土が確認された。K3は約85×80cmの楕円形を呈し、深さ約10cmを測る。こちらには焼成部は見られず、K1と連結した皿状の窪みと捉えられる。これらから、K1を鍛錬鍛冶炉として、K3は操業過程での何らかの作業場であったことが推察される。同様に、K2周辺においても、検出時に鍛造剥片が少量確認できた。精査の結果、K2は約55×45cmの楕円形を呈し、深さ約12～13cm、底面には焼成が弱いものの、一部が還元化した焼成範囲が確認された。こちらには付属する施設は確認されなかったが、埋土や底面からも鍛造剥片が確認(K1より少量である)できることから、鍛錬鍛冶炉として機能していたものと考えられる。K5は径約70cmの円形を呈し、深さは約35cmを測る。周辺にはN2が存在するが、機能面については不明である。N1はカマド燃焼部焼土の両側に隣接する。所々を攪乱痕により侵されているが、約70×60cmの範囲に赤褐色焼土が広がる。焼成は良好で、深度は約10cmを測る。当初は地床炉と考えたが、カマドとの位置関係から併存していたものとは考えにくく、旧カマドの燃焼部焼土である可能性がある。N2はK1・5の間に存在し、径約45cmの円形に広がる赤褐色焼土である。焼成深度は浅く、約4～5cm程度である。鉄生産に関わるものかは不明である。

<遺物>土器が7.142kg出土し、このうち1～9を掲載した。大半が縄文土器で、土師器の出土は1の1点のみである。石器はS1とした台石(94)とカマド内出土の敲磨器類2点(95・96)を掲載した。このほか有孔土製品1点(123)や羽口2点(125・126)、鍛錬鍛冶炉に伴い小鉄塊や鍛造剥片が出土している。

<時期・考察>時期を特定できる出土遺物が少なく、詳細は不明だが、唯一出土した土師器から10世紀代を想定したい。なお、カマド内から検出した炭化物を年代測定した結果、 $990 \pm 20\text{yr BP}$ (^{14}C 年代)という値が得られた。遺物とは若干の開きが認められる。上述したが、本遺構は居住施設としてのほか、鍛造剥片が検出されたことから、鍛錬鍛冶を行っていたものと判断される。鍛錬鍛冶炉に相当するのはK1・2で、K3はK1の付属施設と考えられる。鍛造剥片の検出量は、K1・3周辺が圧倒的に多く、K2周辺からは少量であった。このことから、K1・2については新旧の差があるのかもしれないが、可能性の示唆に留めておく。また、N1とした地床炉は、赤変焼成も良好で位置的にも旧カマドの燃焼部であった可能性が高い。こういった面からも、本遺構は2時期にわたる可能性が考えられる。

(小林)

S 1 02 堅穴住居跡(第7～9図、写真図版4～6/遺物:第25・26・33・36図、写真図版30・36・38)

<位置・検出状況>調査区の北側に位置し、V層で検出した。方形状の暗褐色土のプランとして認識できた。

<重複遺構>S 1 17・21・20と重複する。これらはいずれも縄文時代の遺構であるため、本遺構が切る。

<平面形・規模>南側は地形により消失するが、1辺約650cmの隅丸方形を呈するものと推定される。

<埋土>17層に細分した。北壁側の最下層からは炭化物が多量出土しており、焼土ブロック等も混入することから、焼失した住居である可能性が高い。これより上層層に関しては、山側からの主にIII層起源の褐色土が流入した自然堆積と判断される。

<壁・床面>残存する壁はほぼ直立し、壁高は北壁で最大65cmを測る。床面は平坦で、全域に貼床が施されている。また、北壁から西壁沿いにかけてL字状に幅約20cm、深さ10cm前後の壁溝が巡る。

<カマド>東壁の北寄りに付設する。周辺には複数の自然石(亜角礫類)が散在している。原位置を留めるものは壁際の4個のみで、袖の芯材を構成していたものと考えられる。中央には約70×40cmの範囲に赤褐色焼土が広がる。この中央部は強く赤変しており、焼成深度は約10cmに及ぶ。焼土の両脇には袖の芯材痕と思われるピットが確認できる。煙道部は断ち割り等を行ったが、これに該当するものは見受けられないことから、本カマドは煙道施設のないものと判断した。

<床面施設>土坑2基(K 1・2)と焼土4基(N 1～4)を確認した。K 1は南東側に位置し、径約80cmの円形を呈する。床面からの深さは約60cmで、直立した壁をもつ。底面のほぼ中央から鉄製の紡錘車(RM 2)が出土している。K 2は南側やや中央寄りに位置し、径85cmの円形を呈する。中位で外傾する壁を有し、深さは約40cmを測る。K 1・2とも同形状をしており、貯蔵施設としての機能が。N 1は北側、カマド燃焼部の西方に隣接する。当初はこの周辺から炭化物が多く見られることから焼失時の焼成と思われたが、かなり強い被熱が見られることから地床炉と考えた。しかし、その後の精査で、両脇に連結した小ピット状の掘り込みがあることからカマドの袖に設置されていた芯材の痕跡と捉えられ、また、位置的にも壁に隣接することから、古い時期のカマドの可能性が考えられる。実際、現カマドから若干低い位置で確認できることから、おそらく貼床で覆われていたものと推測される。約150×60cmに赤褐色焼土が広がり、焼成深度は約10cmを測る。現カマド同様に煙道施設は見当たらない。N 2は中央からやや東側に位置する。検出時からピット状のプランの縁辺に焼土が巡るのが確認できた。約45cmの円形をし、深さは約15cm、底面から壁面にかけて焼成の強い焼土が広がる。底面焼土の一部は、還元色を帯びることから、S 1 01同様、鍛錬鍛冶炉が想定されたが、周辺および埋土中から鍛造剥片等は確認されなかった。N 3は約50×30cm、N 4は約40×30cmの範囲に広がる焼土である。どちらも表面は堅く締まり、比較的良好といえる焼成度合だが、焼失時における被熱の痕跡なのか、地床炉なのか判断は付かなかった。

<遺物>土器が10.0kg出土し、このうち8～15を掲載した。出土土器の大半が縄文土器であるが、床面から猿投産の灰釉陶器(8)、カマド内から土師器(9)が出土している。石器はスクレイパー1点(97)と敲磨器類2点(98・99)、石皿1点(100)を掲載した。また、鉄製品として床面出土のRM 1とした刀(127)とRM 2とした紡錘車(128)が出土している。

<時期・考察>出土遺物から9世紀後半～10世紀前半を想定したい。なお、埋土及びカマドから検出した炭化物を年代測定したところ、前者は1,020±20yrBP、後者は1,030±20yrBPという結果が得られた。埋土下層から確認された炭化物の量や床面に点在する焼土から、本遺構は焼失住居と判断されるが、刀の出土状況等から意図的な焼失の可能性が高い。またN 1の状況から、カマドの作り替えが行われたと考えられ、2時期にわたる可能性が高いが、新旧カマドとも煙道部は確認できなかった。

鍛造剥片や鉄滓等の出土はないが、N2の状況からは何らかの還元焼成による作業が推察される。刀や灰軸陶器の出土や焼失による廃絶、上記の煙出施設のないカマドなど、一般的な住居とは異なるものであろうか。

(小林)

S I 03 竪穴住居跡(第10図、写真図版6 / 遺物: 第26図、写真図版31)

<位置・検出状況>調査区南部やや西側に位置する。現況は北から南へ下る斜面下方で、斜面傾斜変換点にある。検出状況はIV層面で黒褐色シルトの円形プランとして認知した。

<平面形・規模>平面形は円形基調にある。規模は東西380cm、南北310cm以上である。深さは、北壁で40~50cm、東壁は10~15cm、西壁20cm前後、南壁は消失している。

<壁・床面>IV~V層を壁とし、壁形は直立に近い外傾で立ち上がる。床面は、全体的にはほぼ平坦気味にある。炉周辺2mくらいの範囲に黒褐~暗褐色シルトが薄く残り、それらが若干の硬化面を形成している。明確に貼り床と呼べる状況にはない。

<埋土>埋土は1~3層に分層した。埋土上位に1層黒色シルト、中位に2層黒褐色シルト、壁際中心に3層暗褐色シルトが堆積する。1・2層はII層土、3層はIII層土を起源とする。自然堆積と捉えた。

<炉>中央より南壁際に寄って地床炉を検出した。

<遺物>土器が1.2kg出土した。弥生土器と判断される地文のみの薄手の土器を7点(16~22)掲載した。出土土器は弥生後期が中心と推定される。なお、16の弥生後期と推定される土器はS I 05・11から、20はS I 05から出土した破片と接合を示した。

<時期>弥生時代後期の赤穴式段階と想定される。また、上述の土器破片の遺構間接合の状況から、本遺構とS I 05・11住居跡は同じ時期に廃絶された可能性が考えられる。

(星)

S I 04 竪穴住居跡(第10図、写真図版7 / 遺物: 第26図、写真図版31)

<位置・検出状況>調査区南部中央に位置する。現況は北から南へ下る斜面下方で、斜面傾斜変換点に本遺構は所在する。検出状況はIII層面で黒褐色シルトの円形プランとして認知した。

<重複遺構>平面形は斜面上方側に相当する北側に所在するS I 18を裁る。

<平面形・規模>平面形は円形基調にある。規模は東西440cm、南北380cm以上である。深さは、北壁で22cm、東壁は10cm、西壁は20cm前後、南壁は既に消失している。

<壁・床面>壁は北西~北東まで検出できた。外傾して立ち上がる。床面は地床炉の検出面から判断した。基本的にはIV~V層中に相当するが、斜面下方側である南床面はVI層相当(垂角礫層が露出する)である。

<埋土>黒褐色シルトを中心とする単層で、自然堆積である。

<炉>中央よりやや南壁際に寄って地床炉を検出した。

<遺物>土器が434g出土し、23~30の8点を掲載した。26は弥生中~後期、他は弥生中期と推定される。

<時期>出土土器から弥生時代中期と判断される。埋土中と床直より検出した炭化物を年代測定したところ、¹⁴C年代で前者が2,030±20yrBP、後者が2,550±20yrBPという結果が得られた。前者は出土土器の型式年代とほぼ符合するが、後者は縄文晩期まで上る結果となった。

(星)

S I 05 竪穴住居跡(第11図、写真図版8 / 遺物: 第27図、写真図版31)

<位置・検出状況>調査区南部やや東側に位置する。現況は北から南へ下る斜面下方で、斜面傾斜変

換点にある。検出状況はⅢ層面で黒褐色シルトの楕円形プランとして認知した。

<平面形・規模>平面形は楕円形、規模は東西440cm、南北340cm以上である。深さは北壁で40cm前後、東壁10～20cm、西壁20cm前後、斜面下方側に相当する南壁は残っていない。

<壁・床面>壁は外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦である。炉周辺230×180cmくらいの範囲に黒褐～暗褐色シルトによる硬化気味の面が広がる。

<埋土>1～4層に細分した。全て自然堆積層である。1層暗褐色シルトや2層褐色シルト質粘土が主体的に堆積し、壁際に重角礫を有意に含む地山壁の崩壊土である3・4層がみられる。

<炉>中央からやや南に寄った床面でやや盛り上がり気味(床面レベルよりやや高い位置)の焼土を検出した。現地性焼土なことから炉(新炉)と判断した。その後床面のダメ押しを行ったところ、ほぼ中央で更に下位で現地性焼土を検出したことから、旧炉と判断した。従って、床面は新旧2時期あり、古い床面に嵩上げて新しい床面としていると捉えられる。

<遺物>土器が660g出土し、31～35の5点の弥生土器を掲載した。全て弥生後期と推定される。なお、16はS I 03・11と、20はS I 03から出土した弥生後期の土器片と遺構間接合を示した。

<時期>出土土器から弥生後期の赤穴式段階と判断される。また、上述の土器破片の遺構間接合の状況から、本遺構とS I 03・11は同じ時期に廃絶された可能性が考えられる。なお、遺構内より検出した炭化物を年代測定したところ、 $2,100 \pm 20 \text{yr BP}$ (^{14}C 年代)という分析結果であった。

(星)

S I 07 竪穴住居跡(第12図、写真図版9/遺物:第27・28・33図、写真図版31・32・36)

<位置・検出状況>調査区中央部に位置する。南に近接してS I 08が所在する。検出状況は表土を除去した段階で、暗褐色シルトの広がりとして認知した。

<平面形・規模>平面形は楕円形、規模は南北420cm、東西380cmである。深さは北壁で50～60cm、東壁40cm前後、西壁40cm前後、南壁20cm前後である。

<壁・床面>壁はほぼ全周する。外傾気味に立ち上がる。床面は地山中で、ほぼ平坦でやや硬い。

<埋土>大別すれば、埋土上位に1層・1a層暗褐色シルト、埋土中～下位に2層褐色シルト質粘土が堆積する。1層及び1a層は木根攪乱の影響を受け、各所に黒～黒褐色シルトが混在する。2層中には2a層とした焼土のブロック層が入る。2a層以外は自然堆積で捉えられる。

<炉>中央から南壁にかけて焼土と楕円形土坑(前庭部)を検出した。複式炉と判断される。補足として、焼土の周囲からは炉石抜き取り痕が検出されていないことから、元々石囲部はない可能性が高い。

<遺物>土器は3.5kg出土した。このうち、埋土・床面出土の6点(36～41)を掲載した。縄文中期後葉と推定される。石器は炉前庭部内から台石(101)が出土している。

<時期>出土土器から、縄文中期後葉と推定される。

(星)

S I 08 竪穴住居跡(第12図、写真図版10/遺物:第28・34図、写真図版32・37)

<位置・検出状況>調査区中央部に位置する。検出状況は表土を除去した段階で黒色シルトによる円形気味の広がりとして認知した。

<重複遺構>本遺構の南西にS K 03、東壁際にS K 04が存在する。いずれも本遺構より古いと調査判断された。

<平面形・規模>平面形は円形基調である。規模は420×400cmである。深さは北壁で35cm、東壁25cm、西壁25cm、南壁0～5cmである。

<壁・床面>壁は東～北～西壁を検出した。南壁は伐根があった関係で若干破壊してしまった(斜面

下方側なことから既に消失していた可能性もある)。床面は明確な状況にはなかったが、地床の検出を持って判断した。この地床の下位及び床面と判断される面には、黒褐色シルトが薄く残り、それを剥すと礫層が露出することから、あるいは貼床が施されていた可能性もある(判断できなかった)。
 <埋土>黒褐色シルトと暗褐色シルトを主体とする。1～7層に細分した。その内、6層は炭化物の集積層、7層は地床に伴う焼土層である。1～5層は自然堆積である。掘削途中で、床直(概ね4層中)にて焼土ブロックが出土したことから、焼失家屋と判断され、併せて土葺きであった可能性が考えられる。

<炉>地床を検出した。焼土層は現地性で発達が良く、床面レベルより周堤状にやや盛りがっている(※周堤炉的な性格である可能性もある)。焼土層下位には黒褐～暗褐色シルト層が堆積する。

<遺物>出土土器は地文のみが多く、時期特定が困難な破片が多い。総量で415.5g出土した。掲載したのは弥生後期の42・43の2点である。石器は埋土中から石核(102)が出土した。

<時期>弥生後期の赤穴式段階と調査判断したい。なお、床面直上より検出した炭化物を年代測定したところ、2,010±20yrBP(14C年代)という結果が得られた。

(星)

S I 09 竪穴住居跡(第13図、写真図版11)

<位置・検出状況>調査区中央部に位置する。検出状況は表土を除去した段階で、炭窯構築に伴う現代の土取り穴に西半分を破壊された暗褐色シルトの半円状プランを検出した。

<平面形・規模>プランのほぼ半分は上述の土取り穴により破壊を受けているが、残存部からは円形と推定される。規模は南北で320cmある。深さは北壁で25cmを測る。

<壁・床面>壁は外傾して立ち上がる。なお、東壁はV層相当であるが、埋土との識別が不明瞭であったことから、ベルト沿いにサブトレを入れ把握に努めたところ、黄褐色粉末のTo-Cuブロックが検出されたことで、本遺構の地山すなわち東壁と判断した。床面はやや硬く、ほぼ平坦にある。

<埋土>埋土上位に黒色シルト、中～下位に褐～暗褐色シルト質砂質土が堆積する。自然堆積である。

<炉>未検出であるが、上記の土取り穴の側にあった可能性は考えられる。

<遺物>土器は349.6g出土したが、掲載したものはない。石器は出土していない。

<時期>出土土器は地文のみが多く、土器型式の特定はできていない。当初は縄文中期と推定されたが、埋土の様相からは微妙で或いは弥生時代か。

(星)

S I 10 竪穴住居跡(第13図、写真図版12/遺物:第28図、写真図版32)

<位置・検出状況>調査区中央部やや西側に位置する。検出状況は現代の炭窯に東側を、炭窯構築時の土取り穴に東側を破壊された暗褐色プランを検出した。

<平面形・規模>平面形は円形若しくは楕円形で、規模300cm前後と推定される。深さは北壁で44cm、西壁22cmで、東壁や南壁は破壊され残っていない。

<壁・床面>壁は外傾して立ち上がる。床面はやや硬く、ほぼ平坦である。

<埋土>1～3層に大別した。埋土上位中心に1層暗褐色シルトが竪穴中央付近の床面まで厚く堆積し、壁際に2層暗褐～褐色粘土質シルト、壁際下位及び床面直上に地山起源の3層黄褐色粘土が堆積する。自然堆積である。

<炉>未検出ではあるが、上記の攪乱された部分にあった可能性はある。

<遺物>土器が1.3kg出土している。掲載したものは44・45の2点である。44は弥生後期の土器だが、異時期の混在と調査判断した。

<時期>出土土器は縄文中期中～末葉の地文のみのが多く、土器型式の特定は現段階ではできていない。ただ、埋土の様相からは弥生時代後期頃の可能性もある。

(星)

S I 11 竪穴住居跡(第14図、写真図版13/遺物:第28・34図、写真図版32・37)

<位置・検出状況>調査区北部で調査区境に位置する。検出状況は表土を除去した段階で黒褐色シルトによる小円形プランを検出した。

<重複遺構>S I 22と重複し、これを切る。

<平面形・規模>径約240～260cmの円形を基調とする。

<壁・床面>壁は床面から緩やかに立ち上がる。深さは最深部で約50cmを測る。床面は概ね平坦で、締まりが認められる。

<埋土>8層に細分した。暗褐色シルトを主体とする自然堆積と判断される。床面直上付近に大きめの焼土ブロックが認められることから、焼失住居で併せて土葺き屋根の可能性が窺える。

<炉>竪穴中央部付近で現地性焼土を検出し、地床炉と判断した。焼土は深さ4cmに発達し、焼成は良好にある。

<遺物>土器は424.8g出土し、掲載したのは46～48の3点である。全体的には縄文中期後葉の破片が多いが、46は弥生期の土器と考えられる。なお、弥生後期とした16はS I 03・05から出土した破片が遺構間接合を示した。石器は床面直上から石錐(103)と埋土中から敲磨器類(104)が出土した。

<時期>出土土器・規模・形状・炉形態から弥生時代後期の可能性がある。また、上述の土器破片の遺構間接合の状況から、本遺構とS I 03・05は同じ時期に廃絶された可能性が考えられる。なお、埋土中より検出した炭化物を年代測定したところ、 $1,920 \pm 20\text{yrBP}$ (^{14}C 年代)という結果が得られている。

(星)

S I 12 竪穴住居跡(第14図、写真図版14)

<位置・検出状況>調査区中央部やや東側に位置する。検出状況は表土を除去した段階で黒褐色シルトによる円形プランを検出した。

<重複遺構>S I 24、S K 05・06と重複し、本遺構がこれらを切るため最も新しい。

<平面形・規模>平面形は円形、規模は420×330cmである。深さは北壁で43cm前後、東壁28cm、西壁22cmで、南壁10cmである。

<壁・床面>壁は基本VI層であるが、北東～東壁は別遺構埋土(暗褐色シルト)を掘り込んでいる。外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦である。VI層中を床面とし、貼床は無い。ただ、木根攪乱による黒斑状が多々あり、硬化面なのかはつきりしない。

<埋土>1～4層に細分した。全て自然堆積である。主体は3層黒褐色シルトである。埋土上位に暗褐色～褐色シルト質砂質土が堆積するが、これらは本来黒褐色シルト層より下位に確認されても良い地層なので、住居埋没の最終期に土石流などの自然現象が生じた可能性なども示唆される。

<炉>未検出である。

<柱穴>西壁付近にP 1を検出した。

<遺物>土器が141.3g、数点が出土したのみである。掲載したものは無い。

<時期>出土土器は地文のみのが多く、土器型式の特定はできていない。縄文中期と推定されるが、明確ではない。また、埋土中位付近には径30cmほどの焼土ブロックが認められることから、焼失家屋かもしれない。

(星)

S I 13 竪穴住居跡(第15図、写真図版15・16/遺物:第28・29・34図、写真図版32・33・37)

<位置・検出状況>調査区北西部に位置する。検出状況は表土を除去した段階で黒褐色シルトによる円形気味プランを検出した。

<重複遺構>S I 20(縄文中期)を裁り、S I 02(古代)に裁られる。

<平面形・規模>平面形は円形基調の多角形、規模は南北340cm、東西360cmを測る。深さは北壁で60cm、東壁53cm、西壁52cmで、南壁5cmである。

<壁・床面>壁は残りの良い北～北西～西壁を見る限り外傾して立ち上がる。床面は黒褐～暗褐色のシルトと褐色粘土による混合土を用いた貼床がほぼ全面に施されている。それらは硬化面を形成し、全般に硬い。炉石や炉底は貼床施工後に掘り込まれている。

<埋土>1～8層に細分し、1層(1層と1a層)・3層(3層と3a層)・5層(5層と5a層)・8層(8層と8a層・8b層)はさらに細分した。大別するなら、埋土上位に暗褐～褐色シルト(1～3層)、中位に黒褐色シルト(主に4層)、埋土下位～床面及び壁際に褐色粘土質シルト(7層や8層系)が堆積する。7層や8層系(壁の崩壊土系)は自然堆積であるが、その他は人為堆積の可能性が高い。

<炉>竪穴中央やや南から南壁にかけて石囲炉+石囲炉による複式炉を検出した。石囲部内の炉底には貼土が施され、硬化面を形成している。炉内に焼土は認められない。

<柱穴>床面からは未検出である。壁溝において、他より幅が広い部分が複数箇所あり、さらに深度が深い部分がある。これらイレギュラー的な部分が柱穴であった可能性が考えられる。

<壁溝>所々途切れ気味ではあるが、ほぼ全周する。埋土は暗褐～褐色シルト質粘土で、幅10～20cm、深さは5～10cmである。

<埋設土器>南西壁際において斜位に埋設する土器(RP2)を検出した。炉周辺の床面よりやや高い位置にある。住居の貼床を掘り込んで埋設されている。土器の口縁部付近や土器内には礫が見られる(設置上の関係か若しくは蓋的な性格か)。また、土器の口縁部付近の下や胴部～底部にも土台的に巨礫が設置されている(敷かれている様子にも見受けられる)。土器型式は充填縄文によるアルファベット文を施文する大木10a式で、ほぼ完形である(※口縁の一部は欠損している)。

<遺物>土器は総量で7.1kg出土している。掲載したのは49～54で、炉付近の床直に大きな破片RP1(50)と北壁際に斜位の埋設土器(49)などがある。石器は石匙(105)・スクレイパー(106)・磨製石斧(107)・蔽磨器類(108)が出土している。

<時期>出土土器は地文のみの多いものの、縄文中期末葉と推定される。また、埋設土器は大木10a式である。中期末葉に構築されたかと捉えられる。

(星)

S I 17 竪穴住居跡(第16・17図、写真図版16・17/遺物:第29・30・35図、写真図版33・37)

<位置・検出状況>調査区中央部北側に位置し、検出面はV層面である。当初からS I 02と重複する縄文期の遺構の存在は想定していたが、明確なプランは判然としなかったため、トレンチを入れて確認をすることとした。その結果、硬化する床面や石囲炉を確認したことから、竪穴住居跡であると認識するに至った。

<重複遺構>S I 02・21・22、S K16・18、S F01と重複する。S I 02・21、S K16、S F01に切られ、S I 22、S K18を切る。

<平面形・規模>上述のとおり、S I 02との重複により西側の壁は消失しているが、確認された硬化面範囲から推測すると、約650×580cmのやや歪な楕円形状と考えられる。

<埋土>12層に細分した。全体的に褐色土を主体とし、部分的に上位層で暗褐色土が見られる。自然

堆積と考えられる。

<壁・床面>壁はやや外傾して立ち上がり、最深部の北側壁で約45cmを測る。床面は概ね平坦で、南西側に硬化面が見られる。

<炉>南側の中央に複式炉が確認された。2室に分かれるが、全体で約125×70cmの規模をし、コの字状の石囲部とこれの北側に円形の掘り込み部が取り付く。石囲部は約95×70cmの長方形を呈し、石組みは南側のみ石がないコの字状をする。床面からの深さは約25cmで、底面には燃焼部焼土が広がる。北側の掘り込み部は径約40cmの円形を呈し、床面からの深さは約20cmである。底面及び壁面まで強く被熱している。

<柱穴>P1～7の7個を検出した。開口部規模・深さとも規則性はないが、配置状況からP1～6は本住居に伴う主柱穴と考えられる。P7のみこれらの配置上は外れるが、本住居に伴う可能性も否定できない。

<遺物>土器は7.9kgが出土している。このうち掲載したのは55～64である。石器は石畿(109)・敵磨器類(110)・台石(111)が出土した。

<時期>出土土器は地文のみのものが多く、時期の特定は困難だが、およそ縄文中期中葉～後葉のものが多いことや複式炉の形態から、縄文時代中期中葉～後葉を想定したい。なお、床直より出土した炭化物を年代測定したところ、4,060±30yrBP(¹⁴C年代)という結果が得られた。およそ推定時期とも符合する。

(小林)

S I 18 竪穴住居跡(第17図、写真図版17・18/遺物:第30図、写真図版33)

<位置・検出状況>調査区南部中央に位置する。現況は北から南へ下る斜面下方で、斜面傾斜変換点付近に相当する。検出状況はⅢ層面で認知した。

<重複遺構>斜面下方側に相当する南側に、同時期のS I 104が所在する。新旧関係は、厳密には不明であるが、本遺構が古いと判断しておく。

<平面形・規模>平面形は東西に長径を持つ長楕円形と判断される。規模は東西580cm、南北280cm以上である。深さは北壁で60cm前後、東壁38cm、西壁36cm前後、斜面下方側に相当する南壁はS I 104に破壊され残っていない。

<壁・床面>壁は西～北～東まで検出できた。外傾気味に立ち上がる。床面は基本的にⅣ～Ⅴ層中に相当するが、斜面下方側である中央～南床面はⅥ層(亜角礫層が露出)となる。ほぼ平坦である。

<埋土>黒褐色シルトを中心に、下位に焼土ブロックを多量に含む暗褐色シルトが堆積する。また、全体的な傾向として、粘板岩小片や亜角礫が顕著に含まれる。全て自然堆積である。焼土の大ブロックは埋土中位～床直にかけて多数認められる様相から、本遺構は焼失家屋と判断したい。

<炉>未検出である。

<遺物>土器は1.1kg出土し、掲載したのは1点(65)である。65は床面出土の弥生後期の土器である。石器は出土していない。

<時期>出土土器から弥生時代後期と推測される。

(星)

S I 20 竪穴住居跡(第18図、写真図版18・19)

<位置・検出状況>調査区北部に位置する。検出面はS I 102の貼床直下である。南側にはS I 13と重複し、本遺構が古い。

<重複遺構>S I 102(古代)・S I 13(中期末葉)より古い。S I 26とは重複するが新旧関係は不明。

<平面形・規模>平面形は多角形を呈する(※残存部から八角形と推定される)。規模は東西で620cm、南北約570cmである。深さは西壁で40cm、北壁22cm、東壁36cmである。

<壁・床面>壁は西～北～東まで検出できた。外傾気味に立ち上がる。床面はV層中に相当し、S I 13の床面レベルより約40cm高い。

<埋土>北側は古代の住居跡であるS I 02の貼床で覆われている。褐色シルト質砂質土を主体にとする。やや明るい色調で、尚且つ地山土に近い土質にある。自然堆積と推定される。

<炉>未検出であるが、重複部分にあった可能性はある。

<遺物>土器が420g出土したが、少数片のみで掲載したものはない。

<時期>縄文中期と推定されるが、詳細な時期は現段階では特定できない。

(星)

S I 21 竪穴住居跡(第18図、写真図版19)

<位置・検出状況>調査区北側に位置する。S I 17の精査中に石囲炉を検出したことから認識したが、既に全体を掘り進めていたため、その他の部分は不明である。

<重複遺構>S I 02・17と重複していたものと考えられるが、平面的にどのような切り合いかは不明。S I 17床面より高い位置で石囲炉が検出されていることから、S I 17より本遺構の方が新しく、S I 02は平安時代の住居であるから、本遺構の方が古いと判断できる。

<平面形・規模>上記の理由により不明。

<壁・床面>不明。

<埋土>不明。

<炉>唯一残存した石囲炉は、既掘りにより南側の石が消失しているが、径約60cmの円状に石を配置したと想定される。炉内には、径30cm程の赤褐色焼土が広がっており、焼成深度は約10cmと良好である。

<遺物>炉内より土器が1点(17.6g)が出土したのみである。地文のみで掲載には至っていない。

<時期>上述したように、石囲炉のみしか確認できていない。出土遺物もほとんどないことから詳細は不明だが、重複関係から縄文時代中期中葉～後葉を想定したい。

(小林)

S I 22 竪穴住居跡(第19図、写真図版19・20/遺物:第30・35図、写真図版34・37)

<位置・検出状況>調査区北側に位置し、検出面はV層面である。周辺の遺構の重複が著しいため、当初は細部までは把握できなかったが、暗褐色土の円状のプランとして認識した。

<重複遺構>S I 11・17、S K 11・12・13・14・16・20と重複する。これらすべてに切られ、この周辺で最も古い遺構と判断される。

<平面形・規模>約600×550cmの楕円形を呈するものと思われる。

<壁・床面>壁は床面から緩やかに立ち上がり、深さは最深部で約30cmである。床面は概ね平坦で、やや良く締まる。

<埋土>7層に細分した。下位の黄褐色土、中位の褐色土、上位の暗褐色土に大別でき、層位状況から自然流入したものと判断される。

<炉>中央部に約100×25cmの長楕円形に焼成範囲が広がる地床炉が確認された。この北東側には埋設土器が設置されている。土器内には地床炉周辺と同じく焼土と炭化物が混在する土が堆積する。土器埋設炉とは異なるが、地床炉に付属する施設であったものと考えられる。

<床面施設>床面土坑としてK 1、柱穴P 1・2・4(P 3は欠番)の3個が確認された。K 1は中央からやや北寄りに位置する。S K 11に切られるが、径約60cmの円形を呈するものと推測される。深さ

は約20cmである。貯蔵施設的な機能をもつものが、P1・2・4はいずれも径約30cm、深さ60cm前後を測る。

＜遺物＞土器は2.5kg出土したが、地文のものが多く、掲載したものは66・67の2点である。石器は石鏃1点(112)と敲磨器類3点(113～115)が出土した。

＜時期＞出土土器から、縄文時代中期中葉と推定したい。

(小林)

S I 24 竪穴住居跡(第20図、写真図版21)

＜位置・検出状況＞調査区北部に位置する。検出面はS I 02の貼床直下である。南側にはS I 13と重複し、本遺構が古い。

＜重複遺構＞S I 02(古代)・S I 13(中期末葉)より古い。

＜平面形・規模＞平面形は多角形を呈する(※残存部から八角形と推定される)。規模は東西で620cm、南北約570cmである。深さは西壁で40cm、北壁22cm、東壁36cmである。

＜壁・床面＞壁は西～北～東まで検出できた。外傾気味に立ち上がる。床面はV層中に相当し、S I 13の床面レベルより約40cm高い。

＜埋土＞北側は古代の住居跡であるS I 02の貼床で覆われている。褐色シルト質砂質土を主体にとする。やや明るい色調で、尚且つ地山土に近い土質にある。自然堆積と推定される。

＜炉＞未検出だが、重複により失われた可能性はある。

＜遺物＞土器は74.7gと2破片が出土したのみで、掲載には至っていない。

＜時期＞縄文中期と推定されるが、詳細な時期は現段階では特定できない。

(星)

S I 26 竪穴住居跡(第20図、写真図版22)

＜位置・検出状況＞調査区北西部に位置する。検出面はS K 15の西壁において、土坑とは別プランと想定される暗褐色シルトの水平堆積を検出し認知した。

＜重複遺構＞S K 15より古い。S I 20とも重複するが、新旧は不明である。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形で、規模は330×250cmである。

＜壁・床面＞壁はわずかな立ち上がりを確認した。床面はほぼ平坦である。

＜埋土＞暗褐色シルトによる単層である。

＜炉＞未検出であるが、重複により失われた部分にあった可能性はある。

＜遺物＞土器が95.6g出土したが、掲載したものはない。

＜時期＞出土土器から縄文中期後葉か。

(星)

(2) 土 坑

S K 01 土坑(第20図、写真図版23)

＜位置・検出状況＞調査区南部でS I 04とS I 05の中間地点に位置する。検出面はⅢ層である。

＜平面形・規模＞平面形は円形である。規模は開口部径約130cm、底部径90cmである。

＜壁・底面＞壁は外傾して立ち上がる。深さは最深部で約40cmを測る。底面はほぼ平坦である。

＜埋土＞黒褐色シルトである。

＜遺物＞検出面からとして139.3gの土器が出土しているが、状況的に基本層位Ⅲ層中の可能性が高い。よって、純然に本遺構に帰属できるとは言い難い。

＜時期＞詳細な時期については、上記の理由も相まって判然としませんが、埋土の様相や位置的状況から弥生時代の可能性がある。

(星)

SK02土坑(第20図、写真図版23)

＜位置・検出状況＞調査区南部でS I 03の北西側に近接する位置にある。検出面はⅢ層である。
 ＜平面形・規模＞確認できた平面形は楕円形である。規模は開口部径145cm、底部径60cmである。
 ＜壁・底面＞壁は外傾して立ち上がり、深さは最深部で約100cmを測る。Ⅳ～Ⅴ層中である。底面は平坦である。
 ＜埋土＞黒褐色粘土質シルトで、拳大以上の亜角礫を多数含む。自然堆積である。
 ＜遺物＞出土していない。
 ＜時期＞詳細な時期については判然としませんが、埋土の様相や位置的状況から弥生時代の可能性がある。

(星)

SK03土坑(第21図、写真図版23)

＜位置・検出状況＞S I 08精査中に同住居の南西側に巨礫が露出する黒色シルト円形プランを検出した。検出面はⅢ層上面相当。
 ＜重複遺構＞S I 08より古いと判断した。ただ、埋土が類似することから、大差ない時期(弥生後期)と判断しておきたい。
 ＜平面形・規模＞平面形はやや楕円形、規模は開口部140×120cm、底部100×80cmである。
 ＜壁・底面＞壁はほぼ直立し、深さは最深部で45cmである。底面は巨礫の流れ込みのせいか凹凸が激しい。平面形や床面図化上は巨礫を重んじていない。
 ＜埋土＞巨礫を複数含む黒色シルトである。自然堆積と思われる。また、巨礫も自然流入と判断される。あるいは土石流などの現象によるものかもしれない。
 ＜遺物＞出土していない。
 ＜時期＞詳細な時期については判然としませんが、埋土の様相及び位置的状況から弥生時代の可能性がある。

(星)

SK04土坑(第21図、写真図版23)

＜位置・検出状況＞S I 08精査中に同住居の東壁に黒色シルトによる円形プランを検出した。検出面はⅢ層上面相当である。
 ＜重複遺構＞S I 08より古いと判断した。ただ、埋土が類似することから、大差ない時期(弥生後期)と判断しておきたい。
 ＜平面形・規模＞平面形は不整形である。開口部径は150cm、底部径100cmである。
 ＜壁・底面＞壁は直立気味にやや外傾する。深さは55cmである。底面はほぼ平坦である。
 ＜埋土＞1～7a層に細分した。大別すれば埋土上位～中位に暗褐色シルト、下位や壁際に褐～黄褐色粘土質シルトが堆積する。自然堆積と判断した。
 ＜遺物＞土器片が10.6g出土した。掲載したものはない。
 ＜時期＞詳細な時期については判然としませんが、埋土の様相及び位置的な状況から弥生時代の可能性がある。

(星)

SK05土坑(第21図、写真図版24)

<位置・検出状況>調査区中央やや東側に位置する。S I 12床面南側～南壁際より検出した。近接してSK06が本遺構の西側に所在する。

<重複遺構>S I 12の床下より検出したことから、本遺構が古い。

<平面形・規模>平面形は不整形である。開口部150×135cm、底部径80～85cmである。

<壁・底面>壁は外傾して立ち上がり、深さは約45cmを測る。底面は丸底気味にある。

<埋土>埋土は褐色シルト主体に、最上位に暗褐色シルトが堆積する。埋土上位は硬く締まることから、埋戻しによる人為堆積層と判断した。

<遺物>土器が84.9g出土したが、掲載したものはない。

<時期>縄文時代中期と推定される。S I 12と大差ない時期に構築され、埋め戻されたかと捉えられる。SK06と同時期か。

(星)

SK06土坑(第21図、写真図版24)

<位置・検出状況>調査区中央やや東側に位置する。S I 12床面南西側～南西壁際より検出した。近接してSK05が本遺構の西側に所在する。。

<重複遺構>S I 12より古い。

<平面形・規模>平面形は楕円形、規模は開口部146×122cm、底部135×100cmである。

<壁・底面>壁は外傾して立ち上がる。深さは最深部で約35cm。底面は丸底気味を呈する。

<埋土>埋土は1～4a層に細分した。大局的には、暗褐色シルトと褐～黄褐色粘土による混合土と捉えられる。埋土上位は硬く締まることから、埋戻しによる人為堆積と判断される。

<遺物>出土していない。

<時期>S I 12より古い、S I 12と大差ない時期に構築され、埋め戻されたかと捉えられる。縄文時代中期と推定される。

(星)

SK07土坑(第22図、写真図版24)

<位置・検出状況>調査区北東側、S I 01のカマドの西側付近に位置する。S I 01精査過程で認識したため、現状の遺存状態は悪い。

<重複遺構>S I 01と重複し、これに切られる。

<平面形・規模>平面形は円形や楕円形が推測される。残存する部分から径100cm前後のものか。

<壁・底面>残存する壁はやや外傾して立ち上がり、深さは約45cmを測る。底面はほぼ平坦である。

<埋土>暗褐色土の単層である。

<遺物>埋土中から土器片48.5gが出土したが、掲載したものはない。

<時期>出土遺物から縄文時代中期中葉と推定される。

(小林)

SK08土坑(第22図、写真図版24)

<位置・検出状況>調査区北側に位置し、検出面はV層である。比較的明瞭な褐色土の円形プランを認識した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>開口部径約135cm、底部径85～95cmの円形を呈する。

<壁・底面>壁は外傾して立ち上がり、検出面からの深さは最深で約40cmを測る。底面はほぼ平坦で

ある。

<埋土>暗褐色土と褐色土の2層に分層した。自然堆積と思われる。

<遺物>土器片が82g出土した。掲載したものはない。

<時期>縄文時代中期が推定される。

(小林)

SK09土坑(第22図、写真図版25)

<位置・検出状況>調査区北側に位置し、検出面はV層である。褐色土の円形プランとして認識した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>開口部径約100cm、底部約50×35cmの円形を呈する。

<壁・底面>壁は底面から明確な変換点なく緩やかに立ち上がる。深さは最深部で約25cmを測る。底面は中央付近がやや窪む。全体的に播鉢状を呈する。

<埋土>2層に分層した。褐色土が主体である。自然堆積か。

<遺物>出土していない。

<時期>総体的に縄文時代中期と推定される。

(小林)

SK10土坑(第22図、写真図版25)

<位置・検出状況>調査区中央に位置し、検出面はV層である。暗褐色土の不整形なプランとして認識した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>開口部約190×130cm、底部約100×75cmの楕円形を呈する。

<壁・底面>壁は底面から直立するが、上部でやや外反する。深さは最深部で約50cmを測る。底面は概ね平坦である。

<埋土>2層に分層した。Ⅲ層起源の暗褐色土が主体である。自然堆積と判断される。

<遺物>出土していない。

<時期>総体的に縄文時代中期と推定される。

(小林)

SK11土坑(第22図、写真図版25/遺物：第30図、写真図版34)

<位置・検出状況>調査区北側に位置する。S122精査過程で検出した。当初はS122の床面施設と考えたが、この遺構に付属する柱穴を切ることから、単独の土坑であると判断した。

<重複遺構>上記のとおり、S122と重複し、これを切る。

<平面形・規模>開口部は一边約95cmの歪な四角形、底部は径約170cmの円形を呈する。

<壁・底面>壁は底面から内湾して立ち上がり、一旦すぼむが、上部で外反するいわゆるフラスコ状を呈する。深さは約175cmを測る。底面は概ね平坦である。

<埋土>6層に細分した。全体的に暗褐色土を主体とするが、一部、下位と最上位に褐色土が見られる。層位状況や各層の混入物等から鑑みると、自然堆積と思われる。

<遺物>土器が1.2kg出土した。埋土下位より出土した68を掲載した。なお、この68はSK16埋土上位出土の破片と遺構間接合している。

<時期・機能>出土遺物から縄文時代中期後葉に帰属すると判断される。また、形態からフラスコ状土坑と判断され、貯蔵穴として機能していたことが推察される。なお、埋土中位より検出した炭化物を年代測定したところ、3,930±30yrBP(14C年代)という結果が得られた。およそ出土土器の型式年代

とも齧跡は見られない。

(小林)

SK12土坑(第22図、写真図版25)

<位置・検出状況>調査区北側に位置し、V層で検出した。

<重複遺構>S I 22・SK13と重複し、これらを切る。

<平面形・規模>開口部約100×85cm、底部約100×70cmの楕円形を呈する。

<壁・底面>壁は南側ではほぼ直立し、北側では外側に膨らみ、上部ですばまる。深さは約60cmを測る。

<埋土>4層に細分した。褐色土と黄褐色土が交互に堆積する。IV・V層を起源とするものと思われ、自然流入したものか。

<遺物>土器が埋土下位より14.7g出土したが、掲載したものはない。

<時期>縄文時代中期が推測される。

(小林)

SK13土坑(第23図、写真図版26/遺物：第31図、写真図版34)

<位置・検出状況>調査区北側に位置し、V層で検出した。

<重複遺構>S I 22・SK12と重複し、SK12に切られ、S I 22を切る。

<平面形・規模>開口部約90×70cm、底部約60×50cmの楕円形を呈する。

<壁・底面>壁は底面から緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。深さは約20cmを測る。底面はやや凹凸が認められる。

<埋土>褐色土の単層である。混入物の状況から人為堆積の可能性がある。

<遺物>土器が854.3g出土した。底面より一括出土した69・70を掲載した。

<時期>出土遺物から縄文時代中期中葉～後葉に帰属すると判断される。

(小林)

SK14土坑(第23図、写真図版26)

<位置・検出状況>調査区北側に位置する。S I 22精査過程で確認した。

<重複遺構>S I 22と重複し、これを切る。

<平面形・規模>開口部径約80cm、底部約65×50cmの不整形円形を呈する。北側に底部がオーバーハングしている。

<壁・底面>壁は南西側ではほぼ直立し、北東側では外側に膨らんで立ち上がる。深さは約65cmを測る。底面は北側に向かってやや窪む。

<埋土>4層に細分した。最下層は締めりの認められない黄褐色土、これより上位は褐色土を主体とする。V層を起源とする自然流入土か。

<遺物>土器が80.9g出土した。掲載したものはない。

<時期>縄文時代中期に帰属すると推察される。

(小林)

SK15土坑(第23図、写真図版26/遺物：第31図、写真図版34)

<位置・検出状況>調査区北部に位置する。検出面はIV～V層中である。近隣には本遺構東側にS I 13が所在し、西側にはS I 26が所在する。

<重複遺構>S I 20・26と重複し、これらより新しいと判断した。

<平面形・規模>平面形はほぼ円形である。規模は開口部径約200cm、底部径150cmを測る。

<壁・底面>壁は外傾して立ち上がり、深さは約70cmを測る。底面はほぼ平坦である。

＜埋土＞1～6層に細分した。最上位に暗褐色シルト、中位以下は褐色シルト質砂質土を主体に壁際などに地山起源の黄褐色粘土(壁の崩壊土)が堆積する。1a層は木根攪乱の影響を強く受ける土層である。自然堆積である。

＜遺物＞埋土中より土器が105.7g出土し、掲載したものは71の1点である。

＜時期＞出土遺物は中期の土器小片であるが、埋土の様相からは縄文時代中期より新期の可能性もあるが、ここでは中期以降とだけしておく。

(星)

SK16土坑(第23図、写真図版26/遺物:第30図、写真図版34)

＜位置・検出状況＞調査区北側に位置する。S I 22精査過程で確認した。

＜重複遺構＞S I 22、一部S I 17とも重複し、これらを切ると思われる。

＜平面形・規模＞開口部径約75cm、底部約80×50cmの略円形を呈する。底部の南側は開口部より広くオーバーハングしており、北側が突出する凸字状をする。

＜壁・底面＞壁は底面から袋状に外側に膨らみ、中位で窄まる。フラスコ形の範疇に入る形状を成す。深さは約50cmを測る。底面は概ね平坦である。

＜埋土＞4層に細分した。下に廃棄と考えられる黄褐色土粘質土、中位に明黄褐色土、上位に褐色土が堆積する。

＜遺物＞土器が507.9g出土した。このうち、SK11と遺構間接合した68を掲載した。

＜時期＞形状・出土遺物から、縄文時代中期の範疇に収まるものと推察されるが、S I 17・22との重複関係から、これらより新期中葉～後葉と判断できる。

(小林)

SK18土坑(第23図、写真図版27)

＜位置・検出状況＞調査区北側に位置する。S I 17精査過程で確認した。

＜重複遺構＞S I 17及び実質的にはS I 21とも重複していたものと思われる。S I 17の床面にて確認、断面ベルトにもかかるが、S I 17埋土中では確認できないことから、本遺構が切られたものと判断できる。また、S I 21石囲炉が本遺構に切られることなく存在することから、こちらも本遺構を切るものと考えられる。

＜平面形・規模＞開口部径約125×110cm、底部径約130×110cmの楕円形を呈する。

＜壁・底面＞断面形はフラスコ形をし、深さは約120cmを測る。底面はほぼ平坦である。

＜埋土＞5層に細分した。下位は褐色土、中位は明黄褐色土、上位は暗褐色土となる。自然堆積と考えられる。

＜遺物＞土器が6.2g出土した。掲載したものは無い。

＜時期・機能＞縄文時代中期の範疇に留まり、重複関係から中期後葉が推測される。形態から貯蔵施設として機能していたものと判断される。なお、埋土中より検出した炭化物を年代測定したところ、 $3,980 \pm 30 \text{yrBP}$ (^{14}C 年代)という結果が得られた。

(小林)

SK19土坑(第24図、写真図版27)

＜位置・検出状況＞調査区北部に位置する。S I 01床面に検出した。V層相当である。

＜重複遺構＞S I 01より古い。

＜平面形・規模＞平面形はほぼ円形である。規模は開口部径125cm、底部径65～70cmである。

＜壁・底面＞壁は外傾して立ち上がり、深さは最深部で約60cmを測る。底面はほぼ平坦である。

<埋土>1～5層に細分される。埋土上位に1・2層黒褐色シルト、中位に3層シルト質砂質土、下位に暗褐色シルトが、東壁際中心に壁の地山崩壊土系である4層が堆積する。自然堆積の様相で捉えたが、明確ではない。

<遺物>出土遺物はない。

<時期>埋土の様相から弥生後期の可能性もあるが、詳細不明。

(星)

SK20土坑(第24図、写真図版27)

<位置・検出状況>調査区北側に位置する。S I 22精査過程で検出した。

<重複遺構>S I 22・SK21と重複し、これら为本遺構が切る。

<平面形・規模>開口部径約95cm、底部径約100～110cmの円形を呈する。

<壁・底面>断面形は寸胴に近いフラスコ状を呈する。深さは最深部で約150cmを測る。底面はほぼ平坦である。

<埋土>10層に細分した。下半にかけては概ねV層起源の黄褐色土を主体とし、その上位に壁上部の崩落土、最上位にIV層起源の褐色土が堆積する。自然堆積と捉えたい。

<遺物>土器が15.1g出土した。掲載したものはない。

<時期・機能>形態等から縄文時代中期に帰属する可能性が高く、貯蔵施設として機能していたものと推察される。

(小林)

SK21土坑(第24図、写真図版27)

<位置・検出状況>調査区北側に位置する。S I 22精査過程で検出した。

<重複遺構>S I 22・SK20と重複し、S I 22を切り、SK20に切られる。

<平面形・規模>大部分がSK20により切られるため消失している。残存部から推定すると、開口部径約100cmの円形を呈するものと思われる。

<壁・底面>確認できる部分の壁はやや外傾して立ち上がり、深さは約25cmを測る。底面はほぼ平坦である。

<埋土>V層起源の明黄褐色土の単層である。自然堆積と思われる。

<遺物>出土していない。

<時期>縄文時代中期か。詳細は不明。

(小林)

(3)土器埋設遺構

SF01土器埋設遺構(第24図、写真図版28/遺物:第31図、写真図版34)

<位置・検出状況>調査区北側に位置する。S I 17埋土中で検出した。単独の土器埋設遺構として報告するが、堅穴住居内床面に設置された埋設土器の可能性も考えられる。最後まで精査を行ったが、この周辺は遺構重複が著しいこともあり、明確にこれを伴う住居を認識することはできなかった。可能性としては、S I 21とした石囲炉しか確認できなかったものが該当するかもしれないが、判断としなかった。

<重複遺構>上記のとおり、S I 17より新しい。

<規模>径約35cm、深さ約25cmの掘り方に深鉢を正位して設置している。土器の底部は存在しない。

<埋土>土器内部は3層に細分されるが、いずれも褐色土を主体とする。掘り方土も褐色土で、地山

に非常によく似る。

<遺物>埋設土器である72を掲載した。

<時期>土器から縄文時代中期後葉と判断される。

(小林)

(4) 焼土遺構

SN01焼土遺構(第24図、写真図版28)

<位置・検出状況>調査区北西側に位置し、V層で検出した。試掘トレンチにかかったことから、半分が損壊している。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>径約50cmの円状に焼成範囲が形成されているものと推測される。

<厚さ・色調>赤褐色を呈し、焼成深度は約5cmである。

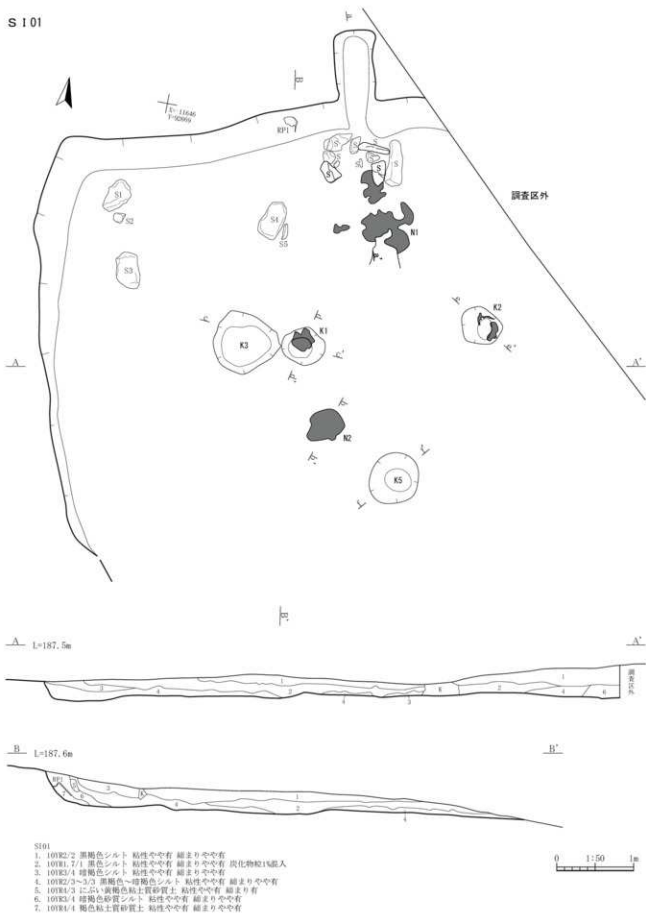
<遺物>なし。

<時期・機能>詳細は不明である。

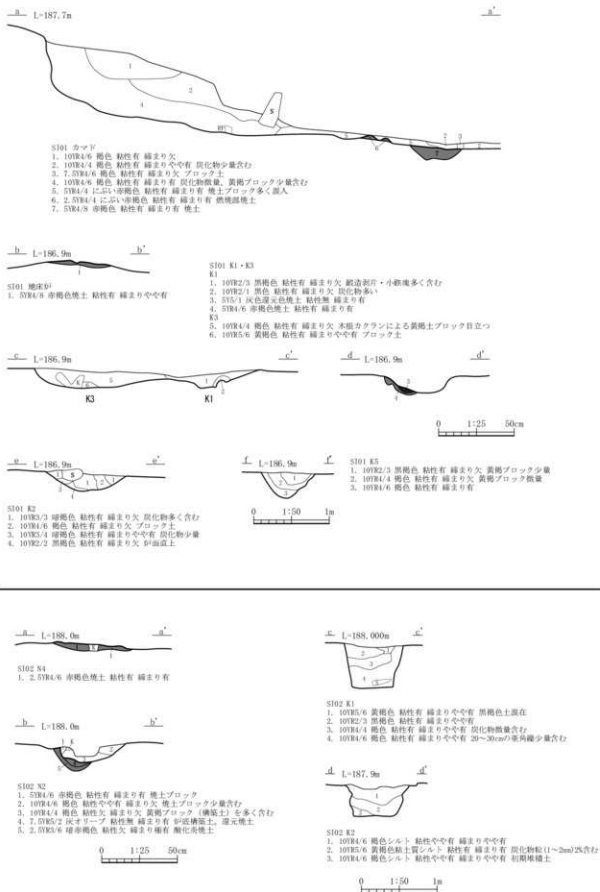
(小林)

第2表 遺構一覧表

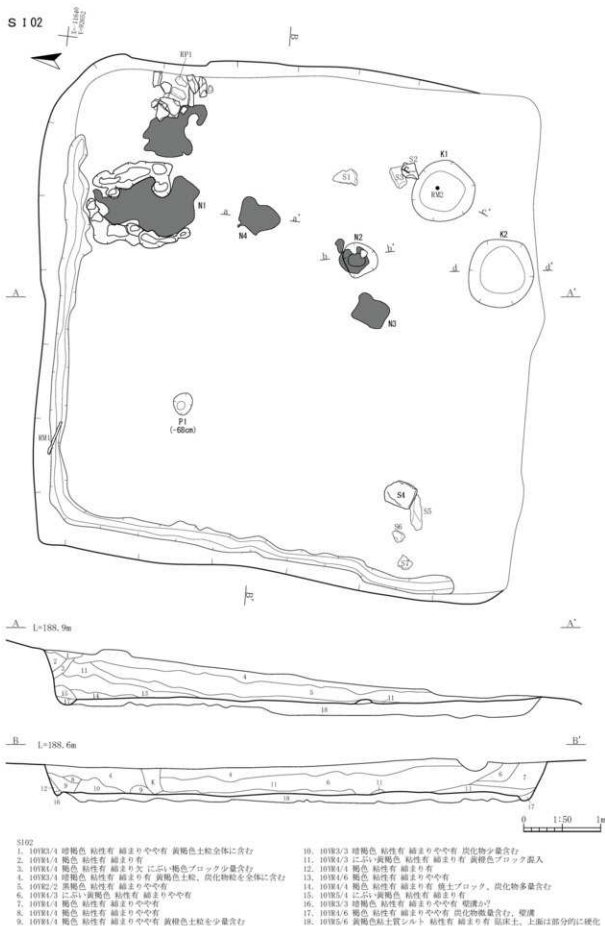
遺構名	推定時期	発見遺物				遺構図版	遺物図版
		土器	石器	土製品	鉄製品		
S101	平安(9C)	1~7	94~96	123・125・126	---	6・7	25・33・36
S102	平安(9C末~10C初)	8~15	97~100	---	127・128	7~9	25・26・33・36
S103	弥生前期(赤穴式)	16~22	---	---	---	10	26
S104	弥生中期	23~28	---	---	---	10	26
S105	弥生前期(赤穴式)	16・20・31~35	---	---	---	11	27
S107	縄文中期後葉(大木9~10式)	36~41	101	---	---	12	27・28・33
S108	弥生前期(赤穴式)	42~44	102	---	---	12	28・34
S109	縄文中期	---	---	---	---	13	---
S110	縄文中期中~後葉?	44・45	---	---	---	13	28
S111	弥生前期?	16・46~48	103・104	---	---	14	28・34
S112	縄文中期	---	---	---	---	14	---
S113	縄文中期末葉(大木10式)	49~54	105~108	---	---	15	28・29・34
S117	縄文中期中~後葉	56~64	109~111	---	---	16・17	29・30・35
S118	弥生前期?	65	---	---	---	17	30
S120	縄文中期	---	---	---	---	18	---
S121	縄文中期中~後葉?	---	---	---	---	18	---
S122	縄文中期中葉	66・67	112~115	---	---	19	30・35
S124	縄文中期	---	---	---	---	20	---
S126	縄文中期後葉?	---	---	---	---	20	---
SK01	弥生	---	---	---	---	20	---
SK02	弥生	---	---	---	---	20	---
SK03	弥生	---	---	---	---	21	---
SK04	弥生	---	---	---	---	21	---
SK05	縄文中期	---	---	---	---	21	---
SK06	縄文中期	---	---	---	---	21	---
SK07	縄文中期中葉?	---	---	---	---	22	---
SK08	縄文中期	---	---	---	---	22	---
SK09	縄文中期	---	---	---	---	22	---
SK10	縄文中期	---	---	---	---	22	---
SK11	縄文中期後葉	68	---	---	---	22	30
SK12	縄文中期	---	---	---	---	22	---
SK13	縄文中期中~後葉	69・70	---	---	---	23	31
SK14	縄文中期	---	---	---	---	23	---
SK15	縄文中期	71	---	---	---	23	31
SK16	縄文中期中~後葉	68	---	---	---	23	30
SK18	縄文中期後葉	---	---	---	---	23	---
SK19	弥生?	---	---	---	---	24	---
SK20	縄文中期	---	---	---	---	24	---
SK21	縄文中期?	---	---	---	---	24	---
SF01	縄文中期後葉	72	---	---	---	24	31
SN01	不明	---	---	---	---	24	---



第6図 S 101竪穴住居跡①

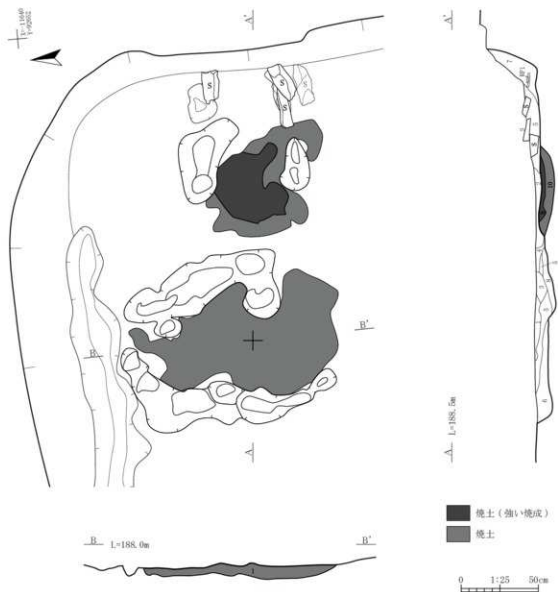


第7図 S101②・02竪穴住居跡①



第8図 S 102竪穴住居跡②

S102 カマド



S102 カマド (A-A')

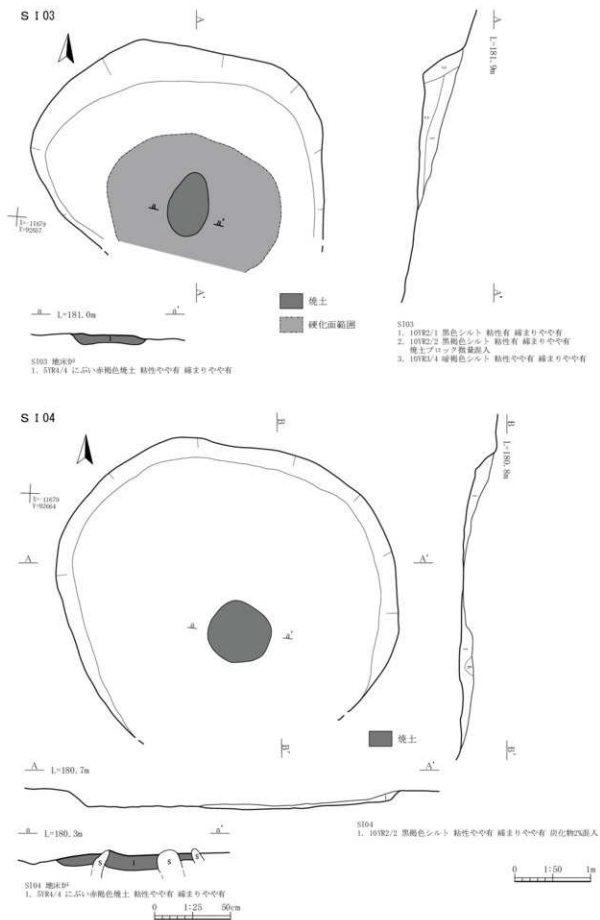
1. 101R2/4 赤褐色 粘性有 結まり有
2. 101R3/4 暗褐色 粘性有 結まり有 焼土粒・炭化物多く含む
3. 101R3/3 暗褐色 粘性有 結まり有や有 炭化物少量
4. 101R4/4 褐色 粘性有 結まり有
5. 101R4/4 褐色 粘性有 結まり有 焼土粒・炭化物少量
6. 101R4/3 にぶい黄褐色 粘性有 結まり有や有 黄褐色ブロック少量
7. 101R4/4 褐色 粘性有 結まり有 炭化物・黄褐色ブロック少量
8. 51R4/4 にこり赤褐色 粘性有 結まり有 硬結土
9. 2.51R4/5 赤褐色焼土 粘性有 結まり有 強く焼成
10. 51R4/6 赤褐色 粘性有 結まり有 焼土

S102 カマド (B-B')

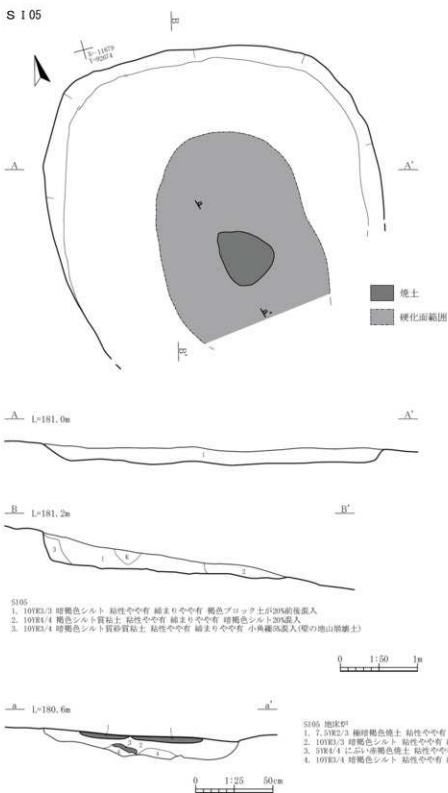
1. 51R4/6 赤褐色焼土 粘性有 結まり有

第9図 S102竪穴住居跡③

3 検出遺構

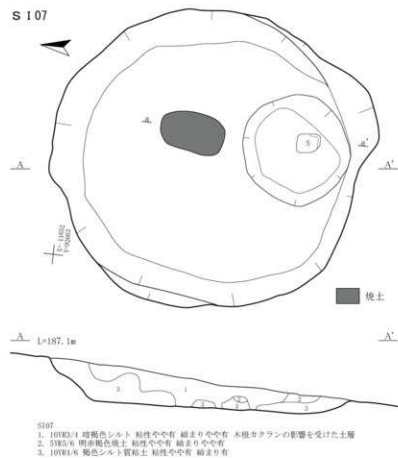


第10図 S I 03・04竪穴住居跡

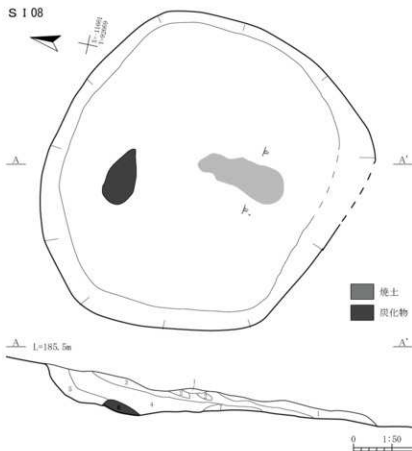


第11図 S 105竪穴住居跡

3 検出遺構

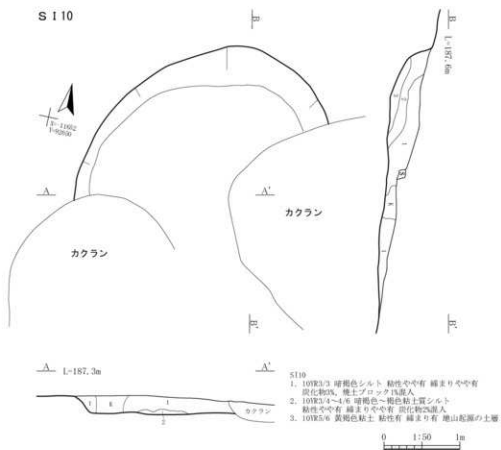
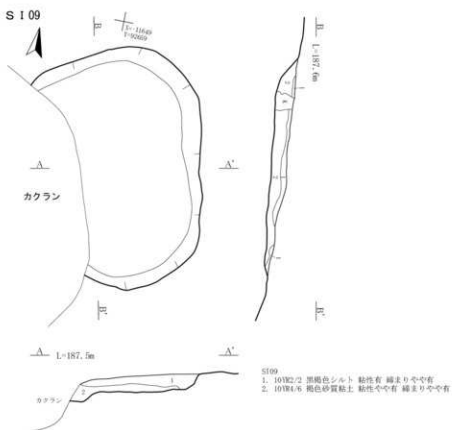


- S107 切
1. 5YR4/6 赤褐色粘土 粘性やや有 締まり有
 2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性有 締まりやや有

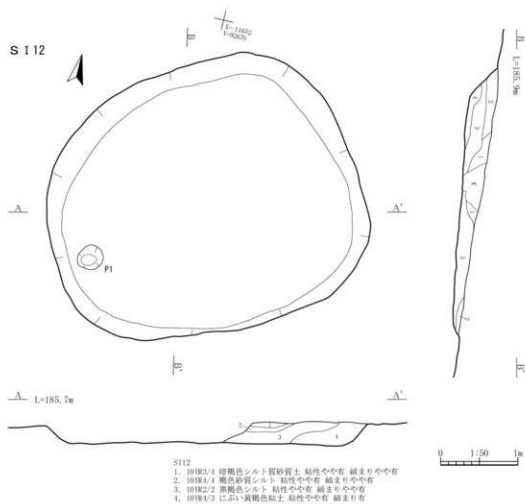
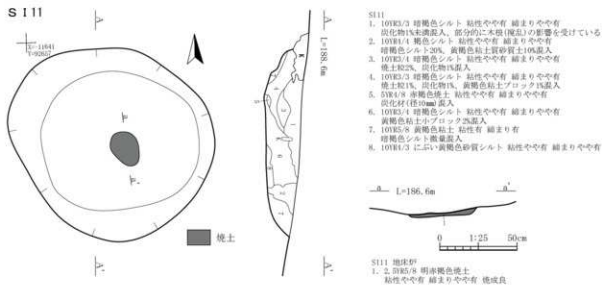


- S108
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まりやや有
 2. 10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まりやや有
 3. 10YR2/3 赤褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
 4. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有
 5. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有 炭化物2%混入
 6. 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性有 締まりやや有 町の池山粘土
 7. 10YR2/3 赤褐色 粘性 締まり 炭化物混雜
- 0 1:50 1m

第12図 S 107・08竪穴住居跡

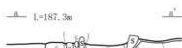
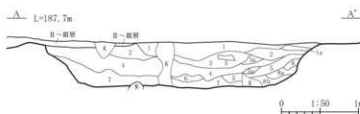
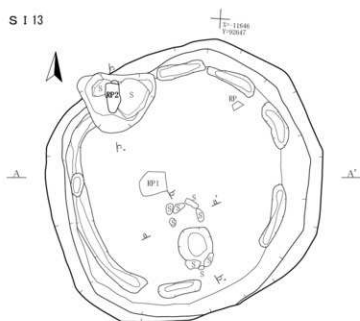


第13図 S109・10竪穴住居跡



第14図 S 111・12竪穴住居跡

S 113



S113 部

1. 10VR/3 濃い黄褐色シルト質砂質土 粘性やや有 締まりやや有 根立方土
2. 10VR/3 暗褐色シルト 粘性有 締まり有 炭化物残片、黄褐色粘土ブロック混入、砂底に貼った土、やや堆積を受けた感じ
3. 10VR/4 褐色シルト質粘土 粘性やや有 締まり有 S113の陥窪



S113 埋設土部

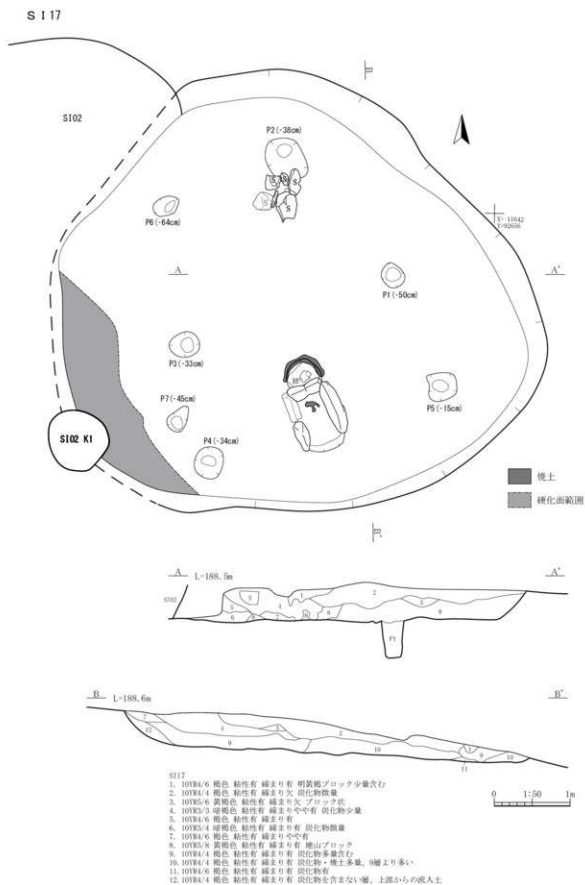
1. 10VR/6 黄褐色シルト質粘土 粘性やや有 締まり有 根立方土
2. 10VR/6 褐色シルト質粘土 粘性やや有 締まり有 S113の陥窪



S113

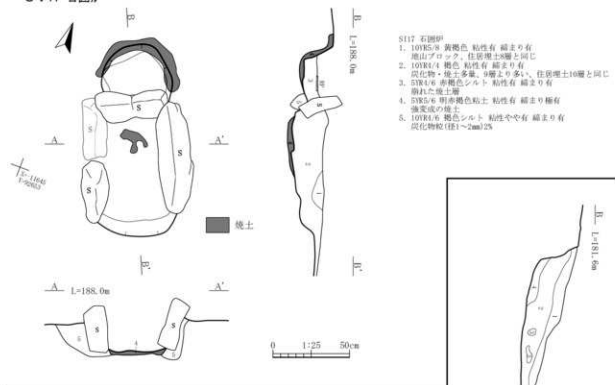
1. 10VR/3 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
- 1a. 10VR/3 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
ブロック層
2. 10VR/4 褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
3. 10VR/3~4/4 暗褐色~褐色シルト
粘性やや有 締まりやや有
黄褐色粘土小ブロック混入
- 3a. 10VR/4 褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
ブロック層
4. 10VR/3 黄褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
褐色シルト混入
5. 10VR/4 褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
- 5a. 10VR/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
6. 10VR/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
7. 10VR/4 褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まりやや有
8. 10VR/6 黄褐色粘土 粘性やや有 締まり有
- 8a. 10VR/4 褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有
- 8b. 10VR/6 褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有

第15図 S 113竪穴住居跡



第16図 S 117竪穴住居跡①

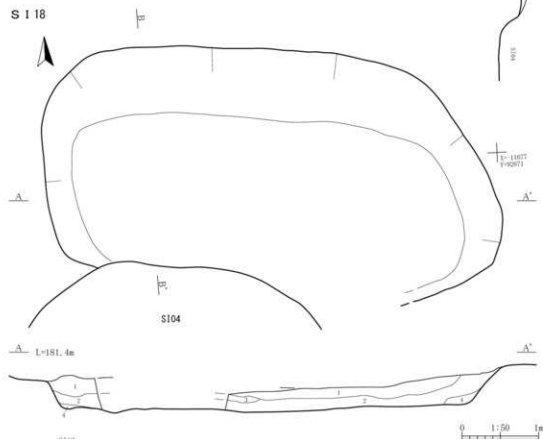
S 117 石囲炉



S117 石囲炉

1. 10YR5/8 黄褐色 粘性有 締まり有
地山ブロック、住居埋土と同じ
2. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり有
炭化物・灰土多量、9層より多い、住居埋土10層と同じ
3. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性有 締まり有
崩れた焼土層
4. 5YR5/6 明赤褐色粘土 粘性有 締まり極有
焼土成の粘土
5. 10YR1/6 褐色シルト 粘性やや有 締まり有
炭化物較(厚1~2mm)2%

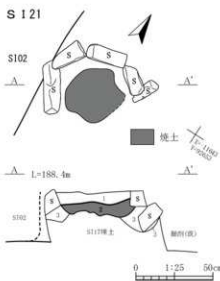
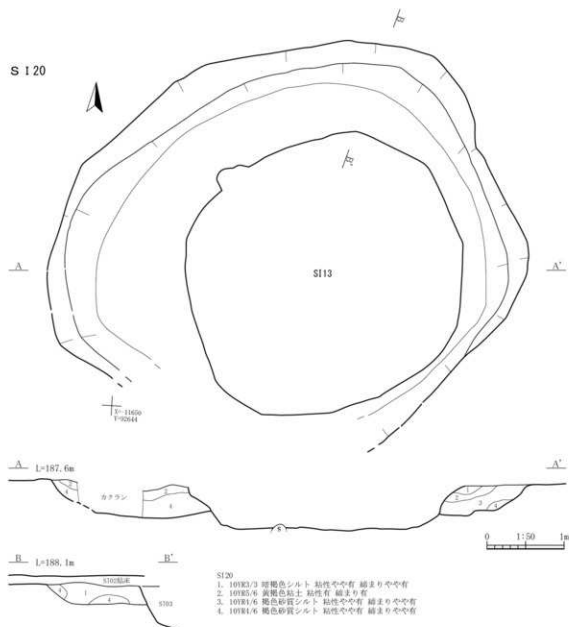
S 118



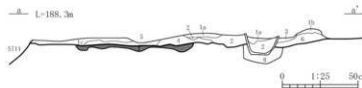
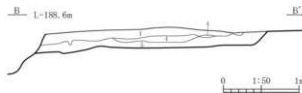
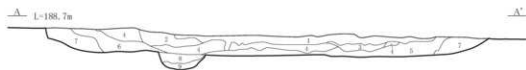
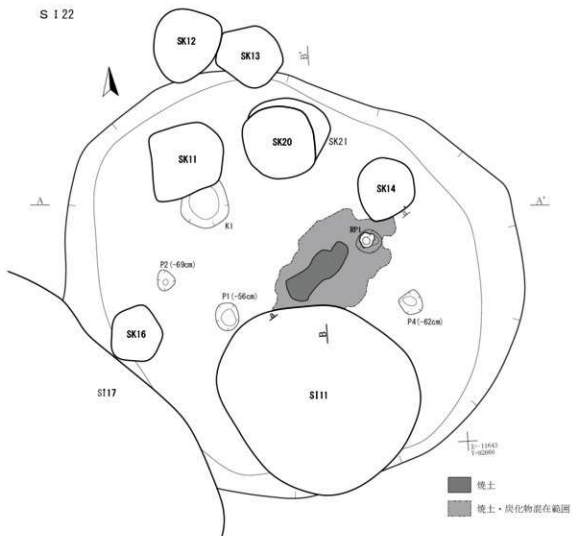
S118

1. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性やや有 締まり欠
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まり欠
3. 5YR1/9 赤褐色シルト 粘性やや有 締まり欠 焼土ブロック(隙間のみ)
4. 10YR1/4 褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有 層崩壊土?

第17図 S 117②・18壁穴住居跡



第18図 S 120・21竪穴住居跡



S122

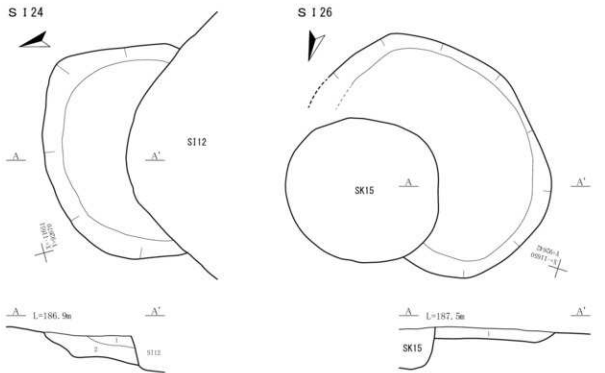
1. 10YR3/4 緑褐色シルト 粘性やや有 締まり有
2. 10YR3/4 緑褐色シルト 粘性やや有 締まり有
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや有 締まり有
4. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや有 締まり有
少量崩落の礫多く含む
5. 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや有 締まり有
炭化物(片)~5mm程度在
6. 10YR4/4 褐色シルト 粘性有 締まり有
7. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有 地山流入土
8. 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
小礫(径10mm~)10%在
9. 10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有

S122 埋設土器・P4

- 1a. 2. 5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性やや有 締まりやや有
- 1b. 5YR5/6 明赤褐色焼土 粘性やや有 締まりやや有
- 1c. 5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性やや有 締まりやや有
埋没のみに非赤褐色部分有
2. 7. 5YR2/3 極緑褐色シルト 粘性やや有 締まり有
炭化物(径3~10mm)7%混入
3. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
4. 5YR3/6 暗赤褐色焼土 粘性有 締まり有
5. 10YR4/6 褐色粘土 粘性有 締まり有 地山類似土
6. 10YR4/6 褐色粘土 粘性有 締まりやや有
炭化物約5%混入
7. 5YR6/8 褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有
微量炭の焼土
8. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有
埋設土器崩り方埋土

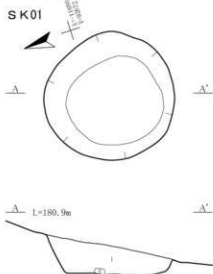
第19図 S 1 22 竪穴住居跡

3 検出遺構

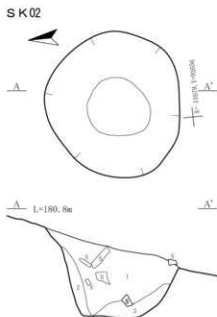


- S124
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
 2. 10YR1/6 褐色粘土 粘性やや有 締まりやや有 暗褐色シルト10%混入

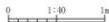
- S126
1. 10YR1/4 褐色シルト 粘性有 締まり有
 2. 10YR5/6 黄褐色粘土 粘性有 締まり有 地山系の土



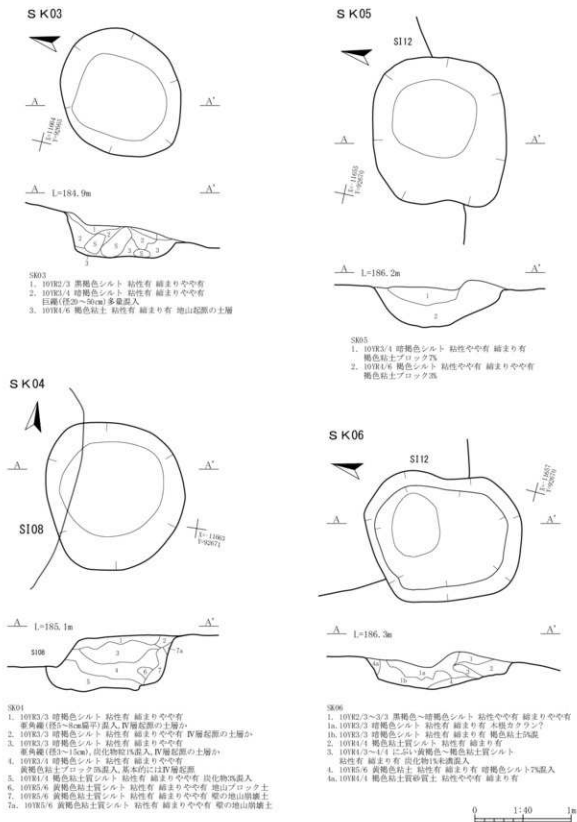
- SK01
1. 10YR2/3 黄褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有 褐色粘土混入, 自然埋没



- SK02
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まりやや有 人掘りの垂直線混入, 自然埋没
 2. 10YR2/4 暗褐色シルト質砂質土 粘性やや有 締まりやや有 粘板岩小片混入, 地山崩壊土
 3. 10YR3/4 暗褐色シルト質砂質土 粘性やや有 締まりやや有 褐色粘土質シルト20%混入, 地山崩壊土

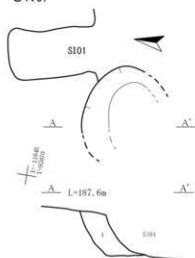


第20図 S124・26壁穴住居跡、SK01・02土坑



第21図 SK03~06土坑

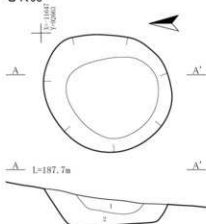
SK07



SK07

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性有 締まりやや有

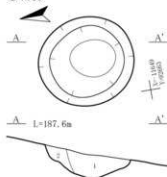
SK08



SK08

1. 10YR2/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
2. 10YR1/6 褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有

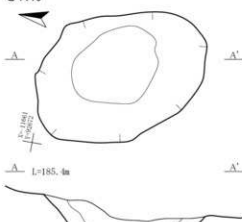
SK09



SK09

1. 10YR1/6 褐色シルト質砂質土 粘性やや有 締まり有 炭化物1%未満混入
2. 10YR1/6~5/8 褐色~黄褐色粘土 粘性やや有 締まり有 暗褐色シルト混入

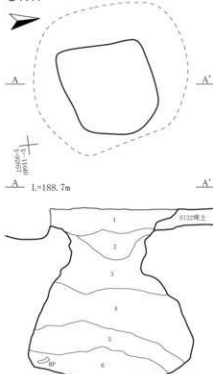
SK10



SK10

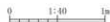
1. 10YR2/3 暗褐色砂質シルト 粘性やや有 締まり欠
2. 2~3mmの炭化物塊混入有
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性やや有 締まり欠
- 4~5cmの塊が少量、黄褐色ブロックが一部入る

SK11

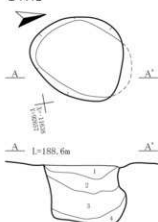


SK11

1. 10YR1/6 褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有 炭化物(2~5mm)1%,明黄褐色シルト(2~3mm)混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有 炭化物1%混入
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性有 締まりやや有 炭化物1%、黄褐色粘土2%混入
4. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性有 締まりやや有 黄褐色粘土混入
5. 10YR1/6 褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
6. 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 粘性有 締まりやや有 炭化物1%混入



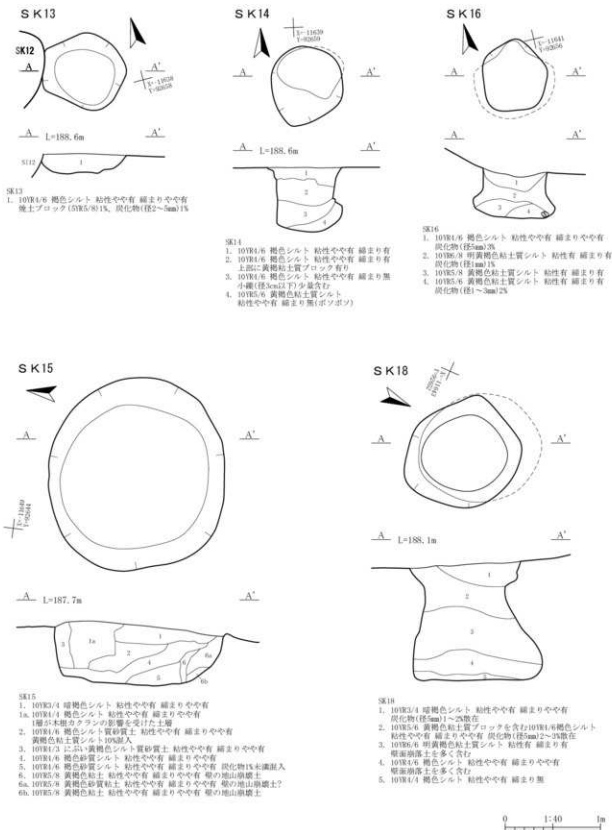
SK12



SK12

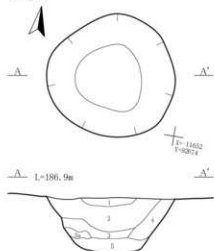
1. 10YR1/6 褐色シルト 粘性やや有 締まり有
2. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有 炭化物(径1~5mm)1%
3. 10YR1/6 褐色シルト 粘性やや有 締まり有 炭化物(径1~3mm)1%,明黄褐色(10YR5/6)粘質シルトブロック混
4. 10YR5/9 黄褐色シルト 粘性有 締まりやや有 明黄褐色(10YR5/8)粘質シルトブロック混

第22図 SK07~12土坑



第23図 SK13~16・18土坑

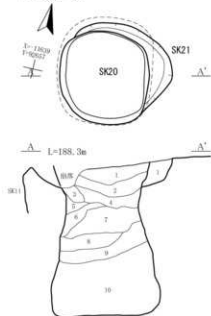
SK19



SK19

- 10R2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有 炭化物(径3mm程)3%混入
- 10R2/3 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有 炭化物(径2~5mm程)2%、褐色粘土1%混入
- 10R3/4 暗褐色シルト質砂質土 粘性やや有 締まりやや有
3a. 10R4/3 に近い黄褐色シルト質砂質土 粘性やや有 締まりやや有
炭化物1%混入、黄褐色粘土質砂質土20%混入
- 10R3/8 黄褐色粘土 粘性やや有 締まりやや有
暗褐色シルト20%混入
- 10R1/3 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
炭化物2%、黄褐色粘土7%混入

SK20・21



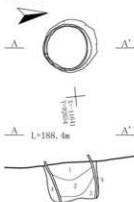
SK20

- 10R4/6 褐色粘土 粘性有 締まり有
炭化物2%、黄褐色粘土10%、3層土7%混入
- 10R4/4 褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有 炭化物2%混入
- SS5/2 灰土層 粘性有 締まりやや有 小片鐵30%混入
- 10R4/4 褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
- 10R5/6 黄褐色粘土 粘性有 締まりやや有
暗褐色シルト13%混入、礫の地山層礫土
- 10R3/4~14 暗褐色~褐色土質シルト 粘性有 締まり欠
- 10R5/4 に近い黄褐色粘土 粘性有 締まり有 3層土10%混入
- 10R5/6 黄褐色粘土 粘性有 締まり有 マサ土(径2~5cm)10%混入
- 10R5/8 黄褐色粘土 粘性有 締まりやや有
- 10R5/6 黄褐色粘土 粘性有 締まり有
SS5/4オリーブ粘土多く混じる(40%)、径5~10cm礫2%混入

SK21

- 10R6/8 明褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有 小礫30%混入

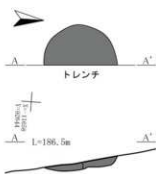
SF01



SF01

- 10R4/6 褐色シルト 粘性やや有 締まり有
炭化物(径1cm)少量
- 10R4/4 褐色シルト 粘性やや有 締まり有
炭化物(径1cm)1%混入
- 10R4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有
- 10R4/6 褐色シルト 粘性やや有 締まり有

SN01



SN01

- 10R4/8 赤褐色焼土 粘性やや有 締まりやや有

第24図 SK19~21土坑、SF01土器埋設遺構、SN01焼土遺構

V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総量は、大コンテナ(42×32×40cm)で8箱(総重量105.5kg)である。これらを土器、石器・石製品、土製品、鉄製品に分類した。各種の内訳は土器が大コンテナ5箱、石器・石製品が同3箱、土製品が4点、鉄製品が2点である。ここでは、遺構内と遺構外出土遺物を併せて扱い報告する。

1 土 器

今回の調査で出土した土器は、大コンテナで5箱(総重量59.6kg)、遺構内外の内訳は遺構内土器が45.2kg(76%)、遺構外土器が14.4kg(24%)である。このうち、掲載したのは93点である。全体的に遺構内外とも、完形に近く復元できるほどの個体は少なく、破片が多い印象である。時期としては、縄文時代中期にほぼ集中し、次いで弥生時代中～後期のものが目立つ。このほか、平安時代の遺構に伴い出土した土師器・灰軸陶器なども見られるが、出土数は少数である。これらを時期ごとに、①平安時代、②弥生時代後期、③弥生時代中期～後期、④縄文時代中期後葉、⑤縄文時代中期中葉、⑥縄文時代中期前葉、⑦その他の7つに分類した。以下、この順に概観する。

<①平安時代> S I 01・02からの出土のみで、土師器(1・9)と灰軸陶器(8)がある。1・9とも外面の剥落が著しく、調整は不明である。1は甕、9は碗か。9世紀代の可能性がある。8は狼投産で、9世紀末～10世紀初頭のものと考えられる。

<②弥生時代後期> 後期と推定されるものを集めた(16・20～22・31～35・42～44・65・73～75)。交互刺突文、沈線文、磨消縄文、無文など、多様な特徴が認められる。また、上記が併用して認められるものもある。概して節の小さな縄文原体が用いられており、従来特殊捺糸文と呼ばれていた類と思われる。交互刺突文が認められるのは3点で、16・44・73がある。16は、平行沈線内に交互刺突文が認められる。また、交互刺突文内や沈線内には、赤色顔料の塗布が認められる。44と73は接合しなかったものの同一個体と考えられる。RL横回転を施文する部分と、無文部に稚拙な沈線による文様がモチーフされ、沈線間に交互刺突文が認められる部分がある。44・73はいわゆる赤穴式に、16は赤穴式よりやや古手の可能性がある。31・32は稚拙気味の沈線文が認められる。31は2段の鋸歯状文が描かれ、下段は平行気味の沈線で引かれる。32はLR+Lによる付加条縄文を斜位・横位に回転施文後に、横位方向に沈線文が引かれる。赤穴式の範疇に入るものであろう。42はRL(若しくはR)→沈線→縄文帯による菱形文(磨消縄文)の施文順をとる。また赤色顔料の塗布が認められる。赤穴式に相当する。33・34・35は地文のみが認められる破片である。33は付加条縄文(LR)による横回転を施文する。34・35はLR横回転を基調に斜回転が施文される。これらも赤穴式と考えられる。20・21・22は無文の土器で胎土の様相からは土師器にも類似し、弥生後期の中でもやや新しい段階の可能性(赤穴式より新段階か)。20は外面の調整に特徴があり、ナデー縦ミガキが施される。外面に煤が付着し、内面には焼けはじけが顕著に見られる。22は横を基調に斜めなどの方向にヘラミガキが施される。また、頸部と推定される土器片上部にわずかではあるが縄文原体が認められる。

<③弥生時代中期～後期> 中期～後期と時期幅を広げて捉えたものである。S I 03出土の17～19、S I 04出土の26などを含めた。

<④弥生時代中期> 中期と推定されるものを集めた(23～25・27・28)。特徴としては、条が縦に走る

単節斜行縄文が特徴的に施文される(※燃糸文にも類似する、また付加条の可能性もあるが判別できなかったことを付記する)。出土地点は全てS104である。全般に内面には焼けはじけが顕著に見られる。23・24は口縁部に多重沈線が描かれ、一部分が縄文部と重複する(縄文→沈線)。また、24は連弧文が認められる。なお、25は植物茎の回転により施文された擬似縄文でカナムグラの茎が用いられている。

<④縄文時代中期後葉>大木9・10式に比定されるものを含めた(36・39・47・50・78)。大木9式としては、縦位展開する曲線文と□字文といったものが見られる。36・37は接合部はないが同一個体である。口縁部には刺突文、胴部全体には沈線による□字文が施文される。□字文内には単節縄文が縦位回転施文され、□字文間はナデ調整(磨り消し)がされている。47・48も明確ではないが、沈線による曲線文が施されている。大木10式としたものは、38・39・49・50である。38はヒレ状の突起を持ち、沈線による波頭文が連続する。49は埋設された完形個体である。「入」字状のアルファベット文が沈線により区画され、外部には単節縄文が充填される。39・50は縄文のみだが、いずれも住居床面出土のもので、この型式の粗製土器と判断される。寸胴な器形を呈するが、下半部がやや膨らむ。単節縄文が縦位回転施文されている。

<⑤縄文時代中期中葉>大木8 a・8 b式に比定されるものを集めた(10・51・52・66・79~83)。大木8 a式としたものは、遺構内からの出土はなく、すべて遺構外からの出土である。79は円文状の突起が波状口縁部に取り付き、口縁部沿いに単節縄文圧痕が施文される。80・81・82はいわゆるキャリパー形の器形を呈すると推測されるもので、山型に隆沈線が見られる。また、頸部を区画帯とし、これを境に縄文の条方向が異なる。81・82は単節縄文で、上部は横位回転、下部は縦位回転が施される。80は上部は単節縄文圧痕、下部は複節縄文の縦位回転が施文される。

<⑥縄文時代中期前葉>大木7 a・7 b式に比定されるものである(13・62・84~92)。明確にこれらの型式と分離して判別するのが困難な個体もあり、中期前葉としたものも多い。遺構内からの出土は少なく、遺構外からの出土が目立つ。13は数条の沈線間に刺突文が連続する。大木7 a式に含まれるか、84・85は縄文圧痕により菱形文を形成するものである。86は口縁部に垂下する隆線と数条の並行する沈線が見られる。88は2条の沈線が鋸歯状をなす。これらは大木7 b式に帰属するものと考えられる。62・89~92は地文のみであるが、62は網目状となる単軸絡条体5類、89・92は付加条縄文、90・91は縦位の結束羽状縄文が見られる。なお、87は口縁部の上部に隆線とこの表面に刺突が施文されるものである。型式的には円筒下層d式に分類される可能性が高い。通論的には縄文前期末葉に区分されるが、概期の遺物はほかに見られないことから、本遺跡では大木7 a式期に含まれるものと仮定し、ここに含めた。

<⑦その他>型式の特定できなかったものを一括した。主に地文だけのものだが、一部の文様しか確認できないため不明なものもある。大半は縄文中期内には取まるものと想定され、特にも中期中葉~後葉となる可能性が高い。4は2対の口縁部突起を持ち、全体には結節付加条縄文による縦位回転施文が見られる。5・6・45・54・58・59・69は縦位回転縄文が施文されるが、口縁部上端は幅の広い無文帯となる。縦位回転施文による縄文が多く見られるが、7・14・40・41・53・54・57・60・61・63・67・68・70・71・72・93がこれに当たる。単節縄文がほとんどだが、41は無節、54・57・70・93は複節縄文である。また、64は同様に縦位回転縄文が見られるが、単節+無節の付加条縄文によるミニチュア土器である。一方、少数だが29・30などは横位回転施文が見られるものがある。胎土状況や色調から縄文後期の可能性を示したが、出土地点のS104は弥生中期の堅穴住居であることも踏まえ、この時期に含まれる可能性も考えられる。

2 石器・石製品

今回の調査で出土した石器・石製品は、大コンテナで3箱(総重量43.4kg)である。このうち、掲載したのは29点である。掲載器種は、石鏃・石錐・石匙・スクレイパー類・石核・磨製石斧・敲磨器類・台石・石皿類が確認された。原則全点を掲載することとしたが、敲磨器類のみ掲載に至らなかったものもある。これらには自然石との判別が付かないものが含まれており、明らかな人為痕跡が認められるものを掲載対象とした。全体的な傾向としては、分類した結果、敲磨器類の比率が高いようであるが、そもそも石器類自体の出土数が遺構数に対して非常に少ないと言える。以下、器種ごとに概観する。

<①石鏃> 3点(109・112・117)が出土した。いずれも中茎を持たない無茎鏃である。109・112は下部にわずかに抉りが見られる。117は細長い形状をする。

<②石錐> 1点(103)が出土した。

<③石匙> 1点(105)が出土した。つまみ部を上部にした場合の形状から、斜型に分類されるものに該当する。裏面にはあまり剥離調整が認められない。

<④スクレイパー類> 定形性がなく、一部に剥離痕を有するものを総称した。5点(97・106・117～119)が出土した。97・106は片面の両側縁辺部に、117は片面の下端部に、118は両面の片側縁辺部に剥離が見られる。119は両面の縁辺部全周に調整痕が認められる。

<⑤石核> 1点(102)のみが出土した。

<⑥磨製石斧> 2点(107・120)が出土した。107は上下端部に使用痕跡を残すもので、摩耗している。120は小型のもので、下端の刃部には使用痕によるものか、剥離痕が認められる。

<⑦敲磨器類> 礫に敲打痕や磨り痕が認められるものを総称した。12点を掲載している。98・113は敲打痕、96・99・104・110・115・112は磨り痕、95・108・114・121は敲磨両痕跡が認められる。

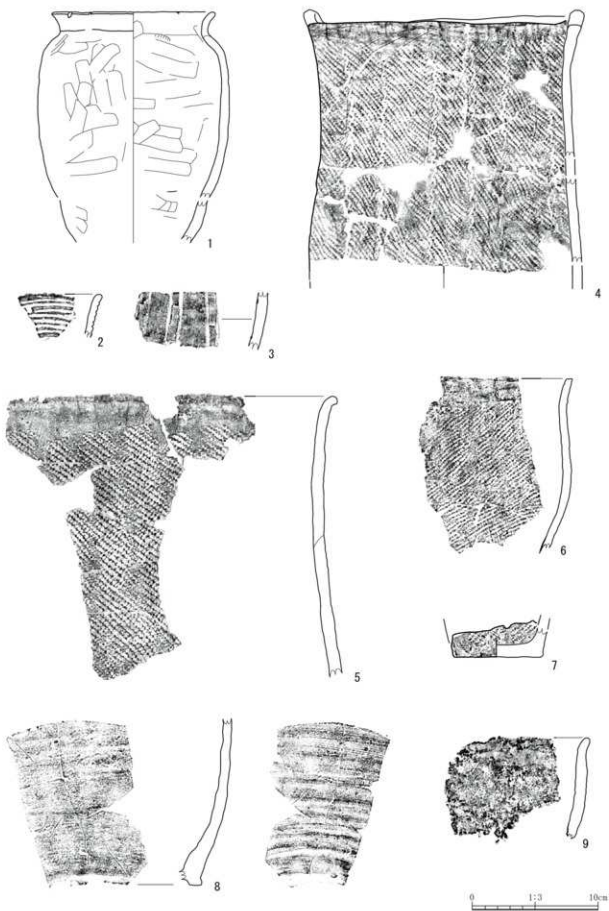
<⑧台石・石皿類> 使用痕跡のある扁平部分を持つ礫をまとめた。4点(94・100・101・111)を掲載した。94はS I 01床面出土のものである。強い被熱を受けたものと考えられ、表面は赤変している。鍛錬鍛冶を行っていた住居であることから、これに伴った鉄床石かみとこしと想定される。100は表面が皿状となり、磨り痕跡が認められる。

3 土製品

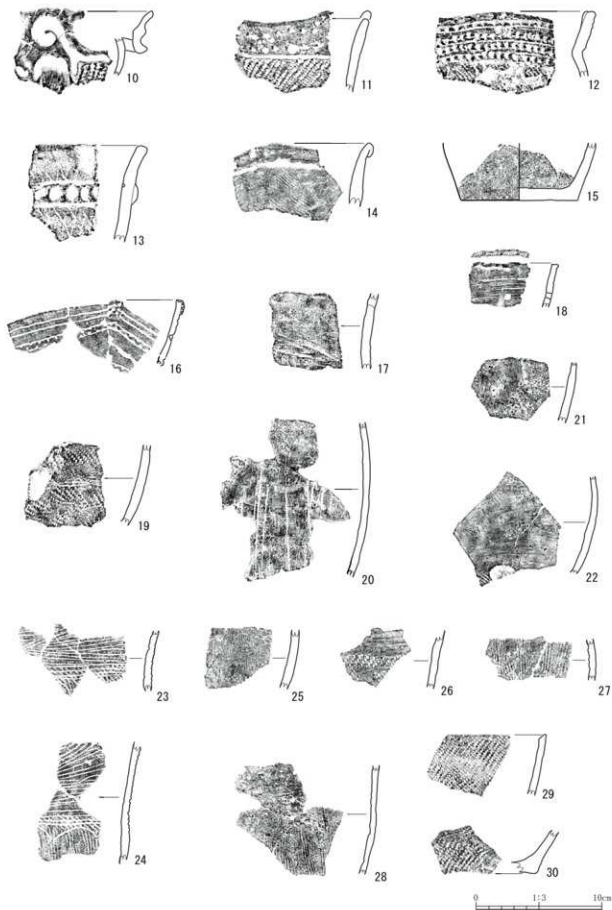
今回の調査で出土した土製品は4点で、全点を掲載した。種別としては、三叉状の有孔土製品(123・124)と鉄生産に伴う羽口(125・126)の2種である。三叉状有孔土製品は、S I 01(平安)埋土中からと、この近くの遺構外から出土している。どちらも形状・大きさに差異はない。上部側面に貫通孔を有し、表面は丁寧にミガキ調整がされている。両者の唯一異なる点は、下部の脚部で、123の下端側面には筋状のキザミが入る。垂飾品の類であろうか。羽口は鍛錬鍛冶が行われていたS I 01内より出土したものである。先端部分と思われ、溶着滓が付着する。

4 鉄製品

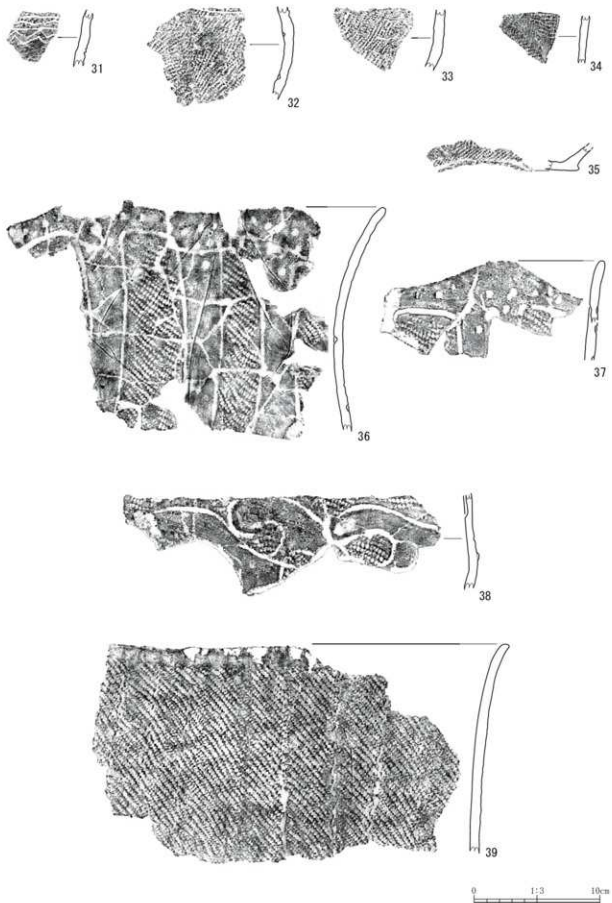
平安時代の堅穴住居であるS I 02から刀(127)と紡錘車(128)の2点が出土している。127は直刀で、柄部には木片が残存している。128は紡錘車の円盤部で、中央に軸棒を通す孔が認められる。



第25图 S 1 01 · 02出土土器



第26図 S 1 02~04出土土器



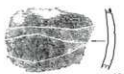
第27図 S 105・07出土土器



40



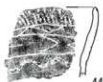
41



42



43



44



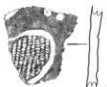
45



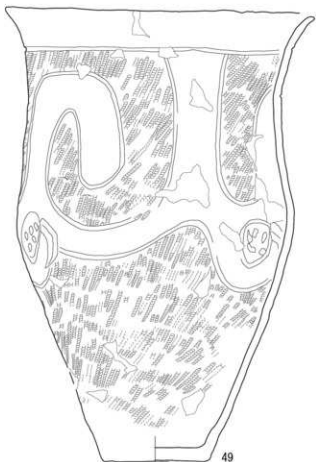
46



47

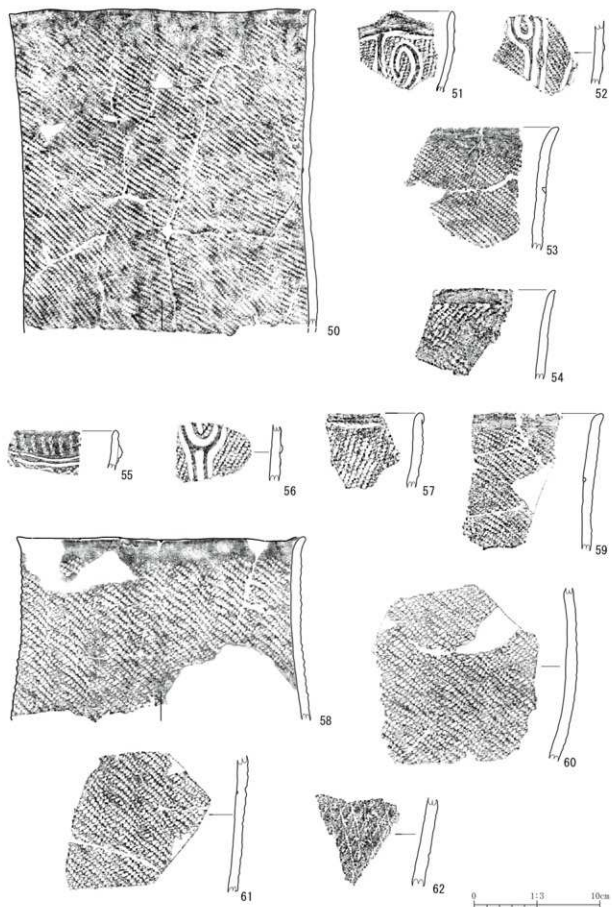


48

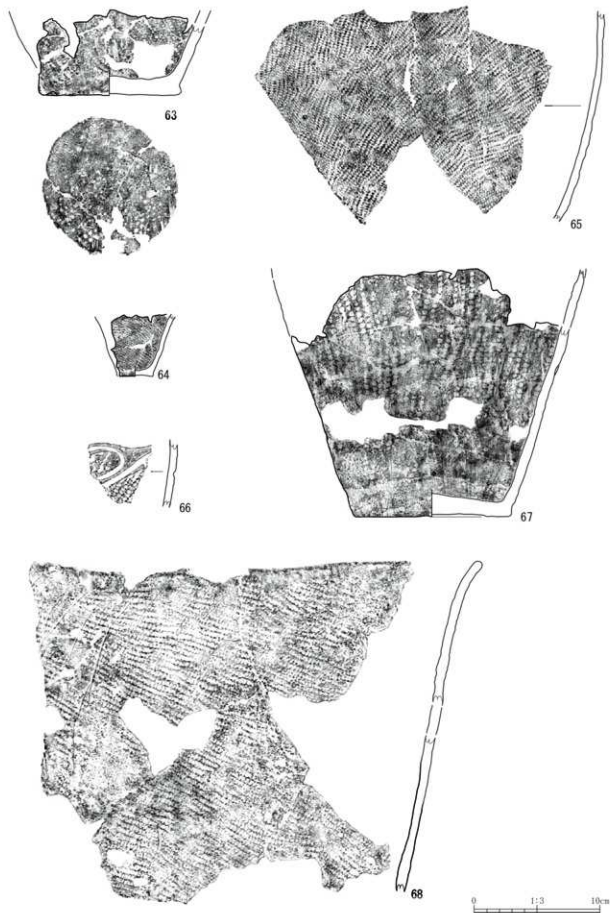


49

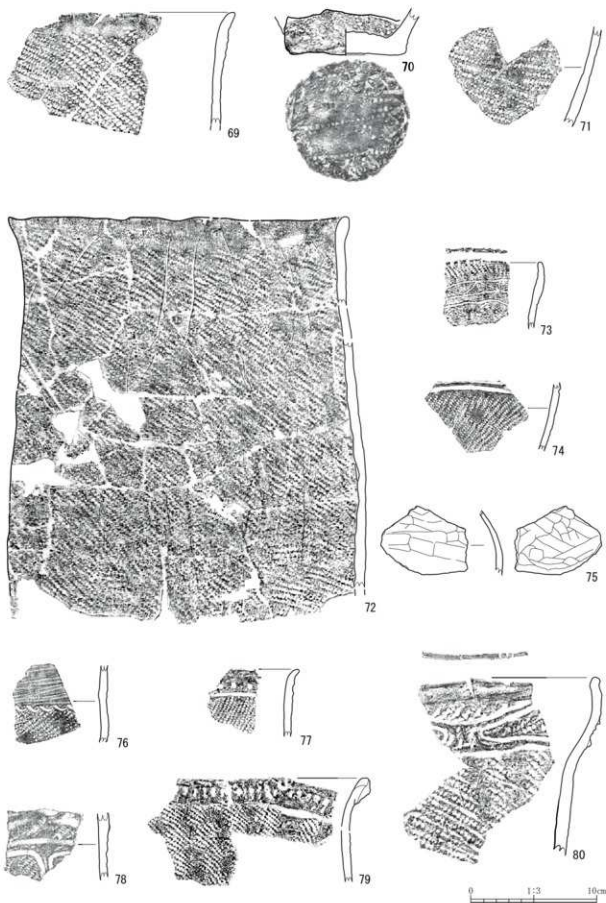
0 1:3 10cm



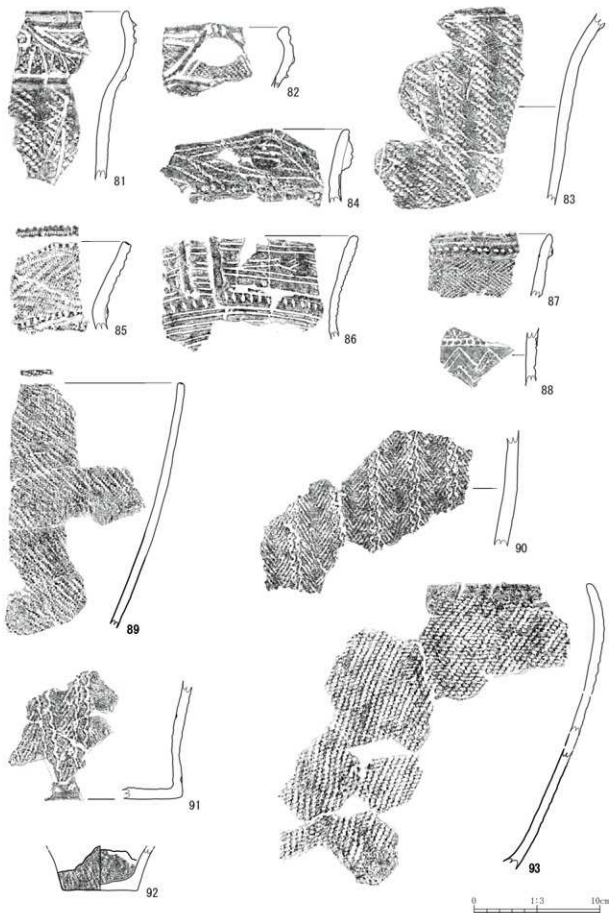
第29圖 S 1 13・17出土土器



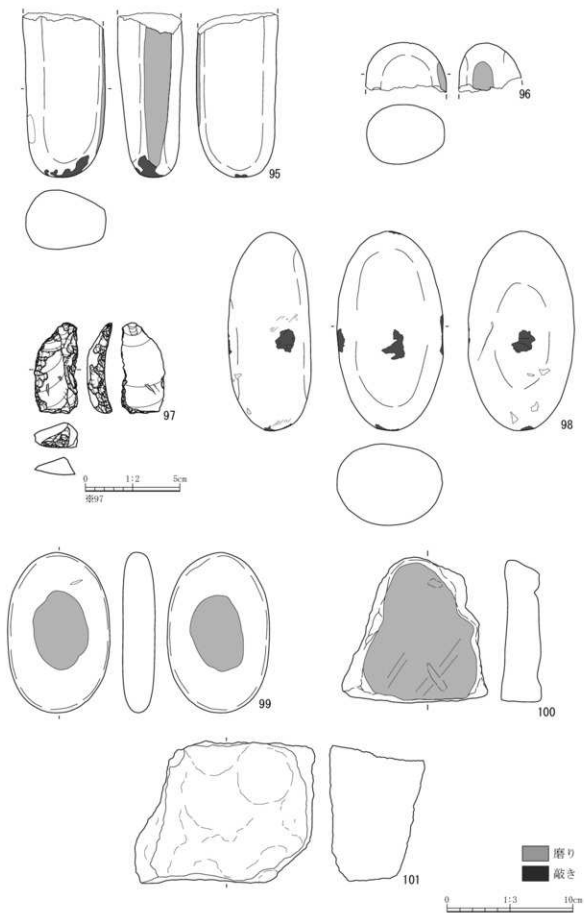
第30圖 S117・18・22、SK11・16出土土器



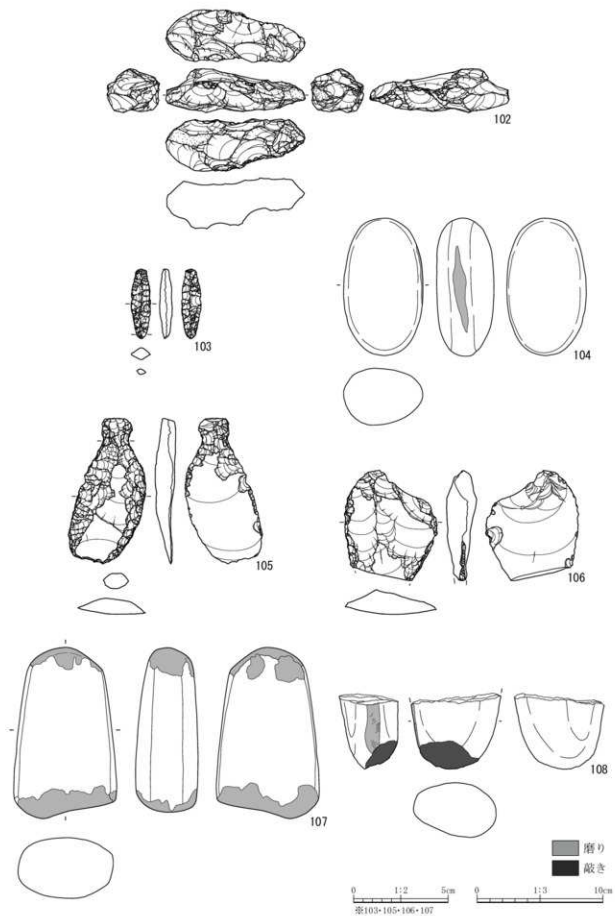
第31図 遺構外出土器①



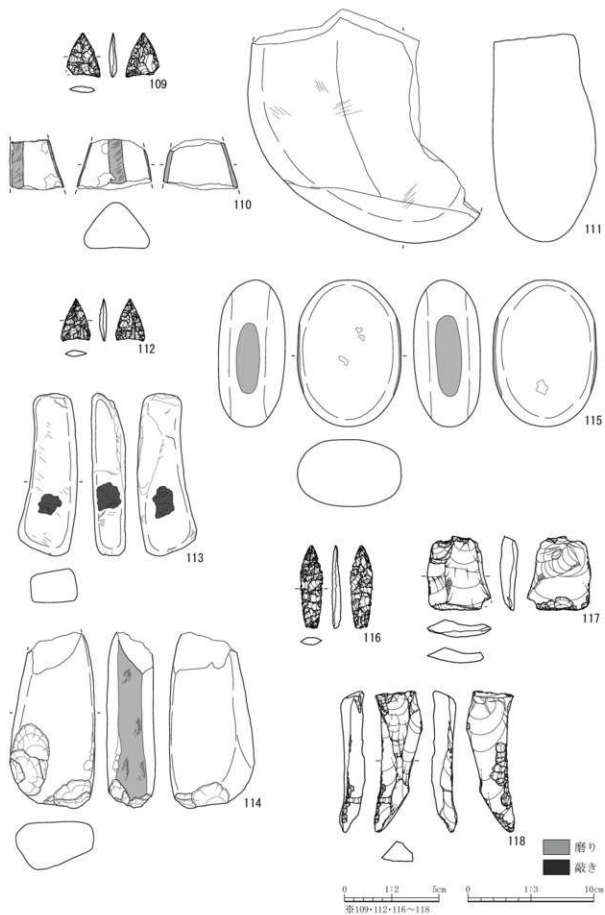
第32図 遺構外出土土器②



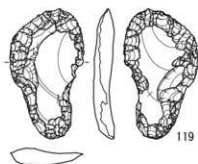
第33図 S 1 01・02・07出土石器・石製品



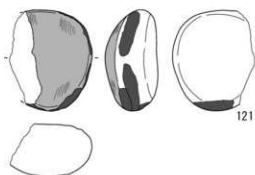
第34図 S108・11・13出土石器・石製品



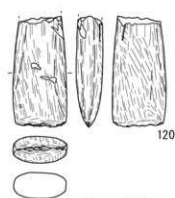
第35図 S 117・22、遺構外出土石器・石製品①



119



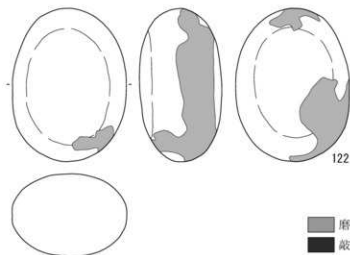
121



120



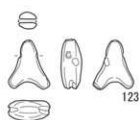
※119・120



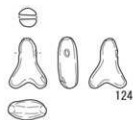
122



■ 磨り
■ 敲き



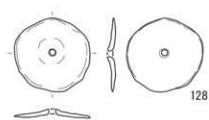
123



124



※123・124



128



127



第36図 遺構外出土石器・石製品②、土製品、鉄製品

第3表 土器観察表

No.	出土地点・層位	器形	残存部	時期・形式	文様・特徴	備考	図版	写真 図版
1	S101 カマド周辺	土師器・甕	口縁→胴部	平安(9C代?)	外面剥落著しい/内面ナデ		25	30
2	S101 埋土	甕?	口縁部	弥生?	並行沈線+ミガキ, 刺突?/内面ナデ		25	30
3	S101 埋土	深鉢	胴部	大木8b~9	隆沈線+ナデ/内面ナデ		25	30
4	S101 RP1 床面・埋土	深鉢	口縁→胴部	縄文中期	波状突起(2単位), S字状貼附(LR付加条)縦/内面ハジケ		25	30
5	S101 床面・埋土	深鉢	口縁→胴部	縄文中期～後葉	上部ナデ, LR縦/内面ナデ		25	30
6	S101 埋土	深鉢	口縁→胴部	縄文中期～後葉	上部ナデ, LR縦, スス付着/内面ナデ		25	30
7	S101 埋土	深鉢	底部	縄文中期～後葉	LR縦/内面ナデ		25	30
8	S102 床面	灰釉陶器・甕	胴→底部	平安(9C末～10C初頃)	猿投産, 灰白色		25	30
9	S102 カマド RP1	土師器・甕?	口縁部	平安(9C?)	外面剥落著しい/内面ナデ		25	30
10	S102 埋土	深鉢	口縁部	大木8b	波状口縁+渦巻文(隆沈線), LR縦 /内面黒色, ナデ		26	30
11	S102 埋土	深鉢	口縁部	縄文中期	波状口縁, ナデ+刺突, 沈線, LR縦 /内面ナデ		26	30
12	S102 埋土	深鉢	口縁部	大木7a	沈線+刺突, 摩滅著しい/内面ナデ		26	30
13	S102 埋土	深鉢	胴部	縄文中期前半	縁帯+指頭圧痕, 車輪跡条5LR縦 /内面ナデ		26	30
14	S102 埋土	深鉢	口縁部	縄文中期	折返口縁, LR縦?/内面ナデ		26	30
15	S102 埋土	深鉢	底部		内面ナデ		26	30
16	S103 埋土・S105 埋土・ S111 埋土			弥生後期	平行沈線, 交互刺突文		26	31
17	S103 埋土			弥生中～後期	無文		26	31
18	S103 埋土			弥生中～後期	波状口縁, 口唇部に胴体凹圧, 補修孔		26	31
19	S103 埋土			弥生中～後期	LR横, 線条痕		26	31
20	S103 埋土・S105 埋土			弥生後期	ナデ→ミガキ		26	31
21	S103 埋土			弥生後期	無文		26	31
22	S103 埋土			弥生後期	ヘラミガキ, LR?		26	31
23	S104 埋土		口縁部	弥生中期	多重沈線文, LR斜位→横位平行沈線		26	31
24	S104 南端中央焼土周辺		胴部	弥生中期	多重沈線文, LR斜位→沈線による連部文		26	31
25	S104 南端中央焼土周辺		胴部	弥生中期	植物葉の回転(カナムグラ)		26	31
26	S104 埋土		胴部	弥生中～後期	LR横位		26	31
27	S104 埋土		胴部	弥生中期	LR斜位		26	31
28	S104 南端中央焼土周辺		胴部	弥生中期	LR斜位		26	31
29	S104 埋土		口縁部	縄文後期?弥生?	LR横位		26	31
30	S104 埋土		底部	縄文後期?弥生?	LR横位		26	31
31	S105 検出面		胴部	弥生後期	鋸歯状沈線		27	31
32	S105 埋土		胴部	弥生後期	付加条(LR+L)横・斜位→横位沈線		27	31
33	S105 埋土		胴部	弥生後期	LR付加条?		27	31
34	S105 埋土		胴部	弥生後期	LR横・斜位		27	31
35	S105 埋土		底部	弥生後期	LR横位		27	31
36	S107 床面直上・埋土中	深鉢	口縁部	大木9	波状口縁, 刺突, ㊦字文(沈線)+LR縦, ナデ /内面ナデ	46と同一	27	31
37	S107 埋土	深鉢	口縁部	大木9	波状口縁, 刺突, ㊦字文(沈線)+LR縦, ナデ /内面ナデ	44と同一	27	31
38	S107 埋土	深鉢	胴部	大木10	/字状貼付, 波頭文(沈線)+ナデ, LR横 /内面ナデ		27	31
39	S107 RP2 床面	深鉢	口縁→胴部	大木9～10	LR縦		27	32
40	S107 埋土	深鉢	口縁部	縄文中～後期	LR縦・斜/内面ナデ		28	32
41	S107 床面・埋土中	深鉢	胴→底部	縄文中～後期	LR縦/内面ナデ		28	32
42	S108 埋土	甕?	胴部	弥生後期	LR(若しくはLR)→沈線→ 縄文帯による変形文(磨滑縄文)		28	32
43	S108 埋土	深鉢	口縁部	弥生後期	LR横位?, 全体にスス付着→詳細不明		28	32
44	S110 埋土	深鉢	口縁部	弥生後期	LR横位, 沈線文, 交互刺突文		28	32
45	S110 北壁側 埋土	深鉢	口縁部	縄文中期	上部ナデ, LR縦/内面ナデ	補修孔あり	28	32
46	S111 埋土	鉢?	底部	弥生?	LR付加条?		28	32

No.	出土地点・層位	器形	残存部	時期・形式	文様・特徴	備考	図版	写真 図版
47	S11 埋土	深鉢	口縁部	大木9	曲線文(沈線)+L付加条縦		28	32
48	S11 ベルト 埋土	深鉢	胴部	大木9	曲線文(沈線)+R縦, 刺突		28	32
49	S13 埋設土器(RP2)	深鉢	完形	大木10	上部ナデ+沈線, 波瀾文(沈線)+横溝ナデ, ノ字状貼付(3単位)+刺突, R縦/内面ハシケ		28	32
50	S13 RP1 床直・埋土	深鉢	口縁~胴部	大木10	R縦/内面ナデ		29	33
51	S13 4層	深鉢	口縁部	大木8b	波状口縁, 渦巻文(陸沈線), R縦/内面ミガキ		29	33
52	S13 埋土	深鉢	胴部	大木8b	渦巻文(陸沈線), R縦/内面黒色, ナデ		29	33
53	S13 埋土	深鉢	口縁部	縄文中期中~後葉	R縦/内面ナデ		29	33
54	S13 埋土	深鉢	口縁部	縄文中期中~後葉	上部ナデ, L,R縦/内面ナデ		29	33
55	S17 北西 埋土	深鉢	口縁部	縄文中期	口唇R1E直, 陸溝(2条)/内面黒色, ミガキ		29	33
56	S17 北西 埋土	深鉢	胴部	大木8b	渦巻文(陸沈線), R,R縦/内面ナデ	粘土砂粒多い	29	33
57	S17 埋土上位	深鉢	口縁部	縄文中期	折返口縁, R,R縦/内面ナデ		29	33
58	S17 埋土	深鉢	口縁~胴部	縄文中期	上部ナデ, L,R縦/内面ナデ		29	33
59	S17 南西 埋土上位	深鉢	口縁~胴部	縄文中期	上部ナデ, L,R縦/内面ナデ		29	33
60	S17 伊内懸埴部	深鉢	胴部	縄文中期	R縦, スス付着/内面ナデ		29	33
61	S17 伊東側 床直	深鉢	胴部	縄文中期	R縦/内面ナデ		29	33
62	S17 伊内懸埴部	深鉢	胴部	縄文中期前葉	車輪絡糸5R縦	粘土砂粒多い	29	33
63	S17 埋土上位	深鉢	底部	縄文中期中~後葉	R縦/内面ナデ/底面網代痕		30	33
64	S17 北壁部 黄褐色	ミニチュア	胴~底部	縄文中期中~後葉	R,L付加条縦/内面ナデ		30	33
65	S18 床直・埋土中	深鉢	胴部	弥生後期	R横/内面ナデ		30	33
66	S122 南東 埋土上位	深鉢	胴部	大木8b	渦巻文(沈線), L,R縦/内面ナデ		30	33
67	S122 埋設土器・床直焼土範囲 内・南東 埋土上位	深鉢	胴~底部	縄文中期中~後葉	R縦/内面ナデ		30	34
68	SK11 埋土上位・ SK16 埋土上位	深鉢	口縁~胴部	縄文中期中~後葉	R縦/内面ナデ	補修孔あり	30	34
69	SK13 底面一括	深鉢	口縁部	縄文中期中~後葉	上部ナデ, L,R縦/内面ナデ		31	34
70	SK13 底面一括	深鉢	底部	縄文中期中~後葉	L,R縦/内面ナデ	75と同一	31	34
71	SK15 埋土	深鉢	胴部	縄文中期	R縦/内面ナデ		31	34
72	SF01 埋設土器	深鉢	口縁~胴部	縄文中期中~後葉	R縦/内面ナデ		31	34
73	調査区北側(S102南方) II層	深鉢	口縁部	弥生後期	R横位, 沈線文, 交互刺突文		31	34
74	調査区北西側(S113南方) II層	深鉢	胴部	弥生後期?	沈線, L,R横/内面ナデ		31	34
75	調査区南側(S105南方) III層	鉢?	胴部	弥生後期	無文		31	34
76	調査区北側(S117南方) IV層	深鉢	胴部	縄文後期?	ナデ, S字状結節?横/内面ナデ		31	34
77	調査区北西側(S126南方) IV層	深鉢	口縁部	縄文中期中葉	ナデ+刺突, 沈線, R,R縦/内面ナデ		31	35
78	調査区北西側(S113南方) II層	深鉢	胴部	大木9?	貼付(不明), 曲線文(沈線)+R縦/内面ナデ		31	35
79	調査区北西側(S113南方) IV層	深鉢	口縁部	大木8a	波状口縁, 折返+突起貼付+L1E直, L,R縦/内面ミガキ		31	35
80	調査区北側 II層	深鉢	口縁部	大木8a	陸沈線+L1E直, L,R縦/内面ナデ		31	35
81	調査区北側(S102南方) IV層	深鉢	口縁部	大木8a	山形+凹文(陸沈線), L,R縦/内面ナデ		32	35
82	調査区北側(S109北方) IV層	深鉢	口縁部	大木8a	山形文(陸沈線), L,R縦/内面ナデ		32	35
83	調査区北側(S102南方) IV層	深鉢	胴部	大木8a	陸沈線, L,R縦/内面ナデ		32	35
84	調査区北西側(S113南方) IV層	深鉢	口縁部	大木7b	波状口縁, ボタン状貼付+R1E直, 陸帯+刺突/内面ナデ		32	35
85	調査区中央 斜面上方 II層	深鉢	口縁部	大木7b	口唇上凹直, 陸沈線+刺突, R1E直(変形状)/内面ナデ		32	35
86	調査区北西側(S113南方) IV層	深鉢	口縁部	大木7a	垂下陸帯, 平行+斜行沈線, 刺突/内面ナデ		32	35
87	調査区北側(S117南方) IV層	深鉢	口縁部	円筒下層D1	口唇R1E直, 陸帯+刺突, L,R縦+結束羽状横/内面ナデ	織織含む	32	35
88	調査区北西側(S126南方) IV層	深鉢	胴部	大木7a?	沈線(2条)+刺突, 砲雷状沈線/内面ナデ		32	35
89	調査区北側 II層	深鉢	口縁~胴部	縄文中期前葉	R+R付加条横/内面ナデ		32	35
90	調査区中央 斜面上方 II層	深鉢	胴部	縄文中期前葉	R+R結束羽状横/内面ナデ		32	35
91	調査区北西側(S113南方) II層	深鉢	底部	縄文中期前葉	R+R?結束羽状?横/内面厚縁		32	35
92	調査区北西側(S113南方) IV層	小型鉢	底部	縄文中期前葉	R+R付加条横?		32	35
93	調査区北西側(S113南方) IV層	深鉢	口縁~胴部	縄文中期中~後葉	R,R縦/内面ナデ		32	35

第4表 石器・石製品観察表

No.	出土地点・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質・産地・時代	備考	図版	写真 図版
94	S101 S1	台石・石皿類	41.0	29.8	12.7	17,100.0		写真のみ掲載	-	36
95	S101カマド S7	磨器類	13.0	6.3	4.6	692.3		上部欠損	33	36
96	S101カマド S7	磨器類	3.9	6.4	5.1	132.4		下半部欠損	33	36
97	S102	スクレイパー	4.8	2.3	1.3	11.4	赤色頁岩 北上山地 中生代前期		33	36
98	S102 西 埋土上位	磨器類	15.8	8.4	6.6	1,265.1			33	36
99	S102 床面	磨器類	12.7	8.1	2.5	408.8			33	36
100	S102 南 埋土上位	台石・石皿類	11.5	11.6	3.2	566.6			33	36
101	S107 杉原底部内	台石・石皿類	14.2	11.0	7.5	17,301.0			33	36
102	S108 埋土	石核	4.1	11.1	4.2	147.6			34	36
103	S111 東 床面直上層	石鏝	3.7	1.1	0.7	2.4	頁岩 北上山地 中生代前期	両端部欠損?	34	36
104	S111 埋土	磨器類	10.9	6.3	4.5	478.6			34	36
105	S113 東壁際 S1	石匙	7.7	4.2	1.1	24.9	頁岩 北上山地 中生代前期		34	36
106	S113 埋土	スクレイパー	5.8	4.9	1.6	34.9	頁岩 北上山地 中生代前期		34	37
107	S113 南 埋土	磨製石斧	9.0	5.4	3.3	282.5			34	37
108	S113 南壁際 埋土下位	磨器類	(6.0)	7.2	4.7	234.8			34	37
109	S117	石鏝	2.3	1.8	0.4	4.3	珪質頁岩 北上山地 中生代前期	下部欠損	35	37
110	S117 東壁際 埋土上位	磨器類	4.0	6.0	3.6	107.0			35	37
111	S117 南東 埋土上位	台石・石皿類	(18.4)	(18.4)	8.1	3,152.3			35	37
112	S122 南西 埋土上位	石鏝	2.2	1.5	0.4	0.9	珪質頁岩 北上山地 中生代前期		35	37
113	S122 埋土上位	磨器類	(12.9)	(4.3)	2.6	259.8			35	37
114	S122 南東 埋土上位	磨器類	13.9	6.7	3.8	563.7			35	37
115	S122 南東 埋土上位	磨器類	11.6	8.2	4.3	775.0			35	37
116	表採	石鏝	4.4	1.2	0.5	2.3	頁岩 北上山地 中生代前期		35	38
117	中央部 II～III層	スクレイパー	3.9	3.4	0.9	11.2	珪質頁岩 北上山地 中生代前期		35	38
118	北側 II～III層	スクレイパー	7.5	2.5	1.4	19.1	頁岩 北上山地 中生代前期		35	38
119	北東側 II層	スクレイパー	6.9	3.9	1.1	26.0	頁岩 北上山地 中生代前期		36	38
120	北東側 II層	磨製石斧	(5.8)	2.8	1.4	43.9	頁岩 北上山地 中生代前期	上部欠損	36	38
121	北側 III層	磨器類	7.9	6.5	4.2	283.6			36	38
122	北東側 II～III層	磨器類	12.2	9.1	6.5	1,036.2			36	38

第5表 土製品・鉄製品観察表

No.	出土地点・層位	種別	器種	時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	備考	図版	写真 図版
123	S101	土製品	有孔土製品	縄文中期?	2.5	2.2	1.1	4.1	三又状, 上部側面に貫通孔, 下部にキズミ		36	38
124	北側 II層	土製品	有孔土製品	縄文中期?	2.6	2.0	1.0	3.9	三又状, 上部側面に貫通孔		36	38
125	S101 埋土	土製品	羽口	古代	-	-	-	81.9	先端部, 溶着滓付着	写真のみ	-	38
126	S101 埋土	土製品	羽口	古代	-	-	-	41.8	先端部, 溶着滓付着	写真のみ	-	38
127	S102 床面 RM1	鉄製品	刀	古代(9c?)	43.1	3.0	0.7 (刀身)	254.6	直刀, 柄部に木材残存(厚さ2.4cm)		36	38
128	S102 K1内 RM2	鉄製品	結縄車	古代	6.1	5.8	0.4	26.2	円盤部		36	38

VI 自然科学分析

浜岩泉Ⅲ遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

浜岩泉Ⅲ遺跡は、岩手県下閉伊郡田野畑村大芦14(北緯39° 53' 23"、東経141° 55' 00")に所在する。測定対象試料は、堅穴住居跡、土坑から出土した炭化物の合計11点である(表1)。

2 測定の意義

遺跡内における堅穴住居跡、土坑の時期を特定する。

3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}C$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る

確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1・2に示す。

試料の¹⁴C年代は、No. 1が $990 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 2が $1,020 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 3が $1,030 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 4が $2,030 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 5が $2,550 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 6が $2,100 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 7が $2,010 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 8が $1,920 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 9が $4,060 \pm 30\text{yrBP}$ 、No. 10が $3,930 \pm 30\text{yrBP}$ 、No. 11が $3,980 \pm 30\text{yrBP}$ である。SI02の埋土とカマドから出土したNo. 2,3の値は誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で一致する。

暦年較正年代(1σ)は、古い方から順にNo. 9が縄文時代中期中葉～後葉頃、No. 11が縄文時代中期末葉頃、No. 10が縄文時代後期初頭頃、No. 5が縄文時代晩期中葉～後葉頃、No. 4,6,7が弥生時代中期頃、No. 8が弥生時代後期頃、No. 1～3が平安時代後半頃に相当する(佐原2005、小林編2008、小林2009)。SI04出土し量は、床直と埋土の間で年代差があり、層位の上下関係を整合する。

なお、試料No. 8が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCal1に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾崎2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いて試料No. 8の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器、総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82
- 尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代、設楽博己、藤尾慎一郎、松本武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭、同成社、225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学上 ドイツ展記念解説, 学生社, 14-19

坂本 稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

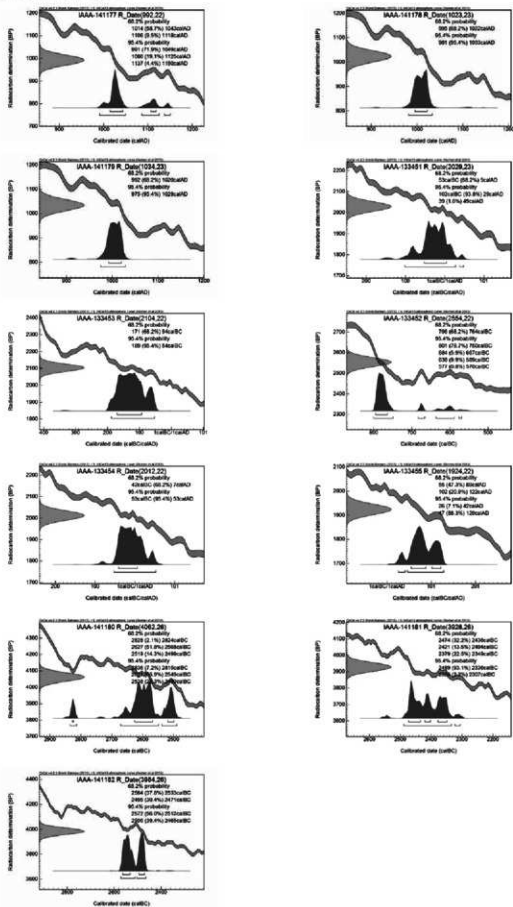
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-141177	No.1	SI01 カマド	炭化物	AAA	-27.18 ± 0.50	990 ± 20	88.38 ± 0.25
IAAA-141178	No.2	SI02 埋土	炭化物	AAA	-25.95 ± 0.33	1,020 ± 20	88.04 ± 0.26
IAAA-141179	No.3	SI02 カマド	炭化物	AAA	-24.20 ± 0.53	1,030 ± 20	87.92 ± 0.26
IAAA-133451	No.4	SI04 埋土	炭化物	AAA	-27.32 ± 0.30	2,030 ± 20	77.67 ± 0.23
IAAA-133452	No.5	SI04 床直	炭化物	AAA	-24.12 ± 0.29	2,550 ± 20	72.76 ± 0.21
IAAA-133453	No.6	SI05	炭化物	AAA	-24.13 ± 0.34	2,100 ± 20	76.96 ± 0.22
IAAA-133454	No.7	SI08 床直上	炭化物	AAA	-23.82 ± 0.35	2,010 ± 20	77.84 ± 0.22
IAAA-133455	No.8	SI11 埋土	炭化物	AAA	-24.36 ± 0.30	1,920 ± 20	78.69 ± 0.22
IAAA-141180	No.9	SI17 床直	炭化物	AAA	-25.00 ± 0.51	4,060 ± 30	60.31 ± 0.20
IAAA-141181	No.10	SK11 埋土中位	炭化物	AAA	-25.02 ± 0.51	3,930 ± 30	61.33 ± 0.20
IAAA-141182	No.11	SK18 埋土中	炭化物	AaA	-26.38 ± 0.62	3,980 ± 30	60.90 ± 0.20

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC(%)			
IAAA-141177	1,030 ± 20	87.98 ± 0.23	992 ± 22	1014calAD - 1043calAD (58.7%) 1106calAD - 1118calAD (9.5%)	991calAD - 1049calAD (71.9%) 1086calAD - 1125calAD (19.1%) 1137calAD - 1150calAD (4.4%)
IAAA-141178	1,040 ± 20	87.87 ± 0.25	1,023 ± 23	995calAD - 1022calAD (68.2%)	981calAD - 1033calAD (95.4%)
IAAA-141179	1,020 ± 20	88.06 ± 0.24	1,034 ± 23	992calAD - 1020calAD (68.2%)	975calAD - 1029calAD (95.4%)
IAAA-133451	2,070 ± 20	77.30 ± 0.22	2,029 ± 23	53calBC - 5calAD (68.2%)	102calBC - 29calAD (93.8%) 39calAD - 49calAD (1.6%) 801calBC - 750calBC (78.7%) 684calBC - 667calBC (5.9%) 638calBC - 589calBC (9.9%) 577calBC - 570calBC (0.8%)
IAAA-133452	2,540 ± 20	72.89 ± 0.20	2,554 ± 22	796calBC - 764calBC (68.2%)	189calBC - 54calBC (95.4%)
IAAA-133453	2,090 ± 20	77.09 ± 0.21	2,104 ± 22	171calBC - 94calBC (68.2%)	
IAAA-133454	1,990 ± 20	78.03 ± 0.21	2,012 ± 22	42calBC - 7calAD (68.2%)	53calBC - 53calAD (95.4%)
IAAA-133455	1,910 ± 20	78.80 ± 0.21	1,924 ± 22	55calAD - 89calAD (47.3%) 102calAD - 122calAD (20.9%)	26calAD - 42calAD (7.1%) 47calAD - 129calAD (88.3%)
IAAA-141180	4,060 ± 30	60.31 ± 0.19	4,062 ± 26	2828calBC - 2824calBC (2.1%) 2627calBC - 2568calBC (51.8%) 2519calBC - 2499calBC (14.3%)	2836calBC - 2815calBC (7.2%) 2671calBC - 2549calBC (66.9%) 2538calBC - 2490calBC (22.3%)
IAAA-141181	3,930 ± 20	61.32 ± 0.19	3,928 ± 26	2474calBC - 2436calBC (32.2%) 2421calBC - 2404calBC (13.5%) 2379calBC - 2349calBC (22.5%)	2489calBC - 2336calBC (93.1%) 2324calBC - 2307calBC (2.3%)
IAAA-141182	4,010 ± 20	60.72 ± 0.18	3,984 ± 26	2564calBC - 2533calBC (37.8%) 2495calBC - 2471calBC (30.4%)	2572calBC - 2512calBC (56.0%) 2505calBC - 2465calBC (39.4%)

[参考値]

[図版] 暦年校正年代グラフ



Ⅶ 総 括

今回の調査は、三陸沿岸道路建設に伴い2,070㎡の調査を実施した。検出した遺構は、竪穴住居跡19棟、土坑20基、土器埋設遺構1基、焼土遺構1基である。出土した遺物は、土器は大コンテナ5箱、石器・石製品は同3箱、土製品は4点、鉄製品は2点である。確認された時期は大きく分けて、縄文時代・弥生時代・平安時代の3時期に分かれる。ここでは総括として、これらの遺構・遺物を新しい順に整理し、若干の考察を加えたい。

1 平安時代

S I 01・02竪穴住居跡2棟のみが確認されている。遺構検出面は、その他の時代の遺構と同じ層位であり差異はない。位置状況としては、2棟しか確認していないため、傾向と言えるかは難しいところではあるが、本調査区においては、どちらも北側の斜面上方の標高187m台に位置している。両者は一辺6～7mの隅丸方形を呈し、カマドが付設する。両者とも、カマドの作り替えが行われたと想定され、2時期にわたる可能性が考えられる。S I 01は、旧カマドが現在のカマドより内側に燃焼部焼土が広がることから、併せて拡幅が行われたものと思われる。いずれも北壁に設置されている。S I 02は、現カマドは東壁に付設されるが、煙道が確認できなかった。袖の芯材として使用された自然石が残存し、これらの間には燃焼部焼土が確認できることから、形態としては一般的なカマドと同様と思われる。旧カマドは、大きく広がる焼土とこれを挟むように溝状のピットがいくつも確認できることから、芯材の抜き取り痕と考えられ、北壁にあったことが想定されるが、こちらも煙道施設に相当するものは検出されなかった。

また、これらの特徴として、鉄生産に関連する住居であることが推測される。S I 01は鍛造剥片や小鉄塊、羽口などが出土、加えて床面には還元色を呈した小規模の炉が2基確認された。鉄床石(94)とされる鍛錬作業に使用した台石も出土しており、鍛錬鍛冶を行っていたと判断される。S I 02にも床面に還元色を呈した炉が確認されたが、鍛造剥片等は一切確認できなかった。しかしながら、刀(127)や紡錘車(128)といった鉄製品が出土したことから、鉄生産に関連した遺構である可能性が高い。

これら両遺構の詳細な時期についてだが、特定できる遺物の出土が非常に少ない。S I 01からは土師器が1点(1)、S I 02からは土師器1点(9)と灰釉陶器1点(8)が出土したのみである。1・9は摩滅が著しく、器形から9世紀代と推察した。8は猿投産のもので、9世紀末～10世紀初頭に位置付けられる(※(公財)大阪府文化財センター 三好孝一氏にご教授いただいた)。田野畑村内はもろろんだが、岩手県北沿岸部での出土は稀であり、鉄生産に関連した有力者の存在が推察される。

2 弥生時代

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡6棟、土坑5基が見つかった(推定含む)。位置的には、調査区内中央の斜面中腹から南側の斜面下方に集中している。

竪穴住居跡は、出土遺物から推察すると、弥生中期が1棟(S I 04)、後期が5棟(S I 03・05・08・11・18)である。規模・形態としては、4m前後の円形もしくは楕円形を呈するものが多いが、S I 11は一回り小径で2.5m、S I 18はやや大きな楕円形となり、長軸が5.8mを測る。S I 18以外に

は炉が確認されており、これらはいずれも地床炉である。住居内の中央から斜面下方側に焼成範囲が見られる。

土坑は明確な遺物の出土はないが、位置状況や重複関係から5基(S K01・02・03・04・19)を弥生時代に推定した。いずれも開口部径およそ1.4m前後の円形を呈するものである。深さは様々で、40cm～1mを越すものもある。

弥生中期と推定される遺物が出土したのはS I04のみである。破片資料が大半だが、条が縦位方向となる単節斜行縄文が特徴的に見られる。23・24は多重沈線が用いられ、24には連貫文が認められる。これらは、日本海側の宇津野台式の影響を受容する土器と推定される。また、25は植物茎の回転施文による疑似縄文で、逆向きの棘を持つカナムグラによるものである。これは弥生中期中葉の樹形罫式に特徴的に認められるとされている(小田野：1986など)。

弥生後期と推定される遺物は、S I03・05・08・10・11・18から出土している(S I10は縄文、埋土中に異時期土器として混入したものと推定)。岩泉町赤穴洞穴を標識遺跡とした赤穴式土器が多く確認できる。特徴としては、並行沈線内に交互刺突文が施されるもので、16・44・73などがこれに当たる。また、32・33は付加条縄文の横位回転施文が見られるもので、これらも赤穴式に含まれると考えられる。なお、20・21・22は無文で、胎土や外面の調整痕からは一見土師器とも思われるものであるが、22の破片末端の頸部と推定される位置にわずかながら縄文が認められる。古式土師器に繋がる直前の時期が推測され、赤穴式土器より新しい部類に入る可能性が考えられる。

3 縄文時代

縄文時代の遺構は最も多く確認されており、堅穴住居跡11棟、土坑5基、土器埋設遺構1基が検出された。位置的な傾向としては、南側の斜面下方で遺構は確認されず、北側の斜面上方に集中している。重複が著しい部分もあり、北端では複数棟の堅穴住居や複数基の土坑が切り合っている。時間的には、いずれも縄文時代中期に帰属すると想定され、中期中葉～末葉に細分される。

縄文中期中葉と推定される遺構はS I22のみである。堅穴住居2棟と土坑7基と重複するが、これらすべてに切られており、周辺で最も古い遺構である。出土遺物から大木8b式期が想定される。

出土遺物から明確な判別が付かず、縄文中期中葉～後葉と幅を広げたが、S I10・17・21、S K13・16が推定される。S I17は複式炉を伴う住居で、形態から大木8b～9式期と考えられる。重複関係からS I21はこれより新期と判断でき、同時期内に収まるものと考えられる。S K13は浅い土坑であるが、底面より一括土器が出土しており、複節縄文が見られる。

縄文中期後葉～末葉と推定されるものは、S I07・13・26、S K11・18、S F01である。S I07は地床炉+前庭部を伴う複式炉と推測され、床面から大木9～10式の土器が出土している(36～39)。S I13は複数の遺構と重複するが、これらをすべて切っており、縄文期の遺構の中では最も新しいと判断される。床面には斜位に埋設された完形土器(49)が出土しており、大木10式期に帰属する。S I26はこれに切られるが、出土遺物から大差ない時期と想定した。S K11は出土土器がS K16と遺構間接合している(68)。S K18は中期中葉～後葉としたS I17・21を切ることから、これらより新期であり、後葉を下る時期が相当する。S F01は土器埋設遺構であるが、S I17の埋土中で検出した。おそらく、S I17を切る堅穴住居の床面に設置されていた可能性が高いが、重複が著しいため判別できなかった。埋設土器は中期中葉～後葉が推定される地文のみの土器であるが、重複関係から中期後葉と推定した。

また、これら以外の大半の遺構は、出土遺物からは詳細な時期を追えなかった。ただし、少数点な

からも出土した破片土器からは中期の範疇に入るものと想定される。このほか、遺構は確認できなかったが、中期前葉～中葉の遺物が遺構外からまとまって出土している。大木7a～8a式に比定されるもので、79～92がこれに該当する。調査区外近隣に該期の遺構が存在する可能性が考えられる。

竪穴住居跡の傾向としては、円形を基調とするものが多く、楕円形を呈するものはわずかである。炉の形態としては、他の遺構との重複や後世の攪乱等により確認できなかった可能性もあるものも多いが、複式炉を伴うものはS I 07・13・17の3棟、単式の石囲炉を伴うものはS I 21のみ(炉のみの確認)、地床炉のみを伴うものは確認できなかった。S I 07は地床炉+掘り込み部(前庭部?)、S I 13は石囲炉+石囲部、S I 17は石囲炉+掘り込み部と様々であるが、いずれも大木9～10式期と新しい時期に見られる。

土坑は規模・形状とも様々だが、S K 11・16?・18・20は断面形がフラスコ状を呈するもので、貯蔵施設として機能したものと思われる。

今回は道路幅に沿った調査区域ということもあり、遺跡全体の一部を調査したに過ぎない。調査を並行した島越XIV遺跡は、本遺跡より北へ500mほどの距離の高台にある遺跡であるが、ほぼ同時期の中期中葉～後葉の複式炉を伴う竪穴住居が数棟確認されている。本遺跡との関連性が非常に高いことが推測され、両遺跡を含めた該期の集落としての大きな広がりがあった可能性が高いのではないだろうか。今回の調査が田野畑村をはじめとする地域の歴史解明の一助となり得ることを切に願いたい。

最後に、東日本大震災に際し、大きな苦難があったにも関わらず本遺跡の調査にご協力いただいた地域の皆さまに感謝の意を表する。

引用・参考文献

【文献・論文】

- 石川日出志 2005 「岩手の弥生文化研究の諸問題－土器型式と地域間交流を中心として－」
『岩手考古学会研究大会発表資料』第34号 岩手考古学会
- 小田野哲憲 1987 「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第5号 岩手県立博物館
- 木村 高 1999 「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係－統観土器との共伴事例から－」
『研究紀要』第4号 青森県埋蔵文化財センター
- 斎藤 邦雄 1993 「岩手県にみられる後北式土器と在在弥生土器について」『岩手考古学』第5号 p1～26 岩手考古学会
- 齋藤 瑞穂 2007 「赤穴式対向弧文土器考」『信濃』第59巻第2号 p29～49
- 佐藤 嘉広 1989 「東北地方北部における弥生文化受容期の様相－北上川中流域の土器群の分析を中心として－」
『岩手県立博物館研究報告』第7号 岩手県立博物館
- 佐藤 信行 1991 「弥生と統観文のあいだ」『岩手考古学会研究大会発表資料』第7号 岩手考古学会
- 佐藤 嘉広 1991 「弥生と統観文のあいだ－土器－」『岩手考古学会研究大会発表資料』第7号 岩手考古学会
- 高瀬 克範 2011 「東北北部の農耕文化をどうとらえるか」『弥生時代の考古学 3－多様化する弥生文化－』同成社
- 永嶋 豊 2000 「東北地方北部の青木畑式土器」『研究紀要』第5号 青森県埋蔵文化財センター
- 森 幸彦 2008 「大木9・10式土器」『縄文総覧』小林達雄編

【報告書】

- 滝沢村教育委員会 1986 「湯舟沢遺跡」滝沢村文化財調査報告書第2集
- 田野畑村教育委員会 2000 「大戸赤空洞調査報告書」田野畑村文化財調査報告書第5集
- 田野畑村教育委員会 2007 「館石野1遺跡－第9～14次調査報告書」田野畑村文化財調査報告書第14集
- 田野畑村教育委員会 2013 「机道跡調査報告書」田野畑村文化財調査報告書第19集
- (財)北海道埋文センター 2003 「千歳市ユカンボシC15遺跡(6)」第192集
- (財)岩手県埋文センター 1998 「砥石泉1遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第276集

- (財)岩手県埋文センター 2004 「館遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第432集
- (財)岩手県埋文センター 2004 「長谷堂貝塚発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第434集
- (財)岩手県埋文センター 2001 「和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第452集
- (財)岩手県埋文センター 2004 「和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第466集
- (財)岩手県埋文センター 2006 「沼袋遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第483集
- (財)岩手県埋文センター 2007 「千足南遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第496集
- (公財)岩手県埋文センター 2012 「尾肝要Ⅰ遺跡・姫松Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第592集
- (公財)岩手県埋文センター 2015 「島越Ⅱ遺跡・島越Ⅲ遺跡・菅窪遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第645集

写 真 图 版



浜岩奥田遺跡周辺 空撮(W→)



調査区全景(直上→)



S 101 完掘(S→)



S 101 断面(N→)



S 101 断面(W→)

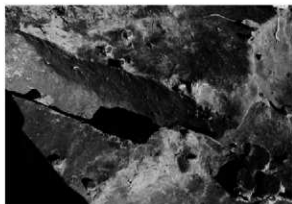
写真図版 2 S 101 竖穴住居跡①



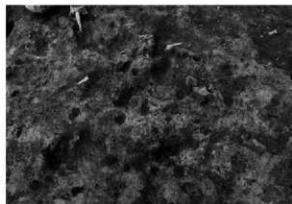
S101 カマド 完掘(S→)



S101 カマド 検出(S→)



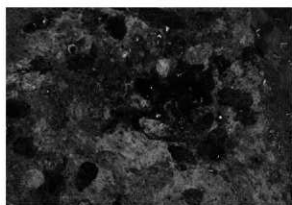
S101 カマド 断面(W→)



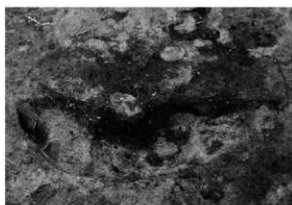
S101 N1 検出(S→)



S101 K1 完掘(N→)



S101 K2 完掘(N→)



S101 K1 断面(N→)



S101 K2 断面(NW→)



S 102 完掘(W→)

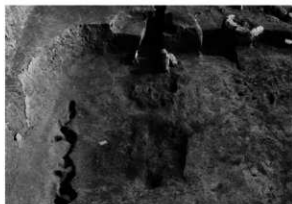


S 102 断面(N→)



S 102 断面(W→)

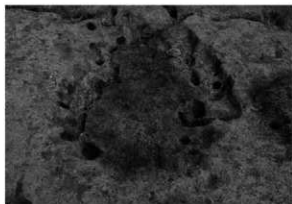
写真図版 4 S 102 竖穴住居跡①



S102 カマド 完掘(W→)



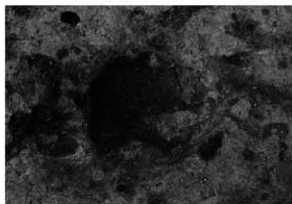
S102 刀出土状況(W→)



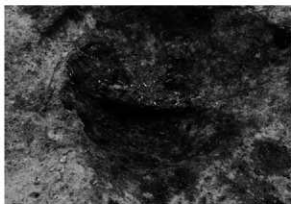
S102 N1 完掘(S→)



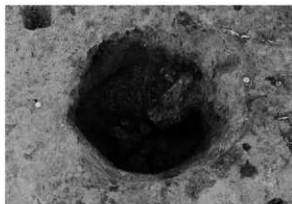
S102 N1 断ち割り(W→)



S102 N2 完掘(S→)



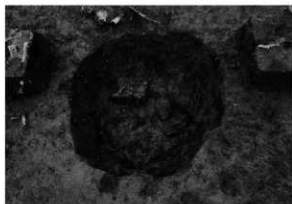
S102 N2 断面(W→)



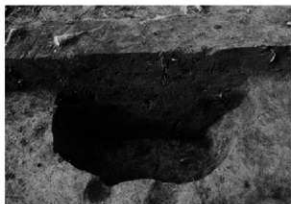
S102 K1 完掘(NW→)



S102 K1 断面(NW→)



S 102 K 2 完掘(E→)



S 102 K 2 断面(E→)



S 103 完掘(SE→)



S 103 断面(W→)



S 104 完掘(SW→)



S 104 断面(S→)



S 104 断面(W→)

写真図版7 S 104竪穴住居跡



S 105 完掘(S→)



S 105 断面(S→)



S 105 断面(W→)

写真図版 8 S 105 竖穴住居跡



S 107 完掘(S→)



S 107 断面(W→)



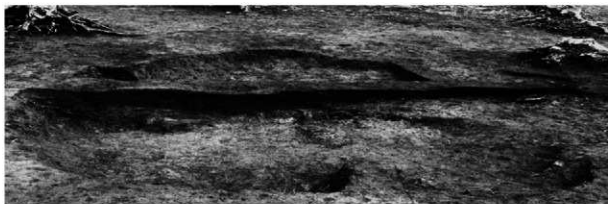
S 107 炉 完掘(S→)



S 107 遺物出土(N→)



S 108 完掘(S→)



S 108 断面(W→)



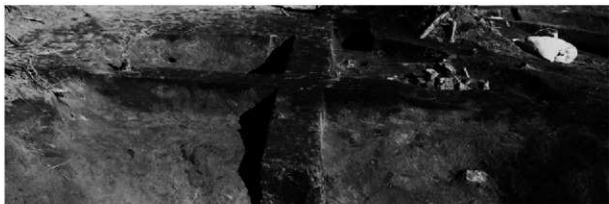
S 108 炉 検出(S→)



S 108 炉 断ち割り(S→)



S 109 完掘(S→)



S 109 断面(W→)



S 109 断面(S→)



S 110 完掘(S→)

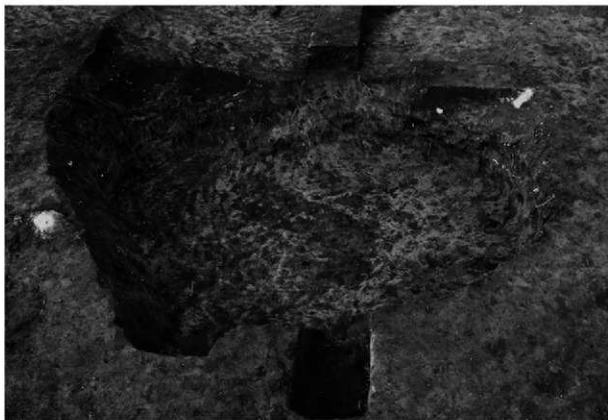


S 110 断面(W→)



S 110 断面(S→)

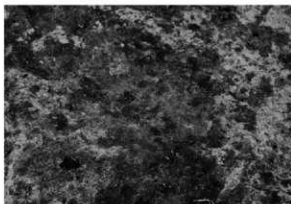
写真図版12 S 110 竖穴住居跡



S 111 完掘(S→)



S 111 断面(W→)



S 111 炉 検出(S→)



S 111 炉 断ち割り(W→)



S 112 完掘(S→)

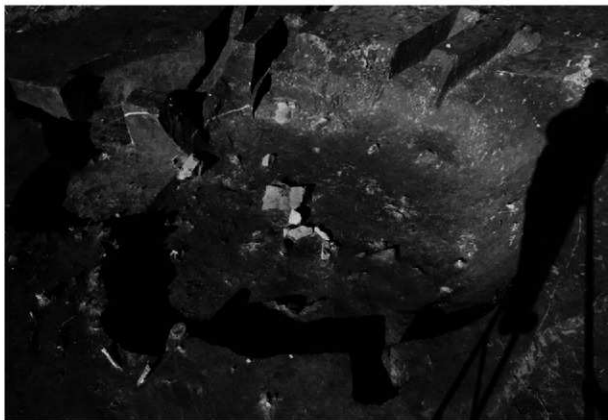


S 112 断面(W→)



S 112 断面(S→)

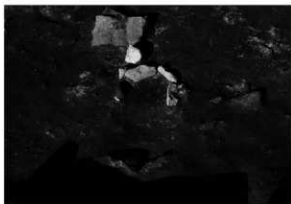
写真図版14 S 112 竖穴住居跡



S 113 完掘(SE→)



S 113 断面(S→)



S 113 炉 完掘(SE→)



S 113 炉 断面(W→)



S 113 埋設土器 出土(S→)



S 113 埋設土器 断ち割り(W→)



S 117 発掘(N→)



S 117 断面(N→)



S 117 断面(W→)



S 117 炉 完掘(SE→)



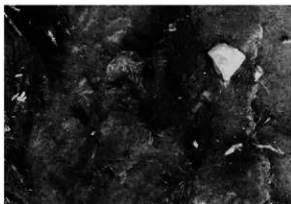
S 117 炉 断面(W→)



S 118 完掘(S→)



S 118 断面(S→)



S 118 炉1 検出(S→)



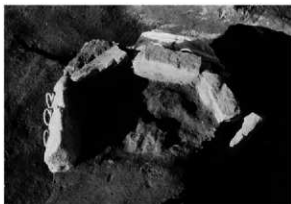
S 118 炉2 検出(S→)



S 120 完掘(S→)



S 120 断面(W→)



S 121 伊 完掘(E→)



S 121 伊 断面(E→)



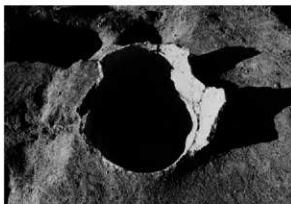
S 122 完掘(E→)



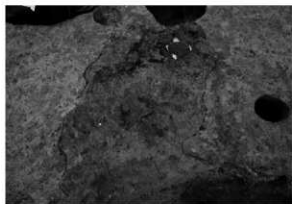
S 122 断面(S→)



S 122 断面(E→)



S 122 埋設土器 完掘(S→)



S 102 炉 検出(S→)



S 122 埋設土器 断面(S→)



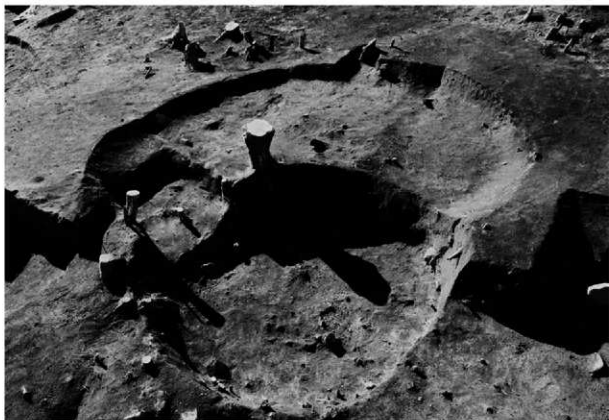
S 102 炉・埋設土器 断面(S→)



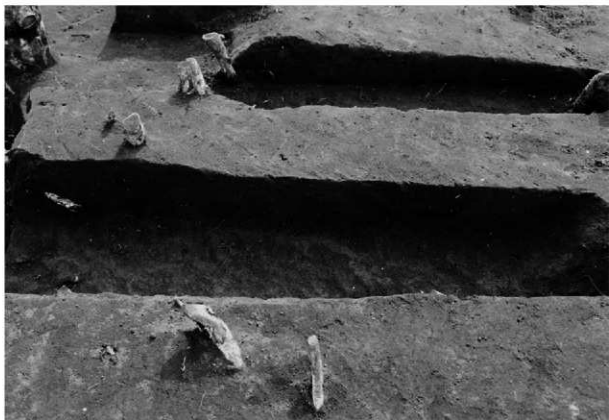
S 124 完掘(S→)



S 124 断面(W→)



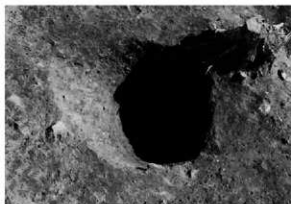
S 126 完掘(E→)



S 126 断面(N→)



S K01 完壺(W→)



S K02 完壺(W→)



S K01 断面(W→)



S K02 断面(W→)



S K03 完壺(W→)



S K04 完壺(S→)



S K03 断面(W→)



S K04 断面(S→)



S K05 完掘(S→)



S K06 完掘(W→)



S K05 断面(W→)



S K06 断面(W→)



S K07 完掘(W→)



S K08 完掘(W→)



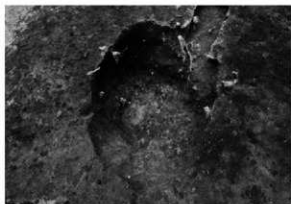
S K08・09 完掘(SW→)



S K08 埋土(W→)



S K09 完掘(S→)



S K10 完掘(E→)



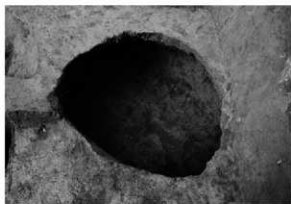
S K09 断面(W→)



S K10 断面(W→)



S K11 完掘(N→)



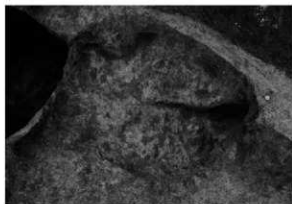
S K12 完掘(E→)



S K11 断面(E→)



S K12 断面(E→)



SK13 完掘(S→)



SK14 完掘(S→)



SK13 断面(S→)



SK14 断面(N→)



SK15 完掘(E→)



SK16 完掘(S→)



SK15 断面(W→)



SK16 断面(S→)



SK17 完掘(W→)



SK18 完掘(E→)



SK17 断面(W→)



SK18 断面(E→)



SK19 完掘(S→)



SK20・21 完掘(S→)



SK19 断面(S→)



SK20・21 断面(S→)



S F01 検出(N→)



S F01 断面(E→)



S F01 断ち割り(E→)



S N01 検出・断ち割り(E→)



調査前風景(SE→)



調査終了後風景(NW→)



現地説明会①



現地説明会②

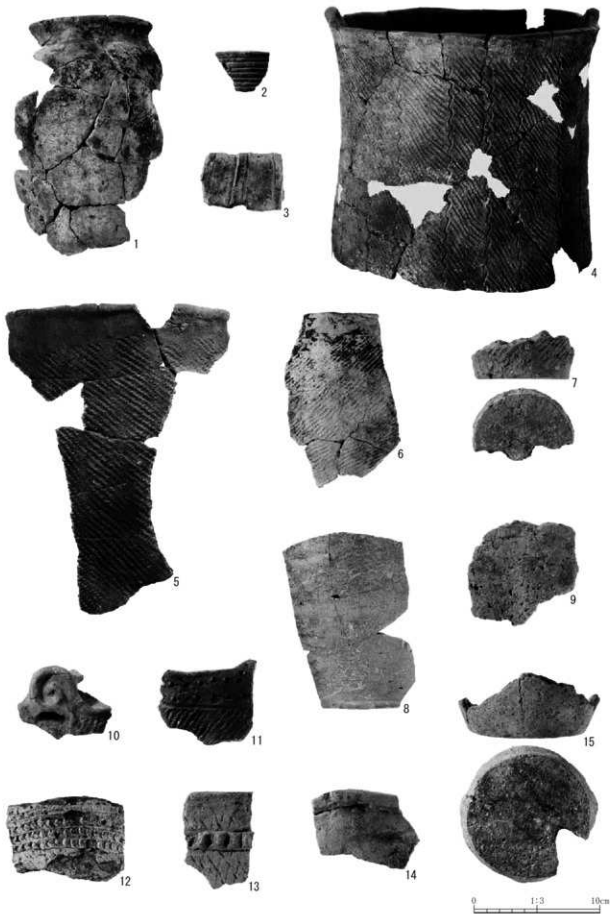


作業風景①

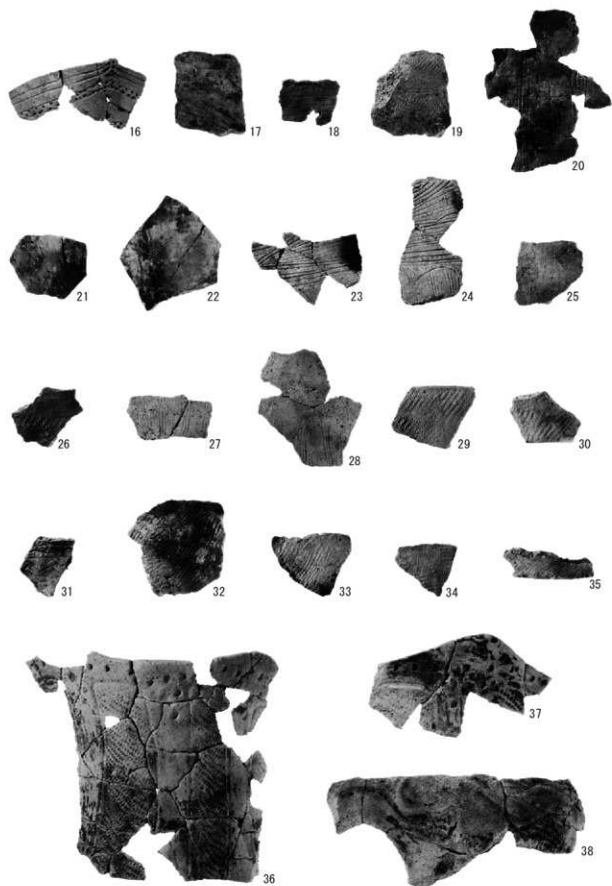


作業風景②

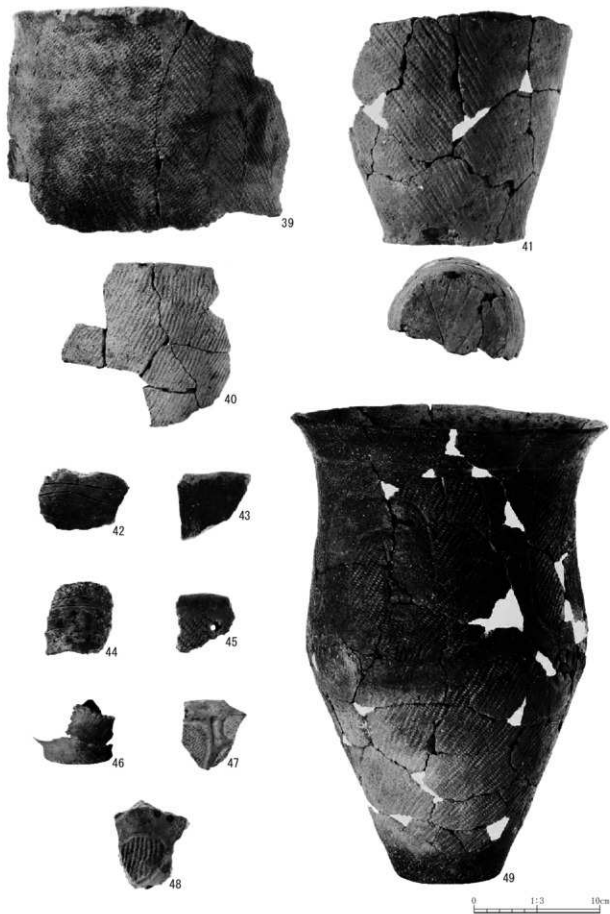
写真図版29 調査終了後、現地説明会、作業風景



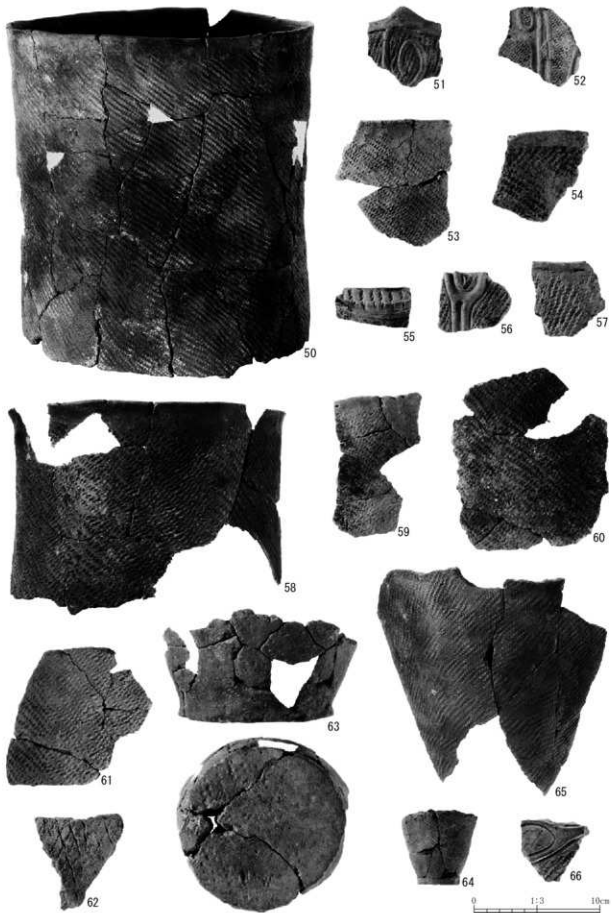
写真図版30 S 1 01・02出土土器



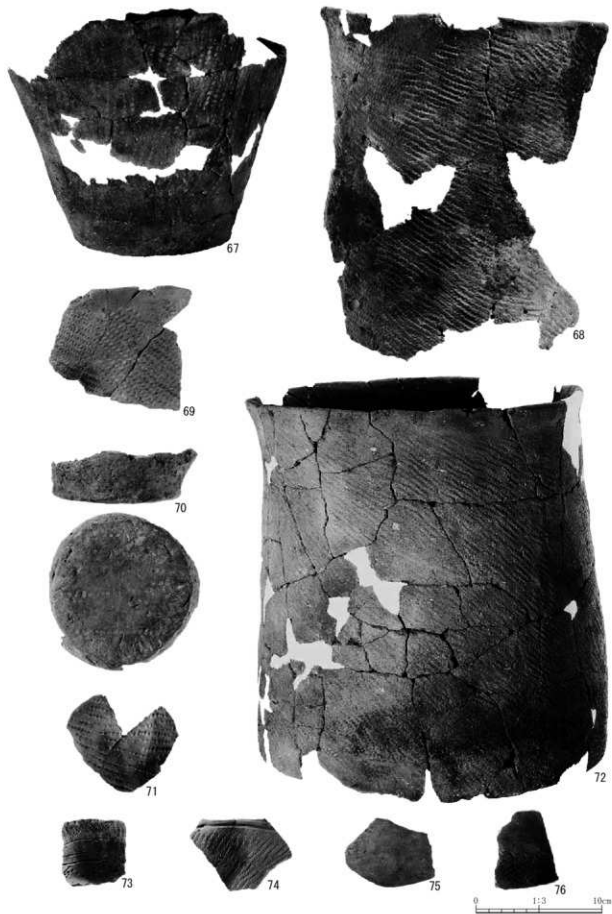
写真図版31 S 1 03~05・07出土土器



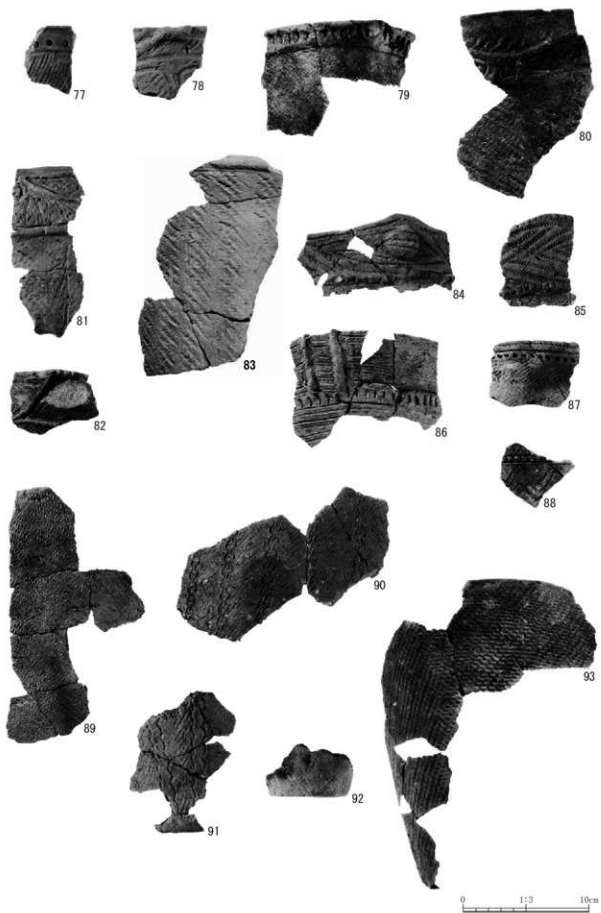
写真図版32 S 1 07・08・10・11・13出土土器



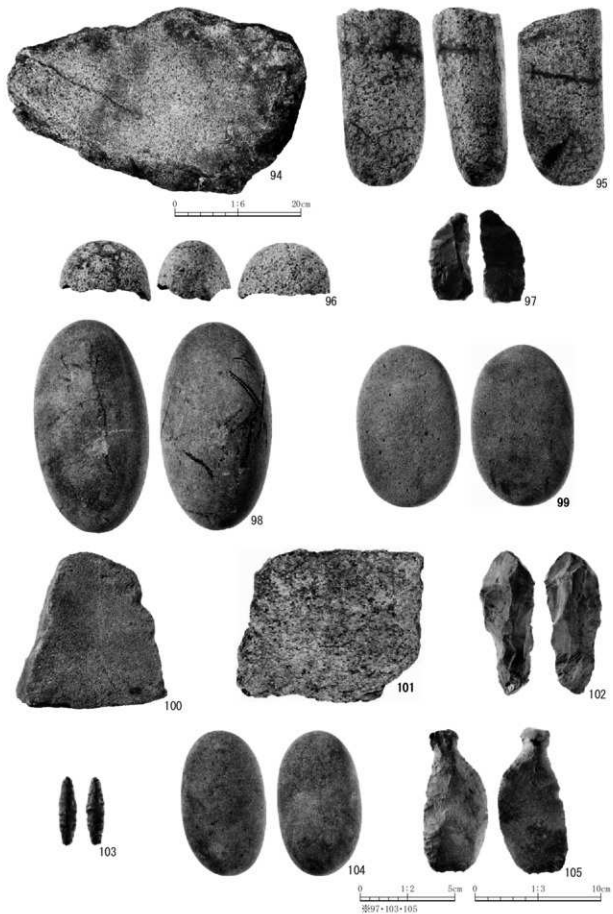
写真図版33 S 113・17・18・22出土土器



写真図版34 S 122、SK11・13・15、SF01、遺構外出土土器①



写真図版35 遺構外出土土器②



写真図版36 S 1 01・02・07出土石器・石製品



106



107



108



109



110



111



112



113

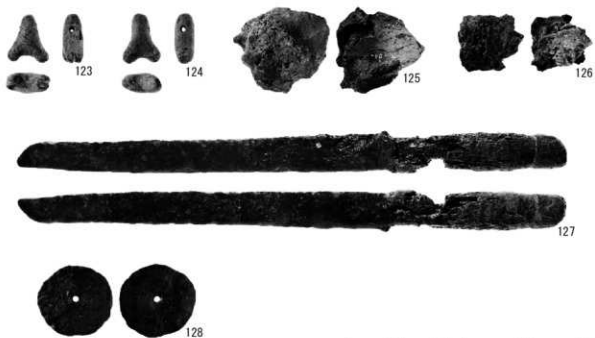


114



115





写真図版38 遺構外出土石器・石製品、土製品、鉄製品

報告書抄録

ふりがな	はまいわいずみせいきはつつちょうさほうこくしょ								
書名	浜岩泉Ⅲ遺跡発掘調査報告書								
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査								
巻次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第655集								
編著者名	小林弘卓・星雅之・立花雄太郎								
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL.(019)638-9001								
発行年月日	2016年3月22日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °				
岩手県下閉伊郡 浜岩泉Ⅲ遺跡 ほかい	岩手県下閉伊郡 田野畑村大字14-1	03484	K633-2047	39度 53分 23秒	141度 55分 00秒	2013.09.01 ～ 2013.12.20	2,070㎡	三陸沿岸道路建設 事業関連発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
浜岩泉Ⅲ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土 坑 土器埋設遺構 焼土遺構	11棟 15基 1基 1基	縄文土器、石器、土製品				
		弥生時代	竪穴住居跡 土 坑	6棟 5基	弥生土器、石器				
	集落跡 生産遺跡	平安時代	竪穴住居跡	2棟	土師器、石器、灰輪陶器、 鉄製品(刀・紡錘車)、 羽口、鉄滓類				
要約	<p>河岸段丘上の北から南に下る南向きの緩斜面地に立地する遺跡である。調査の結果、縄文時代中期・弥生時代中期～後期・平安時代の遺構・遺物が確認された。縄文時代中期では、複式炉を持つ竪穴住居跡やプラスチック状の貯蔵穴が数多く分布する。弥生時代中期～後期では、斜面下方にまとまって竪穴住居跡や土坑が見つかった。これに伴い、赤穴型式土器が出土している。平安時代では、鍛錬鍛冶が有する竪穴住居跡などが見つかり、刀や灰輪陶器が出土している。鉄生産に関連した集落であったことが窺える。今回の調査区は狭小なため、遺跡の全容は不明であるが、東西周辺に集落が広がる可能性が想定される。</p>								

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第655集

浜岩泉Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成28年3月14日

発行 平成28年3月22日

- 編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019)638-9001
- 発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号
電話 (0193)71-1724
- (公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019)654-2235
- 印刷 (有)ジロー印刷企画
〒020-0066 岩手県盛岡市上田2丁目17-4
電話 (019)651-6644